
ドラゴンボールViVid

黒紅茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンボールVivid

【Nコード】

N7622P

【作者名】

黒紅茶

【あらすじ】

魔人ブウを倒してから三年後。ドラゴンボールを使って魔法の存在する世界に向かった悟天とトランクス。そこで出会ったのは…。これはドラゴンボールZと魔法少女リリカルなのはVividをクロスオーバーさせた熱血ほのぼの格闘ライフです。現在、特別企画を開催中です。外伝の方も連載中！

プロローグ1

——魔人ブウを倒してから三年後……。地球は平和を保ち続け、
今もその平和に包まれていた。

「おーい！見つかったか悟天！！」

「うーうん。全然見つからないよ〜」

静かな光が森に遮られ不気味な雰囲気が漂う中、二人の少年は何かを捜し求めるように動き回って数時間ほどの時間が経過している。

「おつかしいなあ。ドラゴンレーダーだとこの辺にある筈なんだけ
どな〜」

薄紫色の髪を持つ少年の片手には丸い機械、そしてもう一人の黒髪
の少年は探し物を求めてあちこち動き待っていた。

「ん？ あっ！あつたーっ！ドラゴンボールを見つけたよト
ランクス君！」

「ホントか！？ よくやった。これで七つ全部そろったぞー」

黒髪の少年が大声で叫ぶ、その視線の先にはオレンジ色に輝く丸い宝石が地面に転がっていたのだ。幼い黒髪の少年は大喜びで両手にその宝石を抱える。

更にその宝石と同じような物体が幾つも彼等は所持しており、それらをすべて地面に一つずつ丁寧に置いていく。

「いいか悟天。この事はぜーったいに誰にも言うなよ？　もしママ達にバレたらこっぴどく叱られちゃうからな。」

「うん！　ボク誰にも言わないよ。」

「よし、じゃあ始めるぞ。——いでよ、シェンローン！」

宝石に対してまるで呪文の言葉を投げかけるように薄紫色の髪を持つ少年は口にした。そしてそれに反応するように眩い光を発する宝石——。

明るい青空は一気に薄い暗闇が広がる夜へ、異常気象というレベルを超えた現象が目の前で繰り広げられる中、少年達は無邪気な視線を空に向けていた。

「——…さあ、願いを言うがいい。どんな願いでも3つだけ叶えてやろう。」

大空に出現したのは巨大な竜、少年達を見下ろしながら願いを待つ。少年達は子供らしい笑顔を互いに浮かべながら魔法の言葉を口にした。

「オレと悟天を魔法の世界に連れてってください!」

「承知した…。」

「やったー!これで本で見た魔法の世界に行けるぞーっ!」

「ボク魔法でたくさんお菓子を出して食べちゃうもんね!」

夢物語のような会話を繰り返している間に彼等は静かにその場から姿を消していた。音を立てずに消失した後も残さずに、まるで彼等がその場にいた事実が消されているかのようだ。

「願いを叶えたぞ。さあ、次の願いを… あれ?」

一人取り残された竜は困り果てたようにその場を佇む。こうして魔法の世界にたどり着いた二人は壮絶な大冒険が待ち受けているのだ…。

プロローグ1（後書き）

はい、格闘少年と格闘少女が出会ったらどうなるかと妄想して作成しました。最初は悟天とトランクスだけです。後にZ戦士から誰かを向かわせようかとも考えています。

プロローグ2

「——やっぱ神龍だったか。いきなり夜になったからオラおどれえたぞ。」

二人が消失したその場にもう一人、やってきたのは四方八方に伸びた黒髪の道着を着込んだ男。目の前の古風な竜のことを知っているかのような口ぶりで話す。

「なあ、悟天とトランクス見なかったか？さっきまで二人の気を感じただけど。」

「…孫悟天とトランクスは一つ目の願いで魔法の世界に向かった。」

「魔法の世界？よくわかんねえけど、二人はその世界にむかったんだな。」

意味がわからない、といった風にきょとした表情を見せながら男は困ったような表情を見せる。後に逆立った黒髪を持つ男と全身緑色の男、更にはまた四方八方に伸びた男と似た男が空中から降り立つ。

「ち…あのバカ息子め。まったく成長してないな…。」

「ああ…悟飯の頃とは大違いだ。」

荒々しい口調で吐き捨てる男、それに同意する緑の男。どうやらこの三人は竜と男の対話を耳にしているようだ。

「お父さん。とりあえず、次の願いで二人を此処に呼び戻すというのは…。」

「そうだな。神龍！ 悟天とトランクスを此処に呼び戻してくんねえか。」

「…それは不可能だ。魔法の世界は無数に存在する…故にどの世界に向かったのかはわたしにもわからないのだ。」

「いいっ！？ そうなんか。困ったな、このまま悟天が帰ってこなかったらオラ、チチにメシ抜きにされちまうぞ。」

「そっという問題か…？」

食事を抜きにされたときのショックさは計り知れない、勿論悟天達のことにも心配してはいるが一人の男は食事が抜きにされることもそれに並ぶほどの恐怖らしい。

「面倒をかけさせやがって…オレが直接連れ戻してきてやる。」

「ま、待ってください！ 神龍はその魔法の世界が無数にあると言ってます。だからベジータさんが悟天達の世界に行ける保証は

ありません。」

「それに、仮にその世界に行けたとして、どうやって戻ってくるつもりだ？」

打つ手なしと言わんばかりの反論、どれも間違った論ではないせいでそれに対しての否定もできずに彼等は途方にくれてしまう。

「うーん、とりあえず一回戻って考えるか。みんなで考えればなにか方法が見つかるかしんねえし。」

「そうですね。それならカプセルコーポレーションに行きましょう。」

「ふん…。」

「なら、オレはデンドエを連れてくる。なにか知ってるかもしれんからな。」

それぞれの方向性を決めた男達はその場から姿を消す、一刻も早く魔法の世界へ飛ばされた少年達を見つけ出して連れ戻さなければならぬのだ。

「あの…お願いは？」

——
神龍はまたまた取り残されてしまっていた。

第1話 ヤンチャコンビ、魔法世界に降り立つ

視界に飛び込んできた世界は魔法の世界——辺り一面、暗闇で包まれた紺色の空が広がる市街地の上空に彼等はいた。

「うわっ！？ トランクス君！真っ暗だよ。」

「多分、夜だからじゃないのか？ ほら、月が見えるし。」

目線の先には輝かしく闇を照らす満月…どうにも周辺は地球とまったく変わりのない世界だ。

「それより、魔法の城を探そうぜ。そこに行けば魔法を教えてくれるはずだ！」

「うん！ …あれ？」

足は疎かに地面に足がついていないせいで奇妙な浮遊感、全身からくる落下の感覚が襲っていた。だが少年達は空中から地面へと落下している事は大した問題ではない。

問題は——。

「どうしたんだ悟天…？」

「トランクス君、舞空術が使えないよ。」

舞空術とは自身の気を使う事で空中を自由自在に飛び回る事ができる技。到底、一般人には使いこなす事などできないがこの少年達は習得していた。

「は？ なに言ってるんだよ。気をコントロールすれば……え？
上手くコントロールできない……！」

「ボクも…それにカラダの中の気が減ってる。」

悟天とトランクスは自身の気をコントロールしようと空中から落下する間に軽く集中して飛ぶように心がけてみる——だが上手くいかない。

というより気が減っているような、奇妙な喪失感があるのだ。自分の中の気が自身が知っている範疇よりずっと小さく足りない。

「さっきまでは普通にあつたのに…もしかして魔法の世界に来たからなのか？」

「きつとそうだよ！ 魔法の世界じゃ気が使えないんだ。」

「…って事はこのままだとオレ達は……。」

「ボク達は……。」

「——うわああああああっ!!!!!!」

舞空術を使う事ができない、となれば空中から地面への落下に抗う手段は何一つないということになる。直後に吹き荒れる激しい風に対しても何も抵抗できない。

よって悟天とトランクスはその強風によって小さな体はあらぬ方向へと放り投げられ、それぞれ別の方向に向かって吹き飛ばされてしまっただった…。

「——それで、クリスみんなに大人気！かわいいって！」

「ほんと?」

濡らした金色の髪を持った少女、ヴィヴィオは楽しそうに話していた。茶髪の女性、なのはと同じ金色の髪を持つ女性、フェイトはどつやら風呂を堪能中らしい。

「うわあああああ——!!!!!!」

「「「……?」」」

彼女達の会話を強制切断させるが如く、絶叫と共に落下音が木霊した。暫くの間、静寂が風呂を支配していたがそれを打ち破るような一言を少女は落とす。

「…ねえ、さっきの声はなんだろう？」

「わからないけど…とにかくわたし、様子を見てくるね。」

「なのはママ、わたしも一緒に行く！」

「ヴィヴィオ、なのは、まって…！」

慌てて三人は部屋から出るとすぐに服に着替える。さすがに何も着ていない状態で外に出る訳にもいかない、衣服を着た状態ですぐに庭に彼女達は視線を向けた。

其処には地面に傷跡を残した悟天の姿。それを目にした彼女達は互いの顔を見合わせて、戸惑いながらも静かに彼に近寄っていく…。

「君、大丈夫…！？」

「…どうやら気絶してるみたいだね。」

「ホントだ……。」

なのはとフェイトは起きる気配を感じさせない悟天の顔を覗き込む

と、本人はグルグルと目を回して気絶していた。外見からして自分と同年代である事にヴィヴィオも余計に戸惑った表情を浮かべる。

「と、とにかくこの子を運ばなきゃ…！」

「そうだね、暫くベッドで寝かせてみようか…。」

「起きてくれるといいんだけど…。」

なのはは地面に倒れている悟天を抱きかかえて部屋に戻り、すぐに自室のベッドに寝かせ、そして近くで落ちていた重量のある荷物をフェイトは手にとってベッドで寝る悟天の隣に荷物を置くのであった…。

——真夜中の公園。そこでは激しい攻防戦が繰り広げられ互いの拳をぶつけ防御してを繰り返していた。

「寝惚けた事抜かしてんじゃねエよッ！！ 昔の王様なんざ皆死んでる！生き残りや末裔達だって普通に生きてんだ！！」

激しい砂煙を引き起こして強風をも巻き起こす、高速で発生する攻撃と防御を瞬間的に繰り返し続ける。赤髪の女性はただ怒りに溢れ、

碧銀色の髪を持つ女性は冷たい視線を向けていた。

彼女達は暴風に逆らうように後方へと一気に飛んで距離を置く。それだけで周辺をかき乱す強風を発生させるほど彼女達が今起こしている戦闘はレベルが高い物なのだ。

「弱い王なら…この手でただ屠るまで。」

「この…バカったれがぁぁ!!」

怒りが頂点にまで湧き上がり、絶叫を上げるノーヴェ。強烈な爆風が天へと掲げられる中で発生したのは無数の光の道であった。重力に逆らうように空中の道を作り上げていく。

「ベルカの戦争も聖王戦争もッ!!」

「——ッ!？」

碧銀色の髪を持つ女性は自身が魔力で形成されたリング状の拘束具によって身動きが取れない状態である事によりやく理解する、両足と片足を封じられ動きを封じられてしまう。

「ベルカって国そのものも!もうとっくに終わってんだよッ!!」

光の道を走行し更なる加速を持って勢いをつける女性、真上から責

めてくる相手に焦りを隠しきれない碧銀色の髪の女性。

「リボルバー・スパイクツツ!!!」

「…終わってないんです。」

強烈な一撃、決して手加減されていない本気の蹴り。光の道を走行して更なる加速をつけパワーアップした手加減なしの蹴りを碧銀色の髪を持つ彼女の縛り損ねた片手で受け止められていた。

「私にとってはまだ何も…。」

空中から横切るように入れようとした蹴りを受け止めている間、体中は魔力で形成された鎖によって女性は縛れていた。ノーヴェはようやく気がついたのだ、敵は防御を捨てて反撃の準備をしていたことに。動きを止める鎖は恐らく、次の攻撃を確実に当てるための準備。

「霸王…!」

紫色の瞳と青い瞳、オッドアイの目が赤髪の女性を捉える。短時間の間に練り上げた力が瞬間的に拳に収束され強大な破壊力が伴って

いく。

拳を封じる拘束具を跡形もなく崩壊させ、気圧だけで圧倒させる魔力が拳に集中する…。

「断空け——。」

「わあああああああ~~~~~!!!」

ノーヴェが瞼を閉じた瞬間に響いた叫び声——まだ幼いその場に存在していない筈の少年の声が暗闇の中で響き渡る、意味不明と心底思っばかりのまま瞼をもう一度、女性は開けた。

「な……!!」

強烈な破壊力を込めた拳は何の間違いか、子供の腹へと激突して地面に全身を叩きつけ衝撃でバウンドを繰り返しながら一気に吹き飛ばされてしまう。

殺傷能力はないが幼い少年を気絶させるぐらいの威力は充分すぎるほどに持っている。寧ろ骨折などの重傷を引き起こしてしまうのではと思考を走らせる。

「お、おい…何が…!」

「いってて…一体なにがおきたんだ…。」

「立つた…！？」

苦々しく苦痛の表情を浮かべた薄い紫色の髪を持つ少年は片手を脇腹に添えて痛みに耐えていた。女性の拳はバウンドにより攻撃力を抑えていたとしても破壊力は充分すぎるほどにある。

にも関わらず少年を気絶に追い込む事さえできなければ立ち上がらせる事を可能としてしまった事実。赤髪の女性は驚きのあまり言葉を失ってしまった。

「……もしかしたら、この子が…！」

「ちよつ、おい！まてよ！何する気だ！？」

緑が薄く混ざった銀色の髪は風によって揺れる、静かな歩みでトランクスの前にまで。彼を見下ろしながら凜とした声で言葉を発する。

「あなたと私…どちらが強いか、試させていただきます。」

「…はあ！？」

「……へ？」

ノーヴェを縛り上げる鎖が解かれた直後、彼女のオッドアイの瞳は真っ直ぐにトランクスを捉えていた。…魔法の世界にやってきた二人、そして意味もわからず勝負を申し込まれたトランクスは一体ど

うなるのだろうか？

第1話 ヤンチャコンビ、魔法世界に降り立つ（後書き）

悟空「オッス！オラ悟空！！ どうやら二人とも無事に着いたみてえだな。けど、なんで舞空術が使えなくなっただんだ？」

ベジータ「ふん…修業をサボるからだ。帰ってきたら徹底的にしこいてやる。」

ピッコロ「だが、気の量まで変わるのは妙だな。」

悟飯「それにしても、トランクスに勝負を挑んだオッドアイの女性は何者なんでしょうか…。」

悟空「次回ドラゴンボールvivid」激突！ 霸王VSトランクス！」

トランクス「オレ、弱くなってる…！！」

第2話 激突！ 霸王VSトランクス！

威厳に溢れる碧銀の髪を持つ女性を前にしたトランクスは一体何がどうなっているのか理解できずにいた。

「えーと、お姉さん誰？ 試すってどういうこと？」

「私はハイデイ・E・S・カイザーアーツ正統…『霸王』と名乗らせていただきます。」

「試すというのは、文字通り…私とあなたがどちらが強いかな勝負をするという事になります。」

「霸王…？ よくわからないけど、お姉さんと闘えばいいんだね。じゃあさ、オレが勝てたら魔法を教えてよ。オレ、魔法で遊園地を作りたいんだ！」

「…はあ？」

支離滅裂な言動を前にしても女性は無表情を貫いていた。

（……この子供からは魔力が感じられない？）

あの拳を受けきって尚、立ち上がることもできればまともに喋る事もできる少年に驚きは隠しきれないが、女性にとってはこの少年に不可解な点が幾つも残っている。

魔力が感知できない点も勿論それも当てはまっているが…その前に、目の前にいるこの少年は一体どこからやってきた？

「…その前に、あなたには魔力自体がありませんので魔法を扱う事ができません。」

「くそ！逃げろ、ガキーっ！！」

今頃になってダメージが体に通用してきたのかノーヴェは上手く行動できない中で少年へと叫ぶ。だがその直後、軽やかなステップと共に強烈な拳を叩き込もうとする女性。

「えっ？それってどういう……うわあああっ！！」

呆気なく腹に激突。そのまま勢いよく吹き飛ばされ地面へと全身を強打させてしまう——どうやら状況を上手く理解していないせいでトランクスは反応に遅れたようだ。

「いつて……コラーッ！いきなり攻撃するなんてズルいじゃないか！！」

「——隙だらけですね。」

決して女性自身も万全の状態で戦っているわけではない。ノーヴェ

の攻撃を受け止めたとはいえ、様々なダメージが体に残っているのだ。

攻撃自体の威力もスピードも全て万全の状態ではないにしろ、油断してしまっているトランクスにとって充分に苦戦させられてしまう。

「また来るぞ!!」

「わあっ!?!」

女性はトランクスに急接近した後――殴る、蹴るの高速連続攻撃が次々と雨のように降り注ぐ、だがそれでもトランクスは避け続けた。

（さっきの攻撃のせいで、眩暈が……。）

頭が上手く働かないのだ。連続攻撃を下していても眩暈のせいで命中率は低い、故に一撃も当たる事はなく全て空振りで終わっていたのだ。

「ねえ、本気でやってるの？　言っとくけど、そんな攻撃じゃオレには当たらないよ。」

「……っ!!」

その発言が挑発として通用してしまったのか、女性は次々と殴る蹴るをひたすら繰り返えし暴力の雨を降らし続ける。

以前よりも命中率と威力が増した凄まじい攻撃の数々。だがそれでもトランクスに当たる事はなかった。

「よっ…と！ たあっ…！」

素早い連続攻撃を避け続け、最後に隙をついて足払いを仕掛けて相手の体制を一気に崩していく。刹那の浮遊感に襲われる相手に容赦なく蹴り上げを図る。

「ッぐ…！？」

「——でやああああ…あ、あれ…？」

上空へと吹き飛ばされた女性は体制を立て直す事すら叶わず、正に隙だらけの状態。最後の重い蹴りを食らわそうと高くジャンプするが——蹴りは届かなかった。

勢いが途中で途切れ、不本意な喪失感が刹那に焼きつく。空中を支配し動いていた筈の少年の動きは急停止して気味の悪い浮遊感が全身から浴びせられる。

（忘れてた！ 今のオレはほとんど気が使えなかったんだ…。）

「何やってんだよあのガキ!？」

「……………」

何時ものような戦いを行おうとすれば必ず途中で詰まってしまうのだ。気の半減は戦闘力が半減したも同然、トランクスは自身が弱くなっている事を改めて思い知ると同時に形勢は一気に逆転してしまう。

「はあっ!!」

「ぐあああっ!!」

瞬時に上空にいる碧銀の髪を持つ女性から重圧な蹴りを食らって一気に地面へと急降下して激突する。コンクリートが破壊されるのはと思うほどの威力がトランクスの全身を襲う。

「…あなたは確かに強いですが、その油断がある限り霸王には勝てません。」

「っぐ…しまった! カラダが挟まって動けない…。」

全身が地面に衝突した際の衝撃によって埋もれてしまっており、故にトランクスは動けない、女性は勢いをつけて空中を急降下、拳に練り上げられたが収束されていく。

「――霸王・断空拳！！！」

ノーヴェを一撃で戦闘不能にさせた凄まじい破壊力が込められた拳が真っ直ぐにトランクスへと打ち下ろされる刹那、亀裂が入り込んだ地面から金色の粒子が煌いた。

「はああああっ！！！」

「な…！？」

拳は真っ直ぐに受け止められていた。女性の視界に入り込んでいたのは金色のオーラに身を包む少年の姿であり、髪の色も瞳の色も先程の物とは変貌していたのだ。

一瞬、誰なのかと見間違うほど外見が様変わりしてしまっており、女性自身も困惑の色を隠しきれない。ノーヴェ自身もトランクスの姿に冷や汗を額から流していた。

「だああーっ！！！」

「ぐっつ！！！」

輝かしき金髪碧眼の姿を持った少年は倒れていた片手を重い拳とし

て女性の腹へと叩き込む、その威力は信じられないほどの怪力が彼女を襲い体制を崩したのだ。

「あ……ぐ……。」

先程の攻撃はまったくもってトランクスには通用していない、女性は揺らぐ視界の中で金色のオーラに身を包んだ少年を見据えた後――地面に倒れた。

動く様子がないことを確認するとトランクスはすぐに超サイヤ人状態を解く、金色のオーラは消え去っていき薄紫色の髪と目つきの悪い青色の瞳へと姿が元通りになる。

「思わず超サイヤ人に変身しちゃったけど、やっぱりオレ弱くなってるなあ。」

「あ、あれで弱いなあ!？」

(それにしても、このお姉さんは――……。)

動けるようになったノーヴエは倒れた女性とトランクスに目を奪われていた、この女性の事や金色のオーラなど謎が深まるばかりなのだ。

暫くすると眩い光が女性を包み込んでいき、消失した頃には碧銀の髪をツインテールにさせた少女が地面に先程の女性のように倒れていた。

「ええっ！？　お、女の子になっちゃ…った…。」

「お、おい…！」

トランクスもまた彼女と同じように体制が崩れそのまま地面へと倒れてしまう、何がなんだかわからないまま一人になってしまったノ
ーヴェは重いため息しか出なかった。

「一体どうなってんだよ…とりあえず、家に運ぶしかねーか…。」

二人の怪我と比べればノーヴェの怪我は軽症であり時間が経っている事もある。少し和らいでいる。

倒れてしまった二人をこのまま放っておくわけにもいかなかったの
で家に連れて行くことにするのであった…。

第2話 激突！ 霸王VSトランクス！（後書き）

悟空「オッス！オラ悟空！！　なんとかトランクスは勝てたみてえだな。」

ベジータ「ち…あんな女如きに手こずりやがって…。」

ピッコロ「はあ…。」

悟飯「そういえば、悟天はどうなったんだろう。」

悟空「次回ドラゴンボールVivid「ミッドチルダへようこそ！魔法少女との出会い」」

悟天「ミッドチルダ？　ボクそんなもん食べたことない！」

第3話 ミッドチルダへようこそ！魔法少女との出会い

柔らかい物体にしがみついて生暖かい感触が伝わってくる、まだ眠気が残っているせいで状況が今一つわからない中で静かに悟天は寝言を口にしてた。

「んっもう食べられないよ。」

「……すー。。」

朝日の光を浴びた金色の髪は輝いており、悟天はその金色に輝く髪を持つ女性の膝をしがみつくように枕代わりにして寝ていたのだ。
——唐突に「チリリリリッ！」と騒がしい音が木霊して一気に頭を目覚めさせるキツカケとなった。

「わっ！　なんだなんだ…！！」

「もうこんな時間…？　ふああ…。。」

悟天は飛び起きて音の正体に気がつくのと冷静さを取り戻していく、どうやら目覚まし時計が一定の時間になったので音が鳴っただけらしい。

「……あれ？　ここ何処…？」

「此処はなのはの家だよ……。」

金髪の髪を持った女性は自分の疑問に答えてくれたが——それでも完璧に冷静さを取り戻せるわけもなく、寧ろ余計に頭の中でパニックになっていく。

「わあっ！？ お姉ちゃん誰……？」

「私はフェイト、フェイト・T・ハラオウン……フェイトって呼んでところで、君のお名前……聞かせてくれる？」

「ボクは……。」

「——フェイトママ……！朝ご飯できたよー！！」

聞いた事もない少女の声が部屋にまでたどりつく、フェイトは「すぐ行くよー！」と返事を返して自己紹介は後回しにされてしまった。

「ごめんね、朝ご飯の時に教えてくれるといいな……みんなのことも紹介したいし。」

「うん！いいよー。」

特に気にする様子もなく明るい返答をする悟天に思わず優しげな笑

みを露にするフェイト。成り行き上、朝ご飯を共に食べる事になつて部屋から出ると階段を下りていく。

「おはよう！フェイトママ……あ。」

「フェイトちゃん、おはよう。…それから、君もおはよう。」

「へ？ お、おはよう…。」

「えっと、とりあえず話は朝ご飯を食べてからにしようか…？」

ひとまず朝食を取るために全員、椅子に腰をかけ、テーブルにはオムレツやサラダなどが並べられていた。

——数十分後には全員が朝食を済ませてようやく自己紹介をはじめようとしたのだが…。

「おかわりーっ！」

「ま、まだ食べるのー！？」

「ふえ、フェイトちゃん…」ご飯残ってる…？」

「うっん、もうあれで最後だよ…。」

「そうなの？ だったらいいや。」

しかし終わっていなかった者が一名、図々しくも悟天は炊飯器の残りのご飯を全て一人で食べ尽くしてしまったのだ。

「そんなに食べても大丈夫なの…?」

「うん、大丈夫だよ。後30杯は食べられるから。」

恐る恐る聞いたヴィヴィオの質問に明るい言葉を投げる悟天、その後には包み込んできた静寂に悟天は首を傾げながら周りを見渡していた。

「そ、そうなんだ…よく食べるんだね…あと、そろそろ自己紹介してもらえとうれしいな。」

「わかった。ボクは孫悟天だよ。」

「（えっ、そん…ごてん…）。…わたしは高町なのは、なのはでいいよ。よろしくね、悟天くん。」

「わたしは高町ヴィヴィオだよ。よろしくね、悟天くん!」

「よろしく!なのはさん、フェイトさん、ヴィヴィオちゃん。」

互いに明るい笑顔を浮かべて自己紹介を交わす。だが一人、なのは

自身は怪奇な表情を浮かべて様子を眺めるように見据えていたのだ。

「…ところで悟天くん、あなたは一体どこからきたの？ミッドチルダじゃなさそうだけど…」

「ミッドチルダ？ 違うよ、ボクは地球から…あ、そうだ！ ボク魔法を教わりにきたんだった！！」

その言葉を聞いた悟天を除いた三人はそれぞれ異なる反応を示す、なのはは地球に反応してフェイトは魔法に、ヴィヴィオはミッドチルダ出身ではない事に。

悟天は椅子から降りると近くに置かれていた荷物に手を伸ばす。玩具やお菓子を取り出していくが円盤のような機械が取り出された瞬間、なのはの目はその機械に注目する。

「……悟天くん、これってもしかしてドラゴンレーダー？」

「な、なのは…？」

「そうだよ。あれ？ でも、なんで知ってるの？」

きよとん、とした表情で見守るヴィヴィオはもはや会話についていけない様子であった。フェイトもなのはが言い当てた事に呆気にとられている。

「…悟天くんは兄弟とかいたりするのかな。もしいるのなら名前も教えてほしいな。」

「うん！兄ちゃんがいるけど…名前は孫悟飯だよ。」

「やつぱりそうなんだ…。」

ヴィヴィオもフェイトも言葉を失ってただ二人を見守るだけであった、そんな中での自身は懐かしむような優しい微笑を浮かべて話し出す。

「…なんていうか、フェイトちゃん。わたしが子供の頃に突然行方不明になったこと…覚えてる？」

「覚えてるよ…１ヶ月ほど行方不明になったあの事件のことだよね？」

「ゆ、行方不明？なのはママ…いなくなったこと、あった？」

「にやはは、ごめんねヴィヴィオ…わたしの子供の頃のお話なんだけど……。」

——軽く彼女は思い出話でも語りだすように説明し始める。なのは子供の頃に突然、行方不明となった時期があるらしい。

フェイトの言う通り、１ヶ月ほどの期間でありその期間内で彼女は異世界で過ごしていたらしい。その異世界では１週間ほど過ごしたのだが元の世界では１ヶ月も時間は過ぎていたという昔話だ。

「その異世界でね、孫悟飯って子にお世話になったんだ…だから孫悟天って名前を聞いたときは驚いたかな。」

「そういえば、昔不思議な女の子に出会ったって兄ちゃん言ってたわけ。」

「悟天くん、悟飯くんは元気にしてるの？」

「兄ちゃんは元気だよ。今は大学ってところで夢を叶える為に勉強してるんだ。」

「そうなんだ…よかった。……あ、あと悟天くん、悟飯くんには仲の良い女の子とかいるの？」

何故か頬を赤くしながら訪ねるのはにヴィヴィオは首を傾げてしまっ、一方でフェイトは何かを察したのかクスツと小さな声で笑っていた。

「仲の良い女の子？ うーん、ビーデルさんかな。」

「ビーデルさん…って、どんな子なの？」

「ビーデルさんは兄ちゃんと高校からの友達で、一緒にグレートサイヤマンをやっけて、ミスター・サタンの子供で気が強いんだ。」

「なのは、そろそろ出勤時間。ヴィヴィオもそろそろ行った方がいい

いよ。」

このまま放っておけば長い話になりかねない事を見計らった上でフエイトは話題を切り出す。当然、それを合図として会話は中断となった。

「ええっ、もうこんな時間!？」

「ごめんね悟天くん!それとフエイトちゃん、悟天くんのこと任せていいかな…今日は休みだったと思うんだけど。」

「うん、大丈夫…任せて。」

慌てて二人は準備に取り掛かる間、フエイトと悟天はその様子を見守りながら二人は家を飛び出していつてしまう。
二人とも意外な話を聞かされ驚きの連続ではあったがそれでもフエイト自身は落ち着きを保って改めて悟天に目を向ける。

「さっきの話の続き…といきたいけど、悟天は少し匂うから一緒にお風呂に入ろっか?」

「お風呂かあ…うん!入る入るーっ!」

無邪気な笑みと共に平然と口にした悟天、どうやら何も抵抗感がないらしくフエイトもまた母親のような微笑を浮かべていた。

「わぁ〜おつきいお風呂だな。トランクスくん家みたいだ。」

数分の時間が流れた頃には悟天とフェイトは風呂場に出ていた、悟天はただ無邪気に風呂場を眺めて見渡している。

本来なら抵抗感が出てくる物なのだが悟天自身の甘えん坊な性格に問題があり、そしてフェイトの過保護さから招いた結果だった。

「…なのはに話してくれたお話の続き、聞かせてくれる…?」

「お話ってビーデルさんのこと?」

「ううん、どうやって此处に来れたのかとか…どうして魔法を教わりにきたのか、とか。」

「あっ!忘れてた。ちょっと待ってて!」

「う、悟天…!?」

悟天は風呂場から飛び出していくと自身の荷物に手をかけて何かを取り出す。それは一冊の分厚い本であり、わざわざ手にとって風呂場に持ってきていた。

「此処にはドラゴンボールを集めて神龍に頼んで来たんだ。魔法の世界に行けばこの本みたいに魔法を使えると思ったから。」

「これは…おとぎ話みたいだね。」

まだ湯を被っていないだけあって本に触っても特に問題がないのでフェイトは悟天の持つ分厚い本の中身をペラペラと捲っていく。内容に触れていると大体の悟天の考えが読めてきたフェイトは本を閉じて改め問いを投げてみる。

「…悟天はどんな魔法を使いたいの？」

「えへへ、ボクは魔法でいくら食べてもなくならないケーキとお菓子の国を造るんだ。」

笑顔で語りだす悟天、お菓子の国はあの分厚い本の内容で登場しておりそれを想像しているのではないかとフェイトはすぐに推測が浮かんだ。

「そ、そうなんだ…でもごめんね。そういう魔法はこっちの世界にはないんだ。」

「ええ〜！？ そんなあ…ボク楽しみにしてたのに〜。」

わざわざドラゴンボールを7個集め、異世界に飛ばされてでも探し出そうとした自らが望む魔法がないと告げられ今にも泣きそうな表情を浮かべてしまう悟天。

「え、えっと、ごめんね悟天……代わりに私が魔法を見せてあげるね。」

「ホント！ 絶対だよ、約束だからね！！」

「うん、約束する…けどあとでね？」

優しく声をかけてなんとか場を落ち着かせようとする、それが上手く成功して悟天は笑顔になっていた。

「あ、トランクスくんにも教えないと…。でも、気が探れないから何処にいるかわからないや…。」

「そのトランクスくんとか気っていうのもお風呂に入りながら教えてくれる？」

またもや長い話になりそうなのでフェイトはすぐに風呂へと切り上げる。二人は湯船に浸って暫くの間、楽しそうに会話を続けた結果…。

「超サイヤ人って…？」

「みせてあげるよ。はあっ！」

行き着いた話題は超サイヤ人——なのがいいが悟天は説明しようと超サイヤ人になった瞬間、物凄い爆音と共に浴槽があっけなく破壊されてしまったのだ。

わけもわからずフェイトは言葉を失い、金色のオーラに身を包み、逆立った金髪と碧眼の姿に変貌した悟天を見つめていたのだった…。

第3話 ミッドチルダへようこそ！魔法少女との出会い（後書き）

悟空「オッス！オラ悟空！！ あちゃゝゝ悟天、風呂ん中で超サイヤ人になっちゃダメだぞ。」

ピッコロ「…孫、お前も以前似たような事をしてなかったか？」

クリリン「しかし、悟飯も隅におけないなゝゝって悟飯は？」

ヤジロベー「悟飯なら用事ができたと言って行っちゃったぎゃ。」

ベジータ「トランクス、オレに恥をかかせるような事はするなよ。」

悟空「次回ドラゴンボールVivid「果たせ霸王の悲願！王の血統を受け継ぐサイヤ人トランクス」」

トランクス「ええゝゝ！？ また闘うのゝゝ！！」

第4話 果たせ霸王の悲願！王の血統を受け継ぐサイヤ人トランクス

女性の声が耳に入ってくると同時に何人も人の気配を肌身で感じ取るトランクス、更に次々と他の女性のような声が降りかかってくる。

トランクスはノーヴェエの家のベッドで寝かされていた、あの少女との戦闘により二人とも気絶してしまった所をノーヴェエがわざわざ運んできてくれたのだ。

「とりあえず、あの男の子が起きてからこっちの説明はさせてもらうね。」

「…わかりました。」

「ん…この匂いは…？」

静かに目を覚ませば見知らぬ部屋と見知らぬ声、だが一部はどこかで聞いたことある凜とした声と甲高い声。

更に言うなら食べ物の匂いも漂っているのだ、それと同時にトランクスは自身の空腹状態に気づいて尚更空腹感が高まってしまったようにも感じてしまう。

「よう、やっと起きたか。」

「へ？ えっと……。」

赤い髪を肩につくかどうかほどの長さを持つショートヘアーの女性が静かに部屋に入ってくると同時にトランクスと目が合う。

（そういえば、あの後オレ倒れちゃったんだよな。…ってことはこのお姉さんにオレは誘拐されたのか…！）

あらぬことを想像していくトランクスは次第に警戒した目線になっていく、だがその前にノーヴェはまるで思考を中断させるが如く言い放つ。

「あたしはノーヴェだ、とりあえず朝食をとりたいからテーブルに来てくれ。ついでに話もな。」

「話？ あ、うん…わかったよ。」

勿論そんなことを考えているわけもないのでトランクスにとっては意外な回答が降ってきたも同然、目を丸くさせながらトランクスはノーヴェの後を追う。

ノーヴェについていった結果、行き着いた部屋にはテーブルの上に朝食が並べられていたのだ。更に周りには複数の女性の姿がトランクスの視界に入ってくる。

そんな中でトランクスは一人の少女に視線を向いてしまっ、というのも女性が大勢いるこのメンバーの中でこの少女は少し浮いている——というよりトランクスからすればどこか見覚えのある少女なのだ。

「……ああーっ!!」

「え……。」

トランクスはすぐにその少女の正体を見破ってしまう、眠る前に突然襲い掛かってきた女性だ。碧銀の髪と特徴的な青と紫の虹彩異色の瞳は一度覚えてしまえば忘れられない顔立ちである。

あまりに驚いたのか指を向けられた少女は困惑した態度でどう対応すればいいか困り果ててしまっていた。ティアナは少年の反応に驚いたような呆れたような苦笑いを浮かべながら様子を見守る。

「うん、元気で結構！とりあえず一緒に朝ご飯にしない？」

「その時に色々お話も聞かせてくれると嬉しいんだけど……。」

「オレは別にいいよ。」

「そっか、それじゃあそっちの椅子に座ってくれるかな？」

青髪の女性は笑顔を浮かべながら指示された椅子にトランクスは腰を下ろす。改めて部屋に全員が集まったかと思える状況。

少しの間に沈黙が流れ込むがそれを崩した一言を青髪の女性は微笑を崩さずに口で告げた途端に視線は女性の方へと集まっていく。

「まずは自己紹介からだね、あたしはスバル・ナカジマ…ノーヴェのお姉さんってところかな。それでこっちがあたしの親友で本局執務官の……。」

「ティアナ・ランスターです。」

スバルとノーヴェは姉妹というだけあって外見は似ているなど感じさせる、故にトランクスもそう感じていた。オレンジ色の髪を背中ほど伸ばした女性はこの一家の中では一番浮いてるだろう。

しかしそれでも少女は未だに不安が胸に残りつつあるのか暗い表情を一切崩さずに話を聞き続ける。一方でトランクスは少女のような暗い表情を浮かべることはなかった。

「アインハルト・ストラトスです…。」

「オレはトランクスだよ。よろしく!」

「うん、よろしく二人とも。ところで本題だけど…アインハルトはどうして皆を襲ったのかな。」

「確か大昔のベルカの戦争がお前の中ではまた終わってないんだっ
たか?んで自分の強さを知りたくて…。」

ノーヴェとアインハルトが交戦中に彼女が口に出していた事を思い返しながら話していく。少女は静かに頷きながら話はどんどん進められる。

「…あとはなんだ、聖王と冥王をブツ飛ばしたいんだっただか？」

「最後のは……少し違います。」

重苦しい表情を浮かべた途端に隠すように俯く、膝に置かれ握り締められた手は震えだす。思った以上の反応を見せられトランクスを除いた女性陣は驚いた表情を見せていた。

「古きベルカのどの王よりも覇王のこの身が強くなること…それを証明できればいいだけで……。」

顔を上げた途端、ノーヴェと目が合い視線を交し合う。ぐっと力強く握り締められた拳と決意で固められた瞳が彼女を射抜いている。

「ふーん、ようするにアインハルトちゃんは誰よりも強くなりたいってことだね？」

「…それからもう一つ目標があります。」

悲しみに溢れた表情から一変、アインハルトの虹彩異色は隣にいる

トランクスの方に向けられていた。三人ともわけがわからず様子を見守ることにする。

だが一番にわけがわからないのはトランクスだった。話を無視されたかと思えばこちらに顔を向かれて一体何なのかと返答を待ってみれば――。

「…トランクスさんに勝つことです。」

「……え？」

「おいおい……。」

自身の強さを求め続けるアインハルトにとってはトランクスとの勝負による敗北は何か胸に響いた物がある、何よりトランクス自身は魔力を持っていない。

この世界では元々魔力を持っていなければ一般市民と対して変わらないこともあってトランクスの敗北は衝撃的だったのだろう。

「そっぴゃ、お前一体どっからきたんだ？」

「どこから…って地球からだよ。ドラゴンボール…と言ってもわからないか。」

トランクスは此処にまで来るキツカケとなったドラゴンボールについてや魔法の世界について、もう一人の悟天という少年について細かく説明していく。

途中で彼女達の目が丸くなっていくことに不自然に思ってしまった、トランクスからすればアインハルトの話こそが不自然に感じざるをえないのだ。

戸惑いを露にするスバルを前にしながらトランクスは全員の態度がおかしくなっていることに首をかしげて様子を眺める。

「そ、それって本当……?」

「本当だよ。もしかして疑ってるの?」

「いや、そうじゃねえよ……。」

途方もなく信じられない話が四人の本音なのだ、故に信じられないといった表情を浮かべているが話した本人であるトランクスは嘘をまったく吐いていない。

その事をしっかりと彼女達は見抜いていた。だからこそ余計に信じられないという感情もより一層強くなっていたのだ。

「…事情はわかったけど、あとで近くの署に一緒に来てくれる?」

「いいよー。ついでに悟天も探さないとだしね。」

「…あの、少しいいですか。」

間が空いた所でアインハルトは話を切り出そうと口にする、残りの

四人の視線が一気にアインハルトへと集中すると同時に彼女の二つの色を持つ瞳を全員に向けながら語りだす。

それは彼女が最も追求したい分野であり挑戦状だった。

「トランクスさんと勝負がしたいんです、時間はそちらにお任せしますが…。」

「えっ！？ でも、勝負なら昨日したじゃないか。やっぱり調子が悪かったから？」

「あの時はノーヴェさんの攻撃を受けていたので…万全の状態で戦ってみたいんです。」

「そういうことが…いいぜ。けど、またオレが勝っちゃうよ。」

「…次は負けません。」

「じゃあ話も纏まったことだし…そろそろ署に行く支度をしようか。」

スバルは優しい微笑を称えながら全員に告げる、朝食も取り終えた所で全員は早速署に向かうために支度を始めていく。

途中、アインハルトは今日は学校があるからという理由により用意する荷物は周りと比べて非常に多くトランクスからすれば大変そう
な印象が焼き付くのだった。

ノーヴェの家から一番近い署である湾岸第六警防署に到着すれば早速話などを聞く三人。だがトランクスだけはとばかりなので腑に落ちない気分で注意を聞いていた。

後にもう喧嘩はしないという方針で決まった所ですぐに部屋から出ることができたのだ。思った以上に早く帰してくれて喜ぶところではある。

「まったく、なんでオレまで怒られなきゃいけないんだよ。」

「……すみません。」

「あ……いや、そこまで気にしないでいいから。」

「ですが、私が襲わなければこんな事には……。」

アインハルトが襲い掛かったことが発端となった為にそれを一番強く責任を感じていたのもアインハルトだった。

署に来る前までは明るさを取り戻していたが今では責任感からまた暗い表情と鳴ってしまっており、トランクスもまた途方にくれていたのだ。

「あーもう！終わってしまったことをいつまでも気にしたってしょうがないだろ。次から気をつければいいの！わかった？」

「……そうですね。」

「それと、オレのことは呼び捨てでいいよ。見たところオレとトシ同じくらいだし。」

「え…ですが…。」

「いいからいいから。ほら、言ってみて。」

「……ト、トランクス、さん。」

丁寧語を決して外さないアインハルトにとって相手呼び捨てで呼ぶこと自体がまったく慣れない喋り方であった。だが逆にトランクスにとっては常に丁寧語で更に自分の名前をさん付けで呼ばれること自体が慣れていなかったのだ。

「だーかーらー！なんで“さん”を……わあっ！！？」

「ようつ、何話してたんだ？」

「…色々です。」

突然ノーヴェが突拍子もなく会話に乱入すると同時にすぐ近くにいたトランクスの頬に冷えた缶を押し付ける。

冷たい感触が頬から伝わってきたことにトランクスは慌しい反応を示せば満足そうにノーヴェは笑っていた。

「で…あのさ、前から気になっていたんだけどよ。」

自販機で購入した円柱のような形状を持つ缶をトランクス、そしてアインハルトに渡していくと自身も椅子に座ってその缶の中身を飲み始める。

「お前がこだわってる戦争のことについて…詳しく聞かせてくれねーか？」

必要な事情はすでにしてしまったものの、詳しい戦争の内容については彼等には話していない。

改めてノーヴェは問いを投げかけるとアインハルトは再び暗い表情のまま一度は俯いてしまうものの、暫くすれば顔を上げて視線を交わし合おうとする。

「——諸王戦乱の時代…。武技において最強を誇った一人の王女がいました…後の最後のゆりかごの聖王。」

霸王の記憶を受け継いでいるアインハルトの脳裏にはその記憶の中に出てきた女性を映像のように思い浮かべながら語り出す。

肖像画でその女性の姿を確認することはできるが映像となってその女性を見ることができるのは霸王の子孫であるアインハルトだけだろう。

「かつて霸王イングヴァルトは彼女に勝利することができなかった

んです…。」

「それで時代を超えて再戦……か？」

「霸王の血は歴史の中で薄れていますが時折、その血が色濃く蘇る事があります……。」

色濃く蘇っている、それがアインハルトなのだろうとすぐにノーヴェとトランクスは察することができていた。

「碧銀の髪やこの虹色異色…霸王の身体資質と霸王流、それらと一緒にに少しの記憶もこの体は受け継いでいます。」

自分の胸に手を添え、突然悲願の思いが溢れ出して今にも泣きそうな表情になっていけば声も多少荒げ始めていく。

「弱かったせいで強くなかったせいで彼は彼女を救えなかった…！……そんな数百年分の後悔が…私の中にあるんです。」

数百年にも及ぶ霸王の悲願、突然アインハルトはこちらに顔を向けたかと思えば彼女の虹彩異色の瞳には涙が積もっていた。

「だけど、この世界にはぶつける相手がもつけない…救うべき相手も守るべき国も世界も！」

「…いるよ、お前の拳を受け止めてくれる奴はちゃんという。」

涙が止まらなくなり頬を伝っていく中で涙を止めさせた言葉をノーヴェは投げかけてアインハルトは泣くことをやめる。

内心では疑いの感情が湧き上がってくるがそれでも自分の思いや拳を受け止めてくれる人がいるのだと思えば気が楽になりつつはあった。

「そうそう、なんだったらオレがアインハルトちゃんが納得するまで受け止めてあげるよ。それに、一応オレも王族なんだぜ。サイヤ人のだけど…。」

椅子から立ち上がってアインハルトに歩み寄れば自信満々そうにトランクスは呟く、元々彼の父親が王子なのでその子供であるトランクスは歴とした王族だろう。

確かにトランクスほどの実力があれば受け止めてくれるかもしれないと一瞬思考が脳裏に浮かんたアインハルトは静かに「……わかりました。」と返答した。

（どうせ元の世界には帰れないし、オレにとってもいい修行になるからね。）

トランクスはこの世界に立ち寄ってから日も浅い、アインハルトの言う戦争や王家についてはまったく理解していないのだ。

王家についてはアインハルトを通じて多少知ることができたがそれでもちゃんとした知識のない浅知恵程度である。

それでも泣き出してしまうアインハルトを放っておけるほど非情ではない、彼等は王と王の勝負の約束を結ぶのであった。

「…それからもう一人、戦ってほしい奴がいるんだけどよ。」

「戦ってほしい人…？」

「ああ、今日の夕方辺りに。」

「…そうですか、わかりました。」

話に決着をつけたところでスバルとティアナに合流、全員が揃ったところでアインハルトは学校の為にすぐに署から出て行く。

スバルとティアナもアインハルトを学校にまで送るという理由から彼女と一緒に行ってしまい残りはトランク스와ノーヴェだけになったのだ。

「時間も余ったし、軽くトレーニングでもするか？」

「オレはかまわないよ。ノーヴェさんも結構強そうだし。」

こうしてトランク스와ノーヴェの二人は昼間、軽いトレーニングや散歩などを繰り返すことにより時間を潰す事にするのだった。

そもそもこの世界に来たばかりのトランクスはまったくこの世界を知らないこともなり、慣れていくための手段としてノーヴェは気を遣っていたのだ。

（でも、もう一人闘ってほしい人って誰だろう…。）

その途中でトランクスはふとノーヴェがアインハルトに言った言葉が突拍子もなく再生される。アインハルトは承諾したが一体誰と戦うんだらうと好奇心にも似た感情を原動力としてトランクスは考えていた。

——果たして、ノーヴェの言うアインハルトに戦ってほしい人物とは…そして二度目の勝負の行方はどう転ぶのだろうか？

第4話 果たせ霸王の悲願！王の血統を受け継ぐサイヤ人トランクス（後書き）

ピッコロ「お、オッス！オレ、ピッコロ……くそ、何故オレがこんなことを……。」

クリリン「まあ悟空が戻ってくるまでの代役みただけど。それにしても、トランクス男になったな。」

ベジータ「よく言ったトランクス！それでこそサイヤ人だ。」

悟空「わりい遅れちまった。次回ドラゴンボールVivid「真つ向勝負！霸王と聖王とサイヤ人」

ブルマ「トランクスー！負けるんじゃないわよーっ！！」

第5話 真っ向勝負！霸王と聖王とサイヤ人

あれからトランクスとノーヴェの修行が始まってから相当な時間が経過しており今もその修行の真っ最中だ。

だが数分後には二人の修行の時間は終わり、一息尽いた所でベンチの上に座り休憩を図っていた。

「ノーヴェさんも結構強いね。」

「お前ほどじゃねーけどな。」

改めて二人で修行する事でトランクスとノーヴェの力量の差を互いに把握した上で二人は述べている。

「へへん、オレはガキの頃からパパに鍛えられてたから。」

「パパ…？お前の親父さんもお前と同じ戦ったりする事ができるのか？」

「もちろん！　パパは宇宙で一番強いんだ。」

休憩中は世間話によりある程度の時間を潰す。そうしている間にも夕暮れの時刻へとなっていた。

夕暮れになれば学校の授業も一通り終了する時間でもあるのでノーヴェはすぐにアインハルトの事を思い出す、彼女に紹介したい人物

がノーヴェの中には存在している。

その金色の髪少女がふと頭に思い浮かんだ瞬間、ノーヴェは立ち上がってトランクスの方へと視線を向けた。

「じゃ、そろそろあいつを連れてくるか。お前は此处で待っていてくれ。」

「わかったー！」

ノーヴェはそのまま立ち去っていく。一人になったトランクスは引き続き一人で修行の再開をする事になった。

途中でアインハルトに告げたノーヴェの言葉がトランクスの脳内で回想して改めて疑問が浮かぶ。アインハルトの霸王としての悲願を受け止めてくれる人物。

堂々と『いる』と宣言したノーヴェの中には心当たりの人物がいるのだろうか？トランクスはノーヴェとアインハルトが来るのを修行しながら待ち続けた――。

「…参りました。」

「よう、待たせて悪かったなチビ。」

「え、えーと……。」

「おかえりアインハルトちゃん、ノーヴェさん……と誰？」

アインハルトの隣に金色の髪を青いリボンによってツーサイドアップにさせた少女が目に入る、更に周りには複数の少女。見慣れない人物に思わずトランクスは目を丸くさせながら問う。

「あ、はじめまして。ミッド式のストライクアーツをやってます！
高町ヴィヴィオです！」

「そのヴィヴィオの友達のリオ・ウェズリーです！それでこっちが
コロナって言います！」

「えっと、よろしくお願いします！」

「ストライクアーツ？ オレはトランクスだよ。よろしくヴィヴィ
オちゃん、リオちゃん、コロナちゃん。」

「つまり格闘技ってことだ。挨拶は終わったようだな。」

補足するような説明を加えながらノーヴェは改まった表情と瞳を見
せながら全員に視線を向けていく。

「まあ皆、格闘技者同士。ごちゃごちゃ言わず手合わせでもした方
が早いだろ。場所も確保してあるしな。」

「うーん、女の子が相手だから手加減した方がいいのかな…。」

「私は手加減されたくありませんが。」

「その辺りの加減は任せる。んで最初はヴィヴィオとアインハルトからだ、それでいいな？」

「別にいいよー。」

「はい、全然いいですよ！コロナでもでしょ？」

「うん！二人の勝負見てみたいかな。」

一通りの流れを話していくと場の雰囲気は気まずい物ではなくなっていた。それこそがノーヴェの気遣いでもあり狙いでもある。トランクスはふと脳内で回想していた。霸王の悲願を受け止めてくれる人物、もしかしたら高町ヴィヴィオの事なんじゃないかと思考が走りつつ。

こうしてノーヴェの提案もあり、アインハルトとヴィヴィオは互いにコートの中央にまで足を進めば一定の距離を保ちながら軽い運動をし始める。

「じゃ、あの！アインハルトさん、よろしく願います！」

「……はい。」

明るく陽気にヴィヴィオはアインハルトとの手合わせに嬉しさを見出しながら構えを取り、アインハルトも同様に構えを取った。二人の準備が整ったタイミングを見計らうようにノーヴェは息を吸い込む。

「スパリーング4分1ラウンド…射砲撃と拘束はナシの格闘オンリーな。」

魔法系統なしの純粹な肉弾戦による対決、トランクスは魔法系統にはピンとこない様子のままノーヴェは試合開始の合図を口にする。

「レディー・ゴー!!」

——合図を発した直後、ヴィヴィオが先手必勝の勢いでアインハルトへと次々と拳を振るう、連撃のように次から次へと繰り返される拳をアインハルトを腕を交差させて受け止めていく。

受け止めることにより防御をしておりく、ダメージが微妙ながらも体に響いているのかアインハルトの体は拳を防御する度に僅かに後退していた。

（まっすぐな技…きつと、まっすぐな心……。）

アインハルトは後方へと下がる事で拳を避け、避けられない拳は腕

を交差する事で防御する。ヴィヴィオの攻撃は全て急所を外しており、まともな攻撃を食らわせずにいた。それでもヴィヴィオは焦る事もなくアインハルトとの手合わせを楽しんでおり、更に攻撃は激しくなり無駄もなくなっていく。

「結構いい感じだな。」

「今の所はね。でも、アインハルトちゃんにはまだ余裕がある。」

ヴィヴィオの猛攻は増していく、蹴り上げを加えてアインハルトに命中させようと試みるヴィヴィオだが容易にそれも避けられる。だがその度に攻撃の威力もスピードも増してきていた。

それでもアインハルトには命中しない。防御され避けられの繰り返しであり、アインハルトもまたスピードが上がっていく。

（だけどこの子は……。）

その途中、悲しみに溢れた表情がヴィヴィオを貫く。不意なアインハルトの表情の変化がヴィヴィオにとっては唐突な物に思えた。

（だからこの子は——！！）

ノーヴェとトランクスはアインハルトの行動に目を奪われる、今まで防御一線だけであった彼女が始めて攻撃に移した瞬間だったのだ。

一気に身を屈めて姿勢を低くし、そのままヴィヴィオの胸へと手で押し当てて一気に暴風と共に彼女を後方へと大きく吹き飛ばす。その瞬間はヴィヴィオの猛攻の中で一瞬の隙を突いたアインハルトの攻撃が見事に彼女へと命中させたのだ。

「ッ……す……。」

吹き飛ばされた拳句、ヴィヴィオはスポーツコートに体を叩きつけられる。全身の痛みと別格の胸からの激痛にヴィヴィオは胸に手を当てると同時に――、彼女の体は震えていた。

それは全身の痛みで震えているというよりも相手の強さに感動した上での武者震いのようにも見て取れる。顔を上げた彼女の表情は純粹な笑顔だったのだ。

「すごいっ――！」

（――私とは違う。）

再びヴィヴィオは構えを取って次の攻撃段階へと入る準備をい行おうとする前に、アインハルトは彼女に背を向ける。

敵に背を向ける行為は自ら隙を見せているのと同様であり、ヴィヴィオは戸惑いを露にしていた。

「……お手合わせ、ありがとうございました。」

唐突に響いた声が発する言葉にヴィヴィオには理解できず戸惑いだけが残る、試合終了という意味が込められた言葉を淡々と述べるアインハルトの背が虚しく感じてしまう。

そのまま自らの前から立ち去っていくアインハルトの歩みは止まることはなかった。放心状態を打ち破ってヴィヴィオは慌てて問いかける。

「あの…あのっ！すみません、わたし何か失礼を……？」

「いいえ。」

「じゃ、じゃあ、あの、わたし……弱すぎました？」

「いえ…趣味と遊びの範囲内でしたら充分すぎるほどに。」

ヴィヴィオは思わず口に出すべき言葉を失った、つまりアインハルトからすれば自分は弱すぎたのだと彼女は結論付いたのだ。

決して趣味と遊びだけではないつもりなのだがアインハルトからすればそれぐらいの範囲であるという事実がヴィヴィオの胸を苦しめる。

相手の期待に応えられなかった事——、ガッカリさせてしまった事、自らのレベルの低さ、様々な現実が小さな胸に突き刺さっていく。

「あのっ！すみません…今のスパーが不真面目に感じたなら謝ります！—」

その声が背を向け立ち去ろうとしていたアインハルトの歩みを静止させた。

「今度はもっと真剣にやります、だからもう一度やらせてもらえませんか？ 今日じゃなくていいです！ 明日でも… 来週でも！」

必死な説得を訴え続ける、このまま彼女をガツカリさせて期待ハズレのままの結果で終わらせたくないという思いがヴィヴィオを突き動かす。

その思いはアインハルトにも確実に届いており、故に彼女はどうか対応すればいいかわからずにいる。助けを求めるようにノーヴェへと視線を向けていた。

「あー、そんじゃまあ… 来週またやつか？ 今度はスパーじゃなくてちゃんとした練習試合でさ…」

言葉に悩みながらもノーヴェは言い放つ、この状況で下手な事を言えば空気を凍りつかせかねない。その上で考慮した結果がこうなったのだ。

「…わかりました、時間と場所はお任せします。」

「ありがとうございます！」

深くヴィヴィオは頭を下げて感謝の言葉を発した。再び背を向けた
アインハルトは無表情を浮かべていた、悲しんでいるようにも受け
取れるが真意を読み取る事は難しい。

「よし、話も纏まったから今日は解散ってことにするか。」

「え、えつと…アインハルトさんもそれでいいですか？」

「……構いませんよ。」

話の決着がつけば不穏な雰囲気も消失していく、それがノーヴェエの
狙いでもあり気遣いでもあった。

「ちょーっつとまったーっ！！！」

「なんだよ、いきなり…。」

「なにか忘れてない？」

真顔で問いかけるトランクス、それに対してアインハルトは無表情。
ノーヴェエは二人の少女の顔を見合わせている。

「忘れてないって…ノーヴェ、何かわかる？」

「いや、あたしにもさっぱりだな。」

「忘れてるって…なんだっけ？」

「こらこらー！オレと勝負するって約束だよ。覚えてるでしょアインハルトちゃん。」

ヴィヴィオとリオ、コロナは純粹に忘れてるように読み取れるが、ノーヴェは冗談で言い放っているのかヴィヴィオと同様なのか読み取る事が難しい。
だがトランクスからすれば後者、つまり本当の意味で忘れてしまっているのだと受け取っている。

「そうですね…。」

「まあ、時間もあれだしそれは明日か明後日ぐらいでいいんじゃないかな？」

「…すみませんが、そうしていただけると助かります。」

試合開始の時間帯は夕暮れが過ぎ去ったぐらいの時間帯、早ければもうこの時間帯には夕飯を取っている頃合いだろう。
だがそれにも関わらずトランクスは決して引き下がろうとしなかった。

というのも、彼の中に流れるサイヤ人特有の血が騒いでいたのだ。

「ふーん、オレに負けるのが怖いから逃げるんだ。」

挑発的な言葉を投げる、ヴィヴィオとアインハルトの手合わせはサイヤ人の戦闘本能を騒がせる要因となっていた。故にトランクスは今すぐにも勝負をしたいという本能的な衝動によって突き動かされている。

「あのなー、勝負したいって気持ちもわか…。」

「それも仕方ないか」。この前の勝負もオレが勝ったし、霸王も大したことないね。」

「……わかりました、そこまで言うのなら受けて立ちます。」

流石に言い過ぎだ、とノーヴェが抑えようとする頃にはアインハルトは挑発を真に受けていたのだ。霸王という言葉が重く押し掛かっている彼女にとって内心の苛立ちは隠しきれずにいる。

無表情を貫いているが体は違う。拳を強く握り締めて真っ直ぐな視線をトランクスにぶつけて凜々しくも言い放った彼女の姿にノーヴェは呆れたような感情さえ覚えてしまっていた。

「そうこなくっちゃ。どうせならヴィヴィオちゃんと二人でかっ
てきなよ？その方が面白い試合になると思うから。」

「わ、わたしまで……?」

「ヴィヴィオも入るの!？」

「二対一になるね……。」

「はあ…仕方ねえーな、でもこれが最後な。」

「オッケー! よーし、負けないぞ。」

立ち去ろうとしていたアインハルトはコート内に加わり、ヴィヴィオと同じ位置へと歩みを進めていく。若干の緊張感が湧き出ながらも真っ直ぐにトランクスを目で捉えながら。

二対一という理不尽とも感じ取れる勝負方式でトランクスは挑む。

——果たして、勝負の行方はどう転がるのだろうか…?

第5話 真っ向勝負！霸王と聖王とサイヤ人（後書き）

悟空「オッス！オラ悟空！！ あいつらすげえな、なんだかオラまで闘いたくなってきたぞ。」

ベジータ「よし、オレと勝負だカカロット！」

クリリン「お、おい！ここで闘うなよ…。」

ピッコロ「しかし、トランクスをやつめ。あまり調子に乗ってるとイタい目を見るぞ。」

悟空「次回ドラゴンボールVivid「これがサイヤ人だ！トランクス、本領発揮！」」

悟飯「トランクス、超サイヤ人にだけはならないでくれよ…。」

第6話 これがサイヤ人だ！トランクス、本領発揮！

「ルールはさっき言った通りの射撃と拘束バインドはなしの格闘オンリーだ。」

「わかった。…あれ？ 大人の姿にならなくていいの？」

トランクスの何気ない発言に対してアインハルトの眉がぴくりと動く。そう反応しても可笑しくはないとノーヴェは表には出さない呆れた感情を抱いていた。

「…貴方の方もあの金色の姿にならないのですか。」

「金色って超サイヤ人のこと？ うん、なったら建物が壊れちゃうからね。」

「た、建物が壊れるの！？」

建物の破壊は彼女達にとって容易な事ではない。少なくとも練習試合で建物の破壊を行う事はないのだ。

彼女達が大人になれば建物の破壊は決して難しくはないとしてもトランクスの発言は三人にとってレベルの差を感じさせる。

「………そうですか。そういうことであれば私も武装形態にはなりません。」

「ふーん、でもそれじゃあ簡単に勝負がついちゃうからさ。左手を使わないであげるよ。」

「えっ……左手を…？」

「…ヴィヴィオさん、彼に油断は禁物です。」

アインハルトが囁くように口にした言葉に対してヴィヴィオは上手く理解する事はできなかった。故に彼女は怪訝な表情を浮かべながらトランクスを不思議そうに見つめる。

彼女からすればトランクスとは武道が自分以上に上手い。予想する実力はアインハルトと互角か、ノーヴェと互角かそれ以上か。その程度の取るに足らない認識なのだ。

やがて二人はトランクスからある程度の距離を取った位置に付けば試合開始の合図とも呼べるノーヴェの声が響き渡る。

「——レディー・ゴーツ!!」

「ゴーツ!!」

試合は早々にアインハルトとヴィヴィオは地面を走り抜け攻撃に出たのだ、試合開始も間もなくトランクスの眼前には一気に二人の少女が飛び込む。

二人の息を合わせた拳による連撃が次々と絶え間なく降り注ぐ、決して遅くはない速度を持った攻撃の雨は通常の格闘技者であれば避

ける事は容易い事ではない。

ヴィヴィオは最初の攻撃に対して加減をしながら次々と拳を振るい続けるがやがてその加減は弱まっていく。アインハルトも更なる速度と攻撃を持つて畳み掛けていた。

「ほらほら、こっちだよー！」

「く…っ！」

「う、うそ……！？」

何故なら彼は当たらない。二人掛りでの拳による高速連続打撃に対しても避け続けている。軽やかに余裕を持っていると言わんばかりの動作で彼女達以上の速度で回避しているのだ。

だがその行動自体は挑発であり、アインハルトとヴィヴィオの感情を余計に高ぶらさせ攻撃はより過剰な物へと変貌していく要因となっていく——！

「おお、やってるツスねえ…。」

「うん…来て正解だったよ。」

「……っておい！　なんでお前等が此処にいんだよ！？」

ノーヴェの後ろには長い茶髪的女性、銀髪の少女のような外見を持つ者もいれば大勢の女性陣が姿を現したのだ。リオとコロナは話に

ついていけず首をかしげて眺めている。

「すまん、ノーヴェ…どうしても気になるそう。姉も一応止めたのだが……。」

「陛下の身に危険が及ぶことがあったら困りますし……。」

「護衛役としては当然。」

「陛下……??」

「あー、いや。こいつ等の事は気にしないでくれ……。」

リオとコロナは口を揃えた。大勢の女性陣はヴィヴィオを集中的な視線を浴びせているような気配を見せているがリオとコロナはその意図を理解する事ができない。

唯一、理解していたのはノーヴェだけであり、だからこそ彼女は呆れた表情を彼女達に向けていたのだ。

(当たらない……!!)

一方、アインハルトとヴィヴィオの猛攻は激化の一方を辿る、更に更に更に攻撃と速度は上昇し続け、キレのある高速打撃を幾度となく繰り返し続ける。

だが全てが空振りとして終わっていく。初っ端から息の合う二人のコンビネーションにノーヴェは大したもんだ、と感心の眼差しを向

けているが二人の内のヴィヴィオにとってはトランクスの強さに焦りしか覚えない。

「そろそろ体があつたまつたかな。じゃあ、今度はこっちからいくよ！」

瞬時にトランクスは二人との距離を置いた途端、一気に今まで行動に出なかった攻撃を始める。高速をも超えた拳の一撃がヴィヴィオを叩きつけようと迫り来る刹那――アインハルトは身を乗り出した。ヴィヴィオの目の前にへと身を置くと同時に強烈な威力を誇る一撃を両手で受け止め持ち堪えようと全身に力を入れた瞬間、アインハルトは不意に体を仰け反らせ勢いよく吹き飛ばされてしまう。

「う、ぐう…ッ!!」

「だあつ!!」

「アインハルトさん!?…っ、きゃあああ!!」

唐突な行動の展開に追いつけずにいるヴィヴィオのほんの僅かな隙にトランクスは付け込む、すかさず蹴りを入れられ後方へと地面を擦り合わせる音が流れながらも必死に耐えようとする。

幸いにも出遅れたヴィヴィオが唯一取れた行動は防御だ、トランクスの拳に対しての防御動作が持続し、攻撃が蹴りに代わっただけなのだ。吹き飛ばされる勢いが止めば大きくトランク스와ヴィヴィオは距離を開けていた。

「まさか、あそこでアインハルトちゃんがヴィヴィオちゃんを庇うなんてね。」

「今は危なかったよ…！」

「トランクスって奴、中々やるツスねー…。」

「二人で協力しても相手にならないって感じだね。」

「このままでは陛下が負けてしまうな……。」

圧倒した試合に言葉すら失う光景であり、様々な女性陣がそれぞれの感想を呟いている。アインハルトは大きくトランクスとの距離を作り出されてしまうがヴィヴィオと同様に踏み止まっていた。単純な戦闘能力は二人合わせた力とトランクスを比較すればどれも彼に圧倒されているのだ。その事実が挑発のせいもあって苛立ちを芽生えさせるが対抗手段が見つからない状況である。

「トランクスくんって強い…！　どうやったら勝てるんだろう…？」

「それはわかりません、ですが何か弱点があれば……。」

圧倒的すぎるレベルの違いを埋められるほどの、状況を打開する事のできる弱点が存在していれば。アインハルトの脳内は勝利という事象を求めて思考し続ける。

ヴィヴィオ自身もまだ負ける気はないのか、彼女の瞳は輝いていた。トランクスとの勝負を投げていない様子で再び構えを取ると同時にトランクスとの間合いを詰める。

「あのなあ……アインハルトにヴィヴィオ！もっとう、協力して戦ええーっ！！」

「——ッ！！」

ノーヴェの高く鳴り響いた声は二人に届いた、刹那——アインハルトは急に目の色を変えてヴィヴィオから距離を置いてトランクスの右側へと移行していく。

瞬発力に優れた動作にトランクスとヴィヴィオは彼女の行動の意図を理解できないまま対応しようと試みる、トランクスはアインハルトの攻撃を避けようと動作を起こした瞬間……。

（そうだ……！！）

結果的にトランクスの反対側、左側は隙が生じたのだ。空かさずヴィヴィオは隙が生じている左側へと移行すれば高速の蹴りが振るわれ、アインハルトも同様の行動を起こし左右対照の攻撃を食らわせようとする。

「挟み撃ちか…考えたね。」

単純な格闘戦であれば一人でも可能な業だが挟み撃ちは二人が揃う必要がある、アインハルトとヴィヴィオのコンビネーションは優れているが二人特有の業を今に至るまで成し遂げていない。

「でも、甘いっ！」

「ええッ!？」

だがトランクスには通用しなかった、常人が出し切れないであろう飛翔力を持って挟み撃ちを回避する。

彼は高くジャンプを行うことで蹴りを避け、拳が味方同士で命中するという自滅を企んでいるのだ。それは挟み撃ちの弱点を突いた的確な行動とも言われる動作である事に変わりはないが…。

「——甘いのは貴方の方です。」

今に至るまでの全ての動作はアインハルトの目論通りであり、彼女は蹴りに急停止を掛けると同時に腰を屈めて一気にトランクスを追うように飛翔。

唐突な動作だがヴィヴィオも急停止を掛けてすかさず一步出遅れた飛翔でトランクスに対して拳による追撃を加えようと試みる、まる

でそれ等の動作は全て計算されたかのように。

「え？え？……うそでしょ……！！？」

手足をバタバタと動かすがトランクスにはこの場での対処方法が存在しない、舞空術を使用すればこの状況は難なく乗り越えられるが気がコントロールできないのだ。

（まずいぞ！まだ気を完全にコントロールできてないから浮けないし、かといってこのまま落ちれば――。 ）

「「はあああつ！！」「」

勝利は目前と言わんばかりの容赦ない攻撃にトランクスは両手を伸ばし、彼女達の拳と脚を受け止めてしまう。あまりにも軽々しく扱う姿に二人の思考は一時中断して絶句する。

「――でりゃああつ！！」

「きゃああああ！！」

「ぐうつ……！！？」

脚と拳を掴んだまま空中で即座に回転し、二人を同時に地面へと背中から激突させてしまう。予想外の危機を回避したトランクスの額には焦りで冷や汗を流していた。

「ふう、今のはマジで危なかったな……。でも、これでオレの勝ち——。」

「勝負あり！！ アインハルトとヴィヴィオに一本！」

「や……やったよ、アインハルトさん！！」

「ええっ！？　なんで！勝ったのはオレじゃないの？」

嬉しそうに微笑むヴィヴィオは上体を持ち上げて子供らしい笑顔をアインハルトに向ける、だがアインハルトは納得がいかないと言った怪訝な顔を浮かべており、トランクスもまた不満を持っていた。

「……なぜ私達の勝利なのですか？」

「トランクスは左手を使わないって言うっておきながら使ったからだ。」

「そっいえば最後で使ってたね。」

当初トランクスは左手は使わないという条件、ハンデを背負いながら戦うと宣言していたのだ。

余裕の表れとも言うべき条件であつたが空中での二人の攻撃に両手を使用してしまった事は充分に約束を破る行為と言える。

「ですが…それは本当の勝利ではありませんので私達の負けです。」

「はあ……もういいよ。自分の言葉には責任を持たなきゃだしね。この勝負はオレの負けだ！」

「えっ、本当にいいんですか…？」

「いいよ。元と言えばオレがハンデを出したからこんな結果になつたんだと思うし。だから次はハンデなしでやろうね！」

ノーヴェは何かトラブルが起きると予想していたがその予想はあっさりと崩れてしまう、自然な会話の流れでトランクスは自分で負けを認めてしまったのだ。

「はい、次はもっと強くなつてからお願いします！」

「……次こそは、必ず。」

両者の虹彩異色の瞳がトランクスに向けられればヴィヴィオは笑顔を浮かべて、アインハルトは表情の変化がないが何処か悔しさを感じさせる瞳を向けていた。

その後はウェンディ達一味とリオとトランクスが互いに自己紹介を交わして時間は過ぎていく。後にトランクスは何処で住むかの話になるがアインハルトと共にノーヴェの家という事になる。

——そして今回はアインハルトとヴィヴィオとの再戦の約束を交し解散する事になったのであった…。

「ただいまー、なのはママにフェイトママ！」

「あ、ヴィヴィオお帰りなさい……。」

「ヴィヴィオお帰りー…遅かったね…？」

「うん！ちょっと色々あったの、汗をかいたからお風呂に入りたいんだけど…。」

ヴィヴィオはノーヴェ一同と解散し自宅に帰宅するが出迎えてくれたフェイトとなのはの表情に違和感を覚えて続けようとしていた言葉を止めて首を傾げる。

室内は談義中という雰囲気にも包まれ奥にいる悟天となのはが特にその雰囲気曝け出しているようにヴィヴィオは感じ取ったのだ。

「そ、それが…あはは……。」

「にやはは、ヴィヴィオ……驚かないでね。実は……。」

「ごめんねヴィヴィちゃん、お風呂壊しちゃった。」

[illegible]

頭に手を添えながら悟天は苦笑いを浮かべながら返答、無論ヴィウイオの反応は家内のフェイトとなのはが予想した通りの物である。後にヴィウイオは風呂の状態を直接目で確かめて見る事となったが予想通り浴槽の状態は完璧に壊されてしまっているのだ。その深刻さだけは彼女の予想を上回っている。

結局、風呂に入る事はできずなのは一家は明日作業員の人達に相談する事になり、直るまでの期間はフェイトの提案により銭湯に頼る事になるのであった…。

第6話 これがサイヤ人だ！トランクス、本領発揮！（後書き）

悟空「オッス！オラ悟空！！　なかなか面白え勝負だったな。」

ベジータ「ふん…相手がガキだと思って油断するからこうなるんだ…。」

ピッコロ「だが、自分の負けを素直に認めるとは…少しは成長したようだな。」

クリリン「ははは。そういえば、さっきブルマさんが呼んでたぜ。」

悟空「次回ドラゴンボールVivid「いざ異世界へ！悟空チーム出発！」」

悟飯「魔法の世界…か…。」

第7話 いざ異世界へ！悟空チーム出発！！

「みんなー！できたわよー！ー！！」

唐突に木霊した女性の声に悟空は目を丸くさせた。――彼等の現在地はカプセルコーポレーション、あれからの数日間、悟天とトランクスを連れ戻す方法を彼等は探り続けている。その結果、ブルマが思いついた手段で二人を取り戻すという方針となり、その方針で決めてから数日の時間が経ったある日。急にブルマに呼び出されて悟空やベジータ、悟飯とピッコロがその場に居合わせていた。

「できたってなにがだ？」

「決まってるでしょ、タイムマシンよ。ここまで完成させるのに苦労したんだから。」

「へへっ、今回はオレも手伝ったんだぜ。」

「ヤムチャ様かつこよかったですよ！」

「雑用をだけどな。」

――苦勞したと言わんばかりのブルマと周りにいるヤムチャ、クリリン、プーアルとウーロンの顔と言葉に彼等の目は点になる。そして巨大なカプセル型の形状を持つ特殊な装置、タイムマシンに改

めて全員は注目した。

だがクリリンはタイムマシンに違和感を感じ取ったのか目を凝らして暫く観察を続けていると疑問を口にする。

「あれ？ ブルマさん、未来のトランクスが乗ってきたタイムマシンより大きくないですか？」

「そりゃ、まあ乗る人が多いんだから仕方ないじゃない。」

「ブルマ…それはどういう事だ？」

まるでもう決まった事実、決定事項のように語り出すブルマに疑問を抱かざるおえないだろう。彼女に対してベジータは問いを投げる。

「どういう事って……そのままよ。これに乗るのは孫くんに悟飯くん、ベジータとピッコロ。わかったわね？」

つまりブルマが思いついた方法とは、タイムマシンを使ってどこかの世界に飛ばされた二人を連れ戻すという方法だったのだ。

だがその事情をまったく聞かされていなかったブルマを除いた四人は驚いた表情を隠せずにいる。

「へっ？ オラもタイムマシンに乗るんか？」

「当たり前でしょ！ あんたは悟天くんの父親なんだから。チチさん

からの承諾も得ているわ。」

「オレが乗る意味はあるのか…。」

「あるわよ。もし孫くんとベジータがケンカでもしたら悟飯くん一人で止められると思う?」

「ははは…確かにオレやヤムチャさんじゃ無理っすね…。」

「なるほど…だが、魔法の世界は無数にあるのだろ。タイムマシンを使ったとしてもその世界には辿り着けないんじゃないのか?」

それは悟空達が悟天とトランクスを連れ戻す上で断念させた大きな理由でもあり大きな難問でもあった。

だがブルマは決して態度を崩さず、その質問を待ってたと暗黙のメッセージを伝えているような笑顔を浮かべる。

「ふっふーん、あたしを誰だと思ってるの?こんなこともあるのかとトランクスの荷物の中に発信器をつけておいたのよ。」

それで、このタイムマシンにはその発信器の特殊な電波に反応すると自動でその世界に移動できるように改造したわけ。」

大きな難点でもあり誰もが断念させられる理由、だがブルマの天才的な技能によりタイムマシンは大幅な改革が施されていたのだ。

このタイムマシンは自身のいる世界の時間内を移動するだけではない。異世界への移動も可能にさせていた。

「さすがブルマさんだ…！」

「ほーっほほほ。あ、念の為に最終確認するから、終わるまでちょっと待ってて。」

万が一の事を考えた上でブルマは機械の最終確認を始めていく、彼女の天才的な技術力には関心した視線を集めるばかりである。

（魔法の世界か…あの子は元気にしてるかな。）

唐突に悟飯の脳裏に浮かび上がった一人の少女が回想という形で記憶から浮かび上がっていた、姿は茶色い髪をツインテールにさせた白い服を着込んだ幼い少女。

まだ悟飯が幼い頃に出会った少女であり、今は記憶の中にだけ存在している少女だが現実には存在していたと思い知らせるように、彼は懐から銀白のリボンを取り出す。

「それって、昔あの白い魔法使いの女の子にもらったりリボンじゃないのか？」

「や、ヤムチャさん!？」

ガラス越しから覗き込まれるような視線に悟飯は驚いた表情を浮かべる、誰も見ていないという考えは思い込みであつたに過ぎず慌しい反応を表に出したのだ。

「ははは、驚かせて悪かつたな。そっか、そういえばその女の子も魔法の世界に住んでるんだっけ。」

「はい…。これから行く世界で、もし会えたら約束通りこのリボンを返そうと思ひまして…。」

彼等の記憶の中に存在する少女は魔法の世界に在住しており、トランクスと悟天が向かつた先がもし——という考えが彼等の脳裏にある。

真っ白なりボンを懐かしむ悟飯の姿にヤムチャは観察するように目を凝らす。

「なるほどな。で、悟飯はその子の事がスキだったのか？」

「えっ！？ その…スキかどうかはわかりませんが…：…気にはなりました。」

当時は恋愛の疎さ故に恋愛感情を持っていたどうかすら怪しい、その範疇に入っていた事は事実でも肝心な所は理解できずにいる。

「マジかよ！ こりゃミスター・サタンの娘にライバルが出現だな。」

「ビーデルさんがライバル…ですか？」

「あー……お前は気にしないでいいぜ。」

言葉の真意が理解できないとばかりに首を捻る悟飯。彼女と何の関係があるのだろうと彼は思考を張り巡らす。それを見たヤムチャは呆れ返っていたのだった。

「悟空、不安にさせるようなこと言って悪いんだけどさ…気をつけるよ。」

悟飯とヤムチャが騒ぎ立てる中で密かに静かな声と共に届いた言葉に悟空は振り返っては目を丸くさせて問いを投げる。

彼の言葉に含められた意図を理解できない、何故彼は急に言い放ったのか理由が悟空の中で見当たらずにいた。

「ん？ 急にどうしたんだクリリン？」

「えっと…ほら、その異世界に住む魔法使いがいいヤツとは限らないだろ？もしかしたら悪い奴等の可能性だってあるし…。」

「それは一理あるな。あのバビディの持つ魔術も危険なものだった。魔法が如何なるものかは知らんが用心に越したことはないだろう。」

魔法が実在する世界ではどのような魔法なのか、彼等は魔法を知らない。故に警戒心は僅かながらに添えられている。

誰もが留めておくべき心得であるのだが悟空はまた別の疑問を抱いていた。クリリンと目を合わせればその内容を口にする。

「なあ、クリリン。その異世界の魔法使いつて強えのかな？」

「…え？ それはわからないけど……。」

怪訝に満ちた表情を浮かべて応えるクリリン、不安の思考を脳内で張り巡らせるクリリンは悟空の言葉で思考を中断させていた。

「そつかあ…強えヤツだったらいいな〜。オラそいつらと戦ってみてえぞ！」

「…ぶつ、はははははは！」

「なんだよ。オラ、ヘンなこと言ったか？」

「いや、お前らしいなと思ってさ。なんだか心配して損したぜ。」

「よくわかんねえけど、心配してくれてサンキューなクリリン!!」

納得がいかなければかりに悟空はムツと表情を強張らせて露にする、決して彼は警戒心が添えられていない訳ではないのだが他の戦士達と違い思考が多少外れている部分を持つ。

本人は無自覚である事が返って他のメンバー達にとっては微笑ましい光景であり同時に失笑を浮かべてしまう思考である。彼の一面は変わり者でもあるのだ。

「これでよし」と。お待たせー！確認が終わったから乗ってもいいわよ。」

早速メンバー全員が座席に腰を掛けていくとブルマは操縦パネルに視線を向け悟飯に操縦の仕方を説明し始める。

「次元の空間に入れば勝手にレーダーが反応すると思うから、そしてこのボタンを押すのよ。」

「はい！この赤いボタンですね。」

「そうそう。それとエネルギーが…。」

次々とタイムマシンについての機能を説明し始めるブルマ、それ等

を必死に飲み込もうと努力する悟飯だが終わる見込みのない話を聞
いていたベジータは苛立ちを募らせていた。

「いつまでもグズグズしやがって……いい加減にしやがれ!!」

「……あ。」

「バカが……。」

腹を立てたベジータは拳を操縦パネルへと叩きつけ衝突音が鈍く流
れ出した後、開いていた筈のハッチが突然閉まりだしたのだ。

違和感を覚えたベジータは自身の拳がブルマの説明していた起動ボ
タンに押す形で激突していた事に気がついたのだった。

「ああっ!?! なんてことしてくれたのよ! これじゃ外に出られな
いじゃない……!!」

ブルマを座席に乗せた状態でタイムマシンは空中を浮遊し、地面か
ら一定の距離へと離れていくと悟空は騒ぎ出すクリリン達に……。

「じゃ、みんな! いつてくる……!!」

「——ってちょっと! あたしは行かないわよ……っ!」

悟空は無邪気に明るい笑顔を向け、ブルマの叫び声がタイムマシン内に五月蠅く木霊した後に、彼等は風景に溶けていくように姿を消すのであった……。

第7話 いざ異世界へ！悟空チーム出発！！（後書き）

悟空「オッス！オラ悟空！！ 早く魔法の世界で強えヤツと戦いてえな〜」。

ブルマ「ベジータ！あんたの所為であたしまで行く事になったじゃない！」

ベジータ「知るか。お前がノロマなのが悪いんだろうが…」。

ブルマ「なんですってえ…！！」

ピッコロ「…先が思いやられるな。」

悟空「次回ドラゴンボールVivid「再会の二人、銭湯大決戦！」

」

悟飯「なんか嫌な予感がする…」。

第8話 再会の二人、銭湯大決戦！

高町なのは家の浴槽が悟天によって破壊されてから数日——、直るまでの間は銭湯を利用する日々が続いていたのだ。

夕方が過ぎた夜中の時間帯に彼女達は日課のように銭湯を訪れていた。施設の内部へと足を踏み入れていけば受付係となのは、フェイトが会話をしている。

「…じゃあ、そろそろ行こうか？」

「——なのはさん、フェイトさん！」

「スバル！それにティアナも…？」

「アインハルトさん！？」

「……どうも。」

途中で呼び止められた声の本人に目を向ければ見慣れた顔を持つ人物が大勢、スバルとティアナ。ノーヴェ等が其処に居たのだが小さな子供はなのはとフェイトにとって面識が無かった。

ヴィヴィオは戸惑いを浮かべながらも新しく出会った翠銀色の髪を持つ少女を二人の母親に紹介する。

「え、えーっと…こちらアインハルトさん。」

「はじめまして、ヴィヴィオの母…高町なのはです。ヴィヴィオが

お世話になってます。」

「私はフェイト・Ｔ・ハラオウンです、ヴィヴィオの監察官をやっています。」

「アインハルト・ストラトスです…い、いえ。こちらこそ……。」

「そういえばなのはさん、こっちの子は…？」

アインハルトはぎこちなく挨拶を交していた。何処かやりにくさを感じさせる彼女の表情にヴィヴィオは心配そうな視線で見守っている。

後に首を捻り、蒼紫色の髪を持つ女性は悟天へと穏やかな視線を向け、きよとした表情を見せる悟天に微笑ましそうにフェイトは彼を眺めていた。

「孫悟天、ちょっと色々あってなのはと面倒を見ているの。」

「そうだったんですか？」

「あれ……あの、トランクスくんはいないんですか？」

その場には存在しない、最近出会ったばかりであろう少年の姿に疑問を感じたヴィヴィオは周辺を見渡して彼を探していたのだ。

「あー、トランクスなら先に風呂に入っちゃった。」

「……ホントだ！あつちにトランクスくんの気を感じる！！」

「悟天くん…ッ!?」

悟天は気が半減したとはいえ、トランクスとの距離は近距離に値するのだ。気を探る事は容易であり、彼は突然廊下を走り出してトランクスがいる風呂場へと足を進めていく。

唐突過ぎる行動にフェイトは彼の後を追いかけて行けばヴィヴィオもまた途方にくれた表情と共に後を追う。ノーヴェは呆れたように頭を抱えているのだった――。

「トランクスくーーーーーん!!!!!!」

「えっ!? 悟天！なんでお前が―――って危ないから走るな！」

「へっ? わわわああっ!?」

「こつちに来るなーーーーっ!!!!!!」

脱衣室に突入すると同時に衣服を脱ぎ捨てながら疾走し続ける悟天は扉を開け湯船に向かって勢いよく飛び込んでいく。湯船に浸かっていたであろうトランクスは目を点にさせながら。

大声で会話のやり取りを風呂場で木霊した直後、悟天は途中から足

を滑らせてしまうのだ。

「止まらないよおおおおお……！！？」

「うわあああっ!？」

風呂場の床を構成するタイルは湯によって塗れており、只でさえ床は滑りやすい状況であり足をトランクスの顔面へと衝突させていた。

——数分間の時間が経過した頃、落ち着きを取り戻した二人は此処に至るまでの経過を二人で話し合い静寂的な雰囲気が場を包み込んでいたのだ。

「しかし、まさか悟天がヴィヴィオちゃん家で世話になってたなんてなあ。」

「えへへ、今度ヴィヴィオちゃんのお母さん達が魔法を見せてくれるんだよ。でも、ボク達は魔法が使えないんだって。」

「あー知ってるよ。魔法を使うには魔力を持てなきゃダメなんだよな。後、オレ達は次元漂流者ってやつらしいぜ。」

「じげんひょうりゅうしゃ？」

湯に浸かりながら悟天は目を丸くさせると同時にトランクスへと質問をぶつけた。彼等にとつて聞き慣れない単語かつ、この世界にとつての専門用語に近い言葉の一つであつた。

二人の居る世界以外——他世界から、何らかの手法で二人の居る世界へと入り込んだ人間の事を指す名称である。トランクスは悟天に次元漂流者の意味を述べていく。

「だから、オレ達の世界が見つかるまではこの世界にいることになつたんだ。」

「え！？　じゃあボク達帰れないの？　そんなのイヤだよ。」

「仕方ないだろ、スバルさん達も元の世界に帰る方法を探してくれてるって言ってるんだ。それまで待つてようぜ。」

あれからアインハルトやスバル達との生活は続いており、その中で仕入れた情報をトランクスは次々と教えていくのだが、途中から悟天は首を捻つたのだ。

「待つてどのくらい？」

「ど、どのくらいって……そんなのオレがわかるわけないだろ。とにかく待つてればいいの！」

「イヤだ！ボク早く帰りたい。兄ちゃんやお父さん達に会いたい！」

悟天の脳裏には悟飯の姿、悟空の姿が次々と映像的な演出で流れ出していくのだが彼等には元の世界へ帰る方法は残されていない。途方も無く行き当たりばったりに行った行動に対して悟天は寂しさが胸に積もりトランクスに次々と吐き出すが、本人は途方にくれた表情を浮かべるしかなかった。

「ワガママ言うなよ！オレだってパパやママに会いたいさ。けど、今は待つしかないんだ…。」

「うう…トランクスくんが悪いんだ！トランクスくんが魔法の世界に行きたいって言ったから。」

「なんだよ！！ 悟天だって乗り気だったじゃないか！オレ一人の所為にするなよな！」

激しい口論が展開される最中、女湯では既に湯に浸かり男湯とは違った静寂な雰囲気で包まれていた。真夜中という時間的に他の人間が室内に入る事は無く、なのは達だけで湯船を独占する事ができている。

「誰もいないね……。」

「そうだね、普段は誰かが利用してるんだけど……。」

「なのはさん達はお風呂が壊れて以来、ずっと此処を利用してるんですよね？」

「うん、そうだよスバル。ちょっと事情が今一よくわからないんだけど悟天くんがお風呂を壊したとか……。」

彼女の話だけでは完璧な把握は非常に難しい。なのはは Fayette の浴槽が壊れるまでの経過を聞いたつもりだがそれでも彼女にとっては理解しづらい物であった。

Fayette は言葉を返す訳もなく、困ったように苦笑いを浮かべているだけでその事情に対して口を挟む行為は取らない。湯気が風呂場を包み込む中で、彼女達の肌は透き通るように濡れていた。

「そういえば、他の姉妹はどうしたの？」

「他の姉妹は買い物をしています、本当は一緒に銭湯に来る予定だったんですが……。」

「そうだったんだ…はやてちゃんも誘って今度は皆で来たいね。」

なのはは不意に脳裏に浮かんだのだ、ノーヴェを囲むように存在していた姉妹達の事を。ティアナは淡々と湯船の熱に頬を薄く赤くさ

せながらも返答を投げた。

「……あの、フェイトさん。悟天くんはどんな感じですか？」

「えっと…甘えん坊な子だけど、急にどうしたの。スバル…？」

「トランクスくんの友達はどんな子なのかってちょっと気になって……。」

苦笑い気味にスバルとティアナはトランクスについて話し始めたのだ、アインハルトとトランクスが来てからの生活の日々を耳にすればフェイトも暖かさを感じさせる微笑を向けていた。

途中からノーヴェもその輪に加わり彼等についての話題を並べてく。――だがアインハルトとヴィヴィオの間には気まずい空気だけが場を包み込んでいたのだ。

耳にするのはトランクスと悟天の話題、女性的なソプラノ音声が見界を悪くさせる湯気の中で反響し合う。だが二人の声は反響する事も無ければ一切言葉を発さずにいる。

（ど、どうしよう…なんとかして、アインハルトさんと話をしたいんだけど……。）

「……。」

（けど、声をかけたとしても何を話せばいいんだろう…？）

「……………」

（お母さんの話は聞きづらいし…トランクスくんの話とか？ストライクアーツとか……。）

「……………」

「あ、あの！アインハルトさ——！」

「うわああああああ——っ！！！！！」

漸く、彼女は遂に声を発すると同時にアインハルトの虹彩異色の瞳がヴィヴィオを映し出すと同時に向けられたのだ。しかし唐突に広がるのは壁が倒壊する破壊音。

この場には有り得ない程の衝撃音が反響し合い、余計に耳を五月蠅く音が叩きつける。気分を害するには充分過ぎるほどの邪魔な存在である事に変わりはない。

分厚い壁に空穴のような破壊行動を行った小さな張本人に、全員の視線は収束していく…だが本人はその事に気づく余裕を持ち合わせていなかった。

「わ……っ！？ 悟天…？」

「フエ、フェイトちゃん大丈夫…!？」

突然出現すると同時に悟天は脱衣室まで聞こえる程の叫び声を上げながら、湯気が立ち込む空中を宙を舞うと同時に——フェイトの豊富な胸部へ全身が密着する形でクッション代わりと化したのだ。

だがフェイト自身は悟天が子供故に気にする事はない。しかし、ノーヴェはその光景を見てわなわなと拳を握り震え出しており、頬は紅色に染め上がっていたのだ。

悟天は体制を整えると同時に立ち上がれば、迎え撃つ為に高く飛翔する。彼は自身に迫り来るトランクスへと向かっていけば再び乱闘を女湯で繰り広げるのであった…。

「でやああああっ!」

「だあああああっ!」

「…え、えつと、すごいね、アインハルトさん……。」

「そう、ですね……。」

二人の空中戦闘は僅かな時間で終結したが、濡れた床に足が接触した途端——間合いを秒間的に詰めた接近戦を始める始末なのだ。言葉を失う女性陣にお構い無しに戦闘を続ける中でアインハルトとヴィヴィオは純粹に彼等の圧倒的な力量による戦闘に魅入られていた。

「……すごく強いって事はわかるんだけど……。」

「な、なのは……抑えて……。」

なのはとフェイトは静観の態度を崩さない、目視すら許さない人間を遥かに凌駕した格闘戦に桶や石鹼が何処の方向へと投げ飛ばされていく光景には目を丸くさせるだろう。

桶は壁に衝突した直後にヒビが入り粉々に塵となっていく姿にノーヴェは更に怒りを積もらせていた、鏡は破壊され破片が飛び取る衝撃音が室内で飛び交う。

（これで人がいたら不味い事になってたわねえ……。）

「悟天くん、落ち着いて……！」

「それに此処で戦ったら危ないよ……っ！」

「はあ……トランクスくん！止め……きゃあああっ！？」

悟天に対してはフェイトとなのはが止めに入り、トランクスにはスバルとティアナ、それぞれの保護者が呼び掛けるが一切止まる事のない二人は戦闘が激化の一方を辿るのみである。

散乱する桶や石鹼などが空中移動する中で偶然的にティアナへと桶や石鹼が投げ込まれるが彼女は上手く避け切り、怪我する事はなかったが……。

その事実気付いていない二人は雄叫びのようにかけ声を叫びなが

ら接近戦で行われる打撃攻撃に歯止めが掛かる事はなかった。ノー
ヴェは怒りの限界にまで達した瞬間――。

「……………いい加減にしやがれ、てめえらああーッッ！！！！
」

最大限の激怒が込められた叫びが破壊音や衝撃音よりも木霊したのは彼女の叫び声、ようやく静止した二人は頭が冷え自身のやってきた事に改めて反省の意を表するのであった…。

悟天には保護者であるのはとフェイト、トランクスには保護者のスバルとティアナが交互の説教タイムとなっており、アインハルトとヴィヴィオ、ノーヴェはその場で彼等を見守っている。

「あのね、此処は沢山の人が利用する所だから戦闘したり物を壊したりしたら駄目なの…。」

「大勢の人に迷惑が掛かる……………わかるよね？」

「ごめんなさい…。」

頭の上がない悟天は謝罪の一言を口にしていた。女湯や男湯共々、二人の戦闘によって桶や石鹸等が飛び交い散乱している状況なのだ。

「トランクスくんも、次から絶対にしないように！」

「そういえば、どうして喧嘩していたの？」

淡い水色の瞳が覗き込むようにトランクスを捉える、スバルも同様の行為を行うと同時になのはやフェイトを始めとした女性陣の視線がトランクスへと向けられていた。

「悟天が帰れなくなったのはオレの所為だって言っただよ。」

「だって本当のことじゃないか！ドラゴンボールで行こうって言ったのもトランクスくんだし。」

「だから、それはお前も賛成してただろ！いい加減自分にも原因があることを認めるよな。」

再び言い争いを始める二人に対してスバルはため息を吐く、ヴィヴィオやアインハルトは一切喧嘩を起こさない事を比べれば二人は非常に幼い印象を覚えてしまう。

同年代である事に間違いは無い、だが精神的に幼く感じる女性陣は

男と女の違いなのかと疑問が脳裏で展開されていた。

「トランクスくんのバカ!!」

「悟天のわからずや!!」

「あー、おい。わかったからこの続きは四日後にしろ、だから此処でまた暴れんなって。」

頭に血が上り、両者に戦闘の構えを見せた途端にノーヴェはそれを見計らって牽制の言葉を口にすれば二人はキョトン、とした表情を浮かべるが戦闘体制を崩す。

四日後という具体的な言葉が引つ掛かったヴィヴィオはその意味を求めて頭は回転する――、暫くの間ヴィヴィオは険しい表情を浮かべていたが表情を崩し何かに気が付いたような顔色を突然露にさせながら口にした。

「四日後って…アインハルトさんと戦う日になるよね？」

「……確かにそうですね。」

「ああ…。だからお前等はその時に決着をつけろ、いいな？」

「四日後か…オレはいいぜ。悟天、お前が負けたら自分の非を認めるよな。」

「うん、いいよ。でもボクが勝ったらトランクスくんが大事にして

るおもちゃを貰うからね。」

「ああ、構わないぜ。どれでも好きなのをやるよ。男の約束だ！」

ノーヴェの一言で一段落が付いた頃に悟天とトランクスは振り返って後ろに位置するヴィヴィオ達へと目を向ける。

「よし！帰ったら修行するぞー！ヴィヴィオちゃん、一緒に頑張ろうね！！」

「悟天なんかに負けるもんか。アインハルトちゃん、オレ達も一緒に修行しよう！」

「……………」

だが二人から放たれる視線は全身を凍り付かせる程、冷却的な視線を二人に浴びせていたのだ。彼女達の意図を理解できず首を捻る二人に苦笑いを浮かべる女性陣。

無理も無い、彼等は何も衣服を着ていない状態。数分前の展開から気づく事は無かったが静寂な雰囲気包まれた直後、改めて彼等の体が目に入ったのだ。

「あ……………」

「…………ん？」

気が付いたとばかりにトランクスは全身を紅色に染まり上がる程、
体が凍り付くが悟天は意味が理解出来ない様子のまま首を傾げて場
の雰囲気を見守っていたが…。

「いやあああああーっ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！」

「ツツツ~~~~~！！！！」

「~~~~~わあああああああつ！！！！」

ヴィヴィオとアインハルトの高威力を誇る拳が二人の頭部へと殴り
つけた拳句に男湯にまで悲鳴と共に吹き飛ばしてしまう。

風呂場は再び悲鳴だけが混ざり合い木霊している、なにはともあれ
四日後の勝負に向けて彼等の修行の日々が始まるのであった……。

第8話 再会の二人、銭湯大決戦！（後書き）

悟空「オッス！オラ悟空！！ 悟天とトランクスのヤツ派手に暴れたな〜」。

ヤムチャ「女湯があ。あいつらが羨ましいぜ…」。

天津飯「ヤムチャ。お前は何を言ってるんだ？」

ピッコロ「理由はくだらんが、修行をすることは良い心掛けだ。」

ベジータ「トランクス、カカロットの息子に負けたら許さんぞ。」

悟空「次回ドラゴンボールVivid「迫る日に向けて、悟天とトランクスの猛特訓！」」

悟飯「うーん、本当にこれでいいのかな…」。

第9話 迫る日に向けて、悟天とトランクスの猛特訓！（前書き）

長らくお待たせしました。久方ぶりの更新です！

第9話 迫る日に向けて、悟天とトランクスの猛特訓！

「くっそー！まだこれくらいしか浮けないのかよ〜。」

悟天への勝利に向けて修行の日々を積み重ねるトランクスは舞空術の訓練を行っていた。

この世界に訪れて以来、気の半減が原因で上手く自身の实力を出し切れずにいる——前回の戦いはそれを象徴させるかのような結果なのだ。

元々トランクス自身の性格も重なっているが恐らく本来の实力を發揮出来れば性格によるマイナス要因をカバー要素としては充分すぎる。

「でも、昨日よりほんの少しだけ気のコントロールができるようになったし、このまま修行を続けてれば元の状態に戻れるかもしれないぞ！」

確実に彼の实力は本領を取り戻しつつあるのだ、本格的な戦闘が可能になる日は近い。その時は悟天も本領を取り戻している可能性があるが。

「…空を飛ぶ術自体が高度な技だと思いますが。」

「そう？ それにしてもアインハルトちゃんの部屋ってトレーニング道具がいっぱいあるね。」

現在、トランクスはアインハルトの自宅でトレーニングを行っているのだ。だがトランクスは当初アインハルトの部屋に訪れて驚いた事が一つ。

それはトレーニング道具が大量に置かれていた事、ごく普通の女子部屋とはかけ離れた大量のトレーニング道具は女性らしさを感じさせないのだ。

アインハルトにとって格闘とは趣味でも無く遊びでも無い、生きる意味と同意義。それをある種の形として表現した結果ではあるのだが――。

「……いけませんか？」

「いや、そういうわけじゃないけど……女の子なんだからぬいぐるみとか置いてあってもいいんじゃないかなって……。」

「……私には必要ありません。」

女子部屋の定番とも呼べるぬいぐるみの存在は無い、本人が必要としていないからこそその結果なのだろう。元々ぬいぐるみが無くても生活するうえでは問題ない。

だがトランクスは腑に落ちずアインハルトの回答に不満を感じていた、言葉に言い表しにくい感情に対してどう言えばいいのかと言葉に迷う。

「え、え」と……あ、そうだ！修行に便利なアイテムを持ってるんだ

けど、アインハルトちゃんにも見せてあげよつか？」

「便利なアイテム……？ ……そうですね、興味はあります。」

気まずい空気が流れている事に気付いたトランクスはすぐに話題を変える言葉を振る。ごく普通の言葉ではアインハルトとは吊られない、これは彼女と生活する日々を重ねた上で知った事だ。

格闘に関連しない物に対してはあまりにも無関心すぎる。ぬいぐるみもその一部であり、少々窮屈な思考であるとトランクスは感じていた。

「オツケー！ じゃあ、先に外に出て待ってて。」

「……わかりました。」

自宅から玄関へ、靴を履けば外に足を踏み入れるアインハルト。内心では外に出てほしいという言葉に動揺を覚えていた。

何故なら殆どのトレーニング道具は自宅に用意してしまっているのだ。修行に関するトレーニング道具などアインハルトにとっては今更な気がしてならない。

——だが彼が用意するトレーニング道具は画期的だった。

「お待ちせー！じゃ、ちょっと離れててね。それっ！」

「…っ！？ これは……。」

自宅の庭に出たアインハルトが目の当たりにしたのは長方形型の装置。これだけなら驚くに値しないがアインハルトが驚いた要因として一つ。

トランクスはこの装置を設置する前に小型カプセルを投げているのだ、親指と人差し指だけで持てる程のカプセルから装置は唐突に出現した。

「じゃじゃーん、ママが作ってくれた小型版重力制御装置だよ。ここをポチッと押せば…。」

「重力制御装置…！？　ぐ、うつ…！！」

名称を察するに地球全体に例外なく作用する重量に対して何らかの効果があるのだろう、それは明白だ。

だがトランクスが遊び半分で押したボタンでアインハルトは地に這い蹲らせる結果を生み出す事となる。急激な圧力がアインハルトとトランクスに押し掛かったのだ。

それは奥深く水の中に潜れば誰もが必ず感じる圧力。それと似た感覚が二人の全身へと押し付けられアインハルトは立てる事が出来ずに体を地面に激痛と共に叩き付けられてしまう。

「此処から数メートルの範囲なら重力を自由に制御できる…ってアインハルトちゃん!?」

「っ、これが重力制御ですか……ッ。」

アインハルトは眼前で平然と立ち尽くす相手に驚きを隠せず、動揺を露にしていた。同時に重力制御装置に対しても、話には聞いていたが異文化の技術は侮れない事を叩き付けられる事になってしまう。数秒だけアインハルトの状態に気付いていないトランクスは彼女の状態を直視して初めて効力を切る。その事によって今まで全身に掛けられていた異常な圧力は瞬時に消え伏せてしまう。

——そして彼女は理解した事が一つ、あの装置を自身の自宅で使用するれば間違いなく部屋が崩壊してしまうだろう。トレーニング道具やベッド、ガラスが押し潰されるのは目に見える。

「っ、ごめん……大丈夫？」

「……はい、問題ありません。」

トランクス自身に悪気は無い、アインハルトの反応は予想外だったのだ。彼は幾度と無く当たり前のように重力装置を使って訓練を繰り返していた為に彼女へと配慮が欠ける結果となってしまった。

罪悪感に苛まれながら手を差し出し彼女はその手を掴む。生暖かい感触が伝わってくると同時に立ち上がればトランクスは口を動かす。

「よかった、本当にごめんね。すぐに片付けるから……。」

「いえ…その必要はありません。」

「えっ！？ それってどういうこと？」

片付けようと伸ばす筈の手は伸びる事は無く、否定の言葉に動揺を表す。

「トランクさんと私の強さの差は修行のやり方が違う事も関係していると思います。

恐らくあの強力な圧力に浴びているだけで体は鍛えられる筈…立てるぐらいにはなれるかと。……暫く貸してもらえませんか？」

「……わかった、その代わりそれを使うときはオレがいる時だけだからね。アインハルトちゃんは女の子なんだし、無茶してカラダ壊したら元も子もないから。」

「わかりました。…そんなことはないと思いますが、ありがとうございます。」

完璧に納得したわけではない、アインハルトは内心腑に落ちないが承諾故に回答を口にする。

——こうして二人は決闘に向けての修行の日々を確実に進めているのであった。

その頃、ヴィヴィオと悟天はアインハルト達との対決に向けて同じように特訓を繰り返しており修行の毎日を重ねている。
ヴィヴィオの自宅周辺に広がる庭が彼等の修行場となっており、今も修行を続けているのであった。

悟天は気が半減した事による影響でトランクス同様に実力を発揮できる訓練、ヴィヴィオは今の実力よりも更に上の実力を身に付けるため。それぞれ目的に応じた練習を行っている。

「ヴィヴィオちゃん、ちょっと手伝ってー!!」

「どうしたの悟天くん？」

だが唐突にヴィヴィオを呼びかける声によって修行は一時中断、悟天の方へと振り返った彼女の瞳は点となっていた。

「ここからボクに石を投げてよ。」

「い、石……？」

発言はヴィヴィオの予想斜め上、きょとんとした唖然の表情を浮かべるヴィヴィオの真意を悟天が理解する事は難しい。
彼の言う通りに周りに置かれた小さな石を片手で掴み取ったヴィヴィオは悟天へと狙いを定める――。

「ええいつ！」

ヴィヴィオは何処か遠慮がちに投げていた、理由がわからない悟天への発言からくる戸惑いが彼女の力を弱めているのだ。だがそれでも体に命中すれば怪我を負う事は間違いない。彼女が遠慮がちに投げた小石は手加減が入っていても充分な速度と威力を持つ。

「ヴィヴィオちゃん、もっと速く投げてくれないと修行にならないよ……。」

「えっ、そ、そうなの……？」

余計に増した戸惑いに満ちた声を漏らすヴィヴィオ、だがよく考えてみれば彼は自身より実力は明らかに上。それは温泉時の事件によって一通りの戦闘力を目にしている。

悟天は投げられた石を片手で容易に受け止め不満を口に出す。恐らくヴィヴィオが本気で小石程度を投げてもビクともしないだろう。

それは安易に思い付く取るに足らない誰でも理解出来る思考、単純に明快に彼の方が強い。

そしてもう一度、小さな兎のぬいぐるみが取った小石を受け取るヴィヴィオの手には加減など一切入らない。彼女本来の実力を出した高速の一発が飛来する――！

「よつと！」

再び軽々と小石を受け止める悟天、ヴィヴィオは未だに彼の真意を見抜く事は出来ない。修行という言葉が彼の行動を理解するヒントであつたとしても理解する事は出来ずにいる。

「これがヴィヴィオちゃんの本気なの？ それならこの辺から投げ
てよ。」

「うっ……！」

ヴィヴィオ自身、こうなる結果は見据えていた。だがそれでも不満を抱かずにはいられない、悟天の悪意のない挑発的発言は火に油を注ぐ行為に等しいのだ。

指摘した位置は悟天とは近距離に値する位置であつて同時に其処から小石を投げ付ければ必ず命中するであろう位置、馬鹿にされたと感じるヴィヴィオは内心腹を立てていた。

「だつたら……。」

故に彼女は愛用のぬいぐるみを手取る。発生するのは巨大な発光体――。

「わたしの本当の実力をらせてあげる！セイクリッド・ハート…セーリットアープ！！」

「え…？」

少女に纏わり付く発光体は姿を消す、同時に変わり果てたヴィヴィオの姿を悟天は目視する。あどけなさが残る幼い顔立ちから一変した凛々しく逞しい姿。

彼女の面影が残された金色の髪とオッドアイの瞳を持つ大人の姿。
右サイドに束ねられた金色の髪と先程までの衣装とは違う戦闘防衛服。
バリアジャケ
スト

「うわあっ！？　ヴィヴィオちゃんが大きくなっちゃった…。」

「あ……そういえば悟天くんはこの姿を見せるの初めてだっけ…？」

負けず嫌いな面から来る感情と苛立ち、様々な物が縋い交ぜとなり複雑な心境を抱くヴィヴィオ。だが実は悟天にこの姿を見せるのは初めてだ。

何処か拍子抜けな声を漏らしながらヴィヴィオは自身の姿をどう説明しようか言葉に迷いながら思考する。

「その、これには色々事情があつて……えつと魔法を使つたら大人になるの！」

「魔法を？ いいな。ボクも大人になつてみたいなあ。」

「けど、悟天くんには魔力がないから……。」

「あ、そつか……。魔力は氣と違うんだっけ。」

「氣がどんな物かわからないけど、多分違ふと思つよ……？」

「えっ！？ ヴィヴィオちゃん、氣を知らないの？」

かくんと首を傾げるヴィヴィオに不思議そうに見据える悟天、やがて話の論点がズレていく事に気付いたヴィヴィオは――。

「そ、それより修行に戻ろうよ。まずはわたしからだっけ……えいっ！！！」

話題を変える為、ヴィヴィオは付近の石を拾い取り再び悟天へと投げ付ける。その速度は先程の物と比べ物にならない程に速い。一般人の肉眼では目視する事すら難しいだろう。何より変身前のヴィヴィオと変身後の彼女との違いは衣装もあるが大人になった事が一番に大きい。子供と大人の差、筋力等が変身前と比べて格段にパワーアップしているのだ。

「わあああつ!？」

「すごいっ!この距離で避けるなんて……なら!」

それを象徴させたかのような一撃が近距離で叫び声を上げる悟天へと投げられた、距離上の問題から避ける事すら困難だが悟天はなんとか危機一髪の回避に成功する。

だが次に悟天が目視したのは「小石」。更に続けて視界に入り込む石、石石石、僅かな時間の間にありえない速度で移動する石を次々と悟天は避け続けていく。

「わっ!？ストップ!ストップしてヴィヴィオちゃん!」

「すごいすごい!それじゃあ、どんどん行くねー!」

ヴィヴィオは強い者と戦う行為を好む傾向がある、その強い者が悟天に当てはまってしまっていた——周りが見えずにいるヴィヴィオは次から次へと石を投げ続ける。

「わわわっ!？（投げる石のスピードが速くなってきている……。）」

だが悟天は一般人でもなければこの世界の住人でもない、幾度となく石を避け続け避け続け更に猛攻を増すヴィヴィオ。

近距離からの連続攻撃は悟天を徐々に追い込んでいた。悟天の体の

動き…即ち避けるパターン、手順が彼女の脳内に記憶され攻撃に反映されていく。

「…修行まだ続けてるみたいだね、ヴィヴィオも結構本気を出してるみたいけど……。」

「う、うん…そうだね。」

ヴィヴィオと悟天との戦闘を窓際から静観し続ける二人、なのはとフェイトは手を出す事もなくそのまま見守り続けていたが——彼女達は目を凝らして様子を見守り始める。

「なんだかちょっとヴィヴィオがやりすぎかな…。」

「そうだね、あのままじゃ悟天が怪我をするかもしれないから……止めてくる。」

「えっ、フェイトちゃんまって…!!」

走り出す、金色の髪を風に乗せてフェイトは突然足を動かした。唐突な行動故に一步出遅れた反応と共になのはも先のフェイトを追いかける。

なのはとフェイトの目からして二人の修行は非常に危ない物であると互いが共通して感じつつあった。目標付近で石を何度も投げる行

為は目に余る光景なのだ。

「ヴィヴィオ！少しやりすぎだよ。」

「悟天くん、怪我はない？」

「わっ、フェイトママ……！？」

「ふう……ボクは大丈夫だよ。」

悟天を遮るように乱入するフェイトを目視で捉えると同時にヴィヴィオの手は静止する、未だに石を掴んだまま驚きの表情を浮かべていた。

一方でなのははゆっくりと相手に近付いていけば悟天の様子を確認して口を動かす。一安心付いたような落ち着いた顔色である。

「修行のつもりかもしれないけど……今みたいに本気でやってたら悟天が怪我をすると思うな。」

「そ、そっか……ごめんね悟天くん。」

「気にしないでいいよ。それより、そろそろ組手やろっか。」

「組手……？」

思いもよらぬ言葉を発する相手に小首を曲げるフェイトは会話の内

容が理解出来ない。故にこれからの展開もまた予想する事が彼女にはできなかった。それは同様になのほにも言える事だろう。

「フェイトちゃん、どうする？」

「組手で怪我をするかもしれないから…私は二人を見てるかな。」

「そうだね……わたしも二人を見ておくよ。」

やがて始まる戦闘、ヴィヴィオと悟天がぶつかりあう瞬間を二人は目を凝らして傍観し続ける事となる。修行の成果を発揮する為に、それぞれの決闘が刻々と近付いていた。

第9話 迫る日に向けて、悟天とトランクスの猛特訓！（後書き）

悟空「オッス！オラ悟空！！ 二人とも真面目に修業してるみてえだな。会う時が楽しみだぞ。」

ベジータ「ふん、トランクスめ…。ブルマには勝手にカプセルを持ち出した事は黙っておいてやる。」

クリリン「それにしても、いきなり大人になるなんてなあ。あれも魔法なのか？」

ピッコロ「だろうな…。あの様子だと戦闘力も上昇しているように見える。」

ヤムチャ「マジかよ！？ こりゃ悟天達もつかうかしてられないな」。

天津飯「…お前もな。」

悟空「次回ドラゴンボールVivid「本気の勝負だ！ 悟天、ヴィオVSトランクス、アインハルト」」

悟飯「あの二人が本気で戦ったら、ただじゃすまないだろうなあ。」

第10話 本気の勝負だ！ 悟天、ヴィヴィオVSトランクス、アインハルト

——聖地の国で古い結晶により異なる次元の死者蘇りし時、黄金の戦士が集結する。

聖王教会・教会騎士団所属の騎士カリムはそう予言した。彼女は予言能力の持ち主であり、唐突に彼女はそう口を開いたのだ。同じく騎士に相応するシャツハは彼女の言葉を耳にして理解する事は出来ずにいる。意味がわからないのだ。

「騎士カリム…それは一体どういう意味なのですか？」

「……私にもよくわかりません。」

不吉な予兆か、或は幸福の予兆か。何かに対しての予言に代わりはないが意味を理解出来なければ只の不気味な戯言に過ぎない。静かに二人は思考を繰り返していく中でカリムは自身が創造した思考を口にした、だがそれは——……。

「次元の死者や、黄金の戦士が気になりますね…。」

「確かに、黄金の戦士もそうですが死者が蘇るだなんて……。」

それは彼女達の世界では「最も有り得ない現象」が起きるのだ。故にカリムが予兆する内容は「最も有り得ない予言」である。

決して口に出されず言葉にされる筈がない物。それは正しく彼女達からすれば不気味で不吉な予兆でしかない。

「…まあ、私の予言はよく当たる程度の占いです。もしかしたらハズれるかもしれません。」

「そう、ですが……。」

不気味な未来、有り得ない未来、普段通りの態度を見せるカリムだが内心では何か胸騒ぎを感じていたのだった。

「…騎士カリム、そろそろお茶にしませんか？」

シャツハは優しく微笑みを掛けながらそう提案した、その緩やかな一言が緊迫した空気を見事に打ち破る事ができている。

先程から予言に夢中だったカリムは表情を一変させてすぐに嬉しそうな笑みを浮かべて、問いに同意を返すのであった。

その頃、アインハルトとヴィヴィオとの決戦の場はアラル港湾埠頭の廃棄倉庫区画、試合時間まで10分ほど時間に空きがあった。

現在の時刻は1時20分——その場にはヴィヴィオと悟天だけが姿を現しておりアインハルトとトランクスの二名がその決戦の場から姿を見せずにいる。

「試合時間まであと10分だね。」

「もうそろそろ到着ツスかねえ…？」

「ヴィヴィオ、悟天くん、がんばってね。」

「うん…ありがとう、コロナ！」

「ありがとうコロナちゃん！」

ヴィヴィオ以外にもノーヴェやその姉妹、リオとコロナ等が観戦しにその場へ居合わせていたのだ。

だがそのメンバー以外の人物は一人たりとも存在していない。人通りの少ない廃棄倉庫区域は正に決闘を邪魔されない為に選んだ場所とも言える。

悟天は殆どのメンバーと初対面であつたがすぐに自己紹介を交わし、彼等と馴染む事ができていた。

「お待たせしました…アインハルト・ストラトス、参りました。」

静寂な風が吹き荒れ、ヴィヴィオや悟天達を通り過ぎた瞬間…その場の誰もが聞き覚えのある女性特有の凜とした声が耳に届く。

「久しぶり！ヴィヴィオちゃん、コロナちゃん、リオちゃん。」

「来ていただいてありがとうございます、アインハルトさん！それからトランクスくんも…。」

待ち望んでいた二人が顔を見せた途端にヴィヴィオは深く頭を下げて礼儀正しく感謝の意を唱えた。無論、トランクスにも例外はなくその二人の背後に立ち並ぶ二人の若き女性は優しい微笑を浮かべてその光景を見守りつつあった。

「此処な、救助隊の訓練でも使わせてもらってる場所なんだ。廃倉庫だし…許可も取ってあるから安心して全力を出していいぞ。」

「うん…最初から全力で行きます。」

一切迷いが見えない、決意で固められた虹彩異色の瞳。決して妥協は存在しない。それはアインハルトが求めている真剣勝負をそのまま再現したような構図をヴィヴィオが描いていた。

だがアインハルトは無表情を崩す事はなかった。ヴィヴィオと最初に出会ったままの感情が見えない表情…だが彼女の瞳は満足している様子はない、寧ろ不満に近く浮かばれないようにも見える。

「セイクリッド・ハート…セット・アップ！」

「……………武装形態。」

小さな可愛らしい兎のぬいぐるみを片手に掴み取ると同時、アインハルトとヴィヴィオは互いに変身魔法を唱えた。

一瞬にして眩い光が少女達を覆い隠し、光が消え失せた頃には二人の少女はどこか子供の面影を残した見慣れない女性へと変貌する。

「アインハルトさんも大人モード!?」

「わあ…こうして見ると二人とも、凄い威圧感……。」

「陛下、無理はなさらずに……。」

「頑張つてねヴィヴィオちゃん。」

金色の髪をサイドテールにさせ、紺色の防護服に純白のジャケットを着込むヴィヴィオ。薄緑が入り込んだ銀色の髪をツーサイドアップにさせた翠色の重厚な防護服を着用するアインハルト。

ごく普通の子供として捉えるには明らかに両者は異端だ、突然大人になってしまふ光景には一般人では驚きを隠し切れないだろう。だからこそ二人の対決は見物として充分過ぎるほどの価値を持ち合わせている。

コロナとリオ、姉妹達はその姿に歓声を上げて両者を互いに見守るような視線を送り続けていた。

「今回も魔法はナシの格闘オンリー!5分間の一本勝負……。」

「……………」

張り詰めたプレッシャーを抱える二人、ヴィヴィオは静かに構えを取る。

「それじゃあ、試合——開始ッ！」

アインハルトとヴィヴィオの試合開始直後、ティアナは彼女達から視線を逸らして別方向へと目を向けた。その先にあるのは二人の少年だ。

互いに睨み合い、緊迫した雰囲気が彼等を包み込んでいる。その状況はアインハルトとヴィヴィオのような決闘直前の様子とよく似ているのだ。

（綺麗な構え……油断も甘さもない。）

（凄い威圧感……一体どれくらい、どんな風に鍛えてきたのだろうか？）

「アインハルトちゃん、みんなに修行の成果を見せてやれ！」

甲高く女性のように高い少年の声が鳴り響く、直後に少女が見せた行動はヴィヴィオ同様の戦闘体制……綺麗に構えを取る。

（いい師匠や仲間に出まれて、この子はきっと格闘技を楽しんでい

る。)

(…勝てるなんて思わない。)

間合いを詰めたり、取ったりの繰り返し。張り詰めた空気が二人を包み込み、緊張故に少女達の握り締めた手には汗が含んでいた。

(私とは何もかも違うし……。)

(だけど、だからこそ一撃ずつで伝えなきゃ!)

(覇王^{わたし}の拳^{いたみ}を向けていい相手じゃない。)

(この間はごめんなさい、と——。)

僅かな時間の差は勝負の世界で非常な結果を生み出す、それを避ける為にも彼女達は動き出したのだ。

「~~~~ツツ!!」

先手を取ったのはヴィヴィオ、突き出される拳を察知した上でアイ

ンハルトは更なる先手… ヴィヴィオよりも一層早く動いた上で拳を突き出す。

「つく……！？」

先手を奪い取られたヴィヴィオは必死に両腕を交差させて彼女の拳を防ぐ、だが追い討ちを掛けるようにもう一つの腕で更にアインハルトは畳み掛けていく。

「ふ、二人とも変身してると余計に凄いね…。」

「そうね、二人ともこの日の為に必死で練習をしてたんだし……。」

スバルとティアナは二人の攻防戦を目にして口を開いた、高速を容易に超えた打撃が繰り返される二人の戦闘は魅入られる要素を持ち合わせている。

両者の才能と能力、そして努力が生み出した力がその魅入られる要素と言っている。そして悟天とトランクスで行った修行の成果が大きく出ている。

もはや一般人では彼女達を目視する事はできない。何を行っているのか、何を思っているのか、残像となった二人の戦闘が一般人の目に入り続けていた。

（わたしの全力……！！）

ヴィヴィオが持つ想い、記憶、技量。持ち合わせている全てをインハルトに叩き込む。自身の全力を認めてもらう為、問答無用の拳。総ての感情が込められた拳（一撃）が超高速の攻防戦の中に潜む僅かな隙に付け込んで大胆にヴィヴィオは乗り出したのだ。

（わたしの格闘技——ストライクアーツ ツツ——！！）

「っ、あ……！！」

「アインハルトちゃん！？」

それは初めてアインハルトがヴィヴィオに出し抜かれ、彼女の勝機に成りえる要素が生まれた瞬間でもある。

「やったあっ！」

悟天の無邪気な声が響く束の間、ヴィヴィオの猛攻にたじろぎ始めるアインハルトは必死に抵抗するが徐々にヴィヴィオが先手を取りつつあった。

（——強くなるって約束した。）

彼女によって腹に打ち込まれ、頬へと打ち込まれた事で痛みが生じ

てきたのだ。防護服によって大幅に痛みは和らぐが何度も彼女の拳を受け止めていれば膝を付くのも時間の問題だろう。

（強くなるんだ！どこまでだって！！）

「がっ………！！」

初めてアインハルトの表情は苦々しい痛みを耐えるような歪んだ表情へと変化した。同時に彼女の腕に入り込んだヴィヴィオの拳、今まで以上の腕力が込められた一撃。

受け止めた腕に装着された金属品が無残に罅裂が入り、音を立てて崩れていく。——そして勝負を決する時が迫った。

「……っ！？」

深淵の虹彩異色はヴィヴィオを捉える、足先から練り上げる強烈な衝動を重厚なアスファルトの地面に強大な傷跡を残して踏み止まった。

「 覇 王 ・ 断 空 拳！！ 」

腕に微かな痛みを覚えつつも強烈な衝撃が拳に乘せられ、ヴィヴィオの腹部へと直接叩き込まれる！

「……そこまで、一本！」

ヴィヴィオを戦闘不能にさせるには充分過ぎた、異常なエネルギーが集結し命中した事で強大な爆煙が発生したのだ。それを切り裂くように吹き飛ばされるヴィヴィオは地面へと叩き付けられ再起不能となって子供の姿に戻っている。

「ヴィヴィオ……！！」

「陛下……！？」

—— 周りが心配して彼女に近付いてみれば気を失って暫く動けそうにない状態だ。疲労したアインハルトが勝者となって勝負に決着がつくのであった。

「ヴィヴィオちゃん大丈夫かなあ。」

「……致命的なダメージを与えないように防護服に叩いておいたので、暫く経てば起きると思います。」

「アインハルトが気を遣ってくれたんだね、どうもありがとう。」

「そうだったんですか？ありがとうございます、アインハルトさん！」

「あ、いえ……。」

お礼を言われる為に口にした訳ではない、アインハルトはコロナやリオ、姉妹達から視線を逸らして頬を赤くする。

相手の好意的な態度に彼女は慌てふためく対応が多かった。今も視線を泳がして対応に困っていると…。

「……あらら？」

「す、すみません……あれ!？」

突然目眩が生じアインハルトは一気に体制を崩してしまう。今まで凜とした態度から戸惑いに満ちた表情となってティアナに受け止められる形になる。

その時に少女は改めて自分の体の異変を認識した。自身の体の節々に力が入らないのだ、特に片腕。上手く体制を整えようと努力するが思い通りにはならない。

「ど、どうして……。」

「ラストで一発カウンターでカスってたろ、時間差で効いてきたな？」

「確か、に……………っ!？」

「ん、よっと……………」

再び足の力が入らなくなりスバルに受け止めてもらう形に。アインハルトは生暖かい感触に戸惑いを覚えながら思い通りにならない自身の体に齒がゆさを感じていた。

「いいから、じつとしてるよ。」

「そのまま、ね……………」

ティアナとノーヴェの一言によって仕方がなくアインハルトはそのまま状態を継続する事になる。彼女自身も人に凭れ掛かった状態の方が体の安定を得やすかった。

（3倍の重力を克服したアインハルトちゃんにここまでダメージを与えるなんて…悟天達も本気で修業してたんだな。）

「……………ところで、ヴィヴィオはどうだった？」

会話の間が空いた所でノーヴェは先程からアインハルトに投げたかった問いを口にしたのだ。此処に至るまでに様々な訓練を詰んだヴィヴィオは以前戦った時よりも遥かに強くなっている。

その成果は驚異に値するほどのものだ。悟天との練習はヴィヴィオの

能力を最大限に引き出す事に成功している——だがそれはアインハルトも同様であり、誰もが彼女達の試合に目を奪われるだろう。

「彼女には、謝らないといけません。」

未だに表情の変化は乏しいが、その顔色は罪悪感や不安などを表していた。凜とした女性特有の声で彼女は未だに気を失うヴィヴィオへと視線を向けつつ。

「先週は失礼な事を言ってしまった……訂正します、と。」

「……そうしてやってくれ、きっと喜ぶ。」

アインハルトが口にした回答に至るまでの経歴は思考の繰り返しだ。当初彼女は自身に本気で拳を交えてくる理由が今一理解する事ができずにいた。

戦闘で感じたヴィヴィオの様子が今も少女の中では記憶として蘇る。何度も何度も攻撃を受けながらも立ち上がると同時に隙が無くなっていく拳や蹴り——。

「……はじめまして、ヴィヴィオさん。アインハルト・ストラトスです。」

彼女が本当に伝えたい事が、今アインハルトとを考えている物である

かどうかはわからない。証明するにはヴィヴィオが起きる必要があるのだ。

だがアインハルトは目を開ける様子の無い少女の手を取って静かに自分の名前を名乗った。まるで友達のような接し方で。

「起きてる時に言ってやれよ？」

「…恥ずかしいので嫌です。」

再び視線を逸らすアインハルト、頬は紅色に染まり切っておりそれを隠すように俯いている。表情を覗く事は難しい。

「お疲れアインハルトちゃん。後はゆっくり休みながらオレ達の試合を観戦しててよ。」

「っと、次はお前等の試合だったな…すぐに始めるから配置についてくれ。」

頷いて返答を返すアインハルト、注目すべき異世界の格闘技者との対決は好奇心を刺激されるような試合であり他の者からも視線が一気に二人へと収束していた。

「悟天…真面目に修行してきたようだけど、勝つのはオレだぜ。」

「違うよ！ボクが勝つんだ！ヴィヴィオちゃんのカタキは必ずとる

「!!」

「……ヴィヴィオさんは生きてますが。」

睨み合う二人の少年、互いに一定の距離にまで足を踏み入れていくと勝負直前といった彼等独特の張り詰めた空気が包み込む。

互いに道着を着用した姿は先程の少女と比べ格闘戦を行う上での現実感があるのだが——リオやコロナ、この世界での一般人が彼の衣装を目視すれば馴染みがない為に違和感を覚える衣装でもある。

「ルールは気絶するか降参するか……それと海に落ちたら負けだからな。」

「わかった。ボクが勝ったら約束を守ってもらうからね。」

「おいおいおい……まあいいけどよ。」

ルールを決めるのはノーヴェの役割なのだが二人の間でルールが定められてしまう光景にはため息しか出ない。未だに二人は睨み合いは続いていた。

「どんな勝負になるんスカねえ……。」

「悟天くん、トランクスくん、がんばってね!」

「よし……今回は二人のどちらかが気絶するか、降参するかまで試合

は続行する。」

廃棄倉庫区域に広がる潮の匂いが嗅覚を刺激する中、甲高い声が響き渡ると同時に再び静寂の風が音を立てて通り抜ける。

生暖かい体温を冷やす冷風とも呼ぶべき気流が彼女達の長髪を靡かせていた。だがそれはまるで嵐の前の静けさを感じさせ、不気味な雰囲気漂っている。

「それと例外として海に落ちたら負けだ。んじゃ——試合…開始ッ…！」

「きゃあ…っ!？」

「何が起こってるんだ…!!」

周辺を吹き飛ばす勢いで発生したのは強大な衝撃破、強風と化してその場に居る者へと叩きつけられていく。穏やかな風から一変した暴風は正しく自然の暴力だった。

「うつ、く……あのチビ、本気出してるな…！」

「……こちらの事も考えてほしいですね。」

轟音と共に円状に広がる衝撃破を発生させているのは二人の子供。力と外見との凄まじいギャップを感じさせる二人の少年の拳同士が相打ちとなつて命中した途端に発生したのだ。

その威力と速度はヴィヴィオやアインハルトとは比較にならない程の強大な力その物。暴風はもはやアインハルト達を吹き飛ばす勢いで吹き荒れるが彼女達は体力を振り絞つて踏み止まっていた。

暴風が周辺の建物を無造作に叩き付ける中、彼等は――。

「「だだだだだだっ！！」」

遙か上空に彼等の姿を目視する事が出来たが、到底一般人では目視する事すら不可能な攻防戦が巻き起こっている。アインハルト達から見れば太陽の光が彼等を視界に入り込む事を拒んでいるようにも見えるのだ。

途方も無い速度で巻き起こる拳と蹴りの連続攻撃の一つ一つの動作が悪戯な暴風と化して周辺に撒き散らしている。それはまるで異常なエネルギーの塊が上空で集中しているという証拠だ。

「此処からじゃ、二人が何をやっているのかわからないわね…。」

「凄い音だね……此処からでも聞こえてくる。」

突然、悟天とトランクスは間を空けると瞬時に高速回転しながら地面へと着地する。彼女達の中では視界に入り込む二人の姿はもはや残像となって脳に処理されているのだ。

「はあああーっ！！！」

高速を軽々と超えた速度、人間の眼では目視出来ない圧倒的な速度に全身を乗せて力任せな拳を互いに突き出す。
同時に再びアインハルト達に襲い掛かるのは暴風。暴力を我武者羅に叩き付ける一撃。

「つぐ……。」

「ッ……。」

拳は彼等の頬に深く入り込んでいた、圧迫による痛みがじわじわと押し寄せ苦痛の表情を浮かべる二人。
そしてようやくアインハルト達は始めて彼等の動作を目の当たりにしたのだ。今まで圧倒的な速度で確認する事は出来なかったが、今一時停止している彼等をようやく目視する事ができた。

「ん、う……。」

「陛下…大丈夫ですか？」

「デイド…うん。大丈夫…って悟天くん、トランクスくん!？」

目を開けた先には自身の見慣れた人物の顔、そして視線を傾けた先に見えたのは悟天とトランクスとの格闘戦。

「起きたか、今トランクスと悟天の試合なんだ。」

「と、トランクスくんと悟天くんの……？」

「はい…少し危ないですが。」

ヴィヴィオは思わず首を傾げた、危ないという意味を理解出来ないのだ。未だに二人の戦闘は続いており、彼等は額に冷や汗を流していた。

（悟天の気が前に戦った時より増えている…長引く前に決着をつけないきゃマジでやばいぞ。）

（トランクスくんの全力はこんなもんじゃない。本気を出される前にここで一気に決めないと。）

足に力を入れ、飛び退くように再び距離を取る二人。全員の注目を浴びる中で悟天とトランクス表情は険しい物へと変化していた。それはまだ幼い少年とは思えない威圧感を乱暴に放ちながら、ヴィヴィオとアインハルトとはまた違う他者を精神的に圧倒するプレッ

シャーだ。

「二人の姿が……！？」

唐突にティアナは口を開いた、そして誰もが彼等を包み込む光に目を奪われてしまう。

「——はあああ……！！！」

黄金の粒子が出現した後の数秒後、金色の光が彼等を包み込む。無重力に逆らう金色の髪と威圧的な碧眼へと変化する。炎のように燃え盛る金色の光は太陽の光のように一方的に周辺を照らし出す……二人の対決の行方は如何に。

第10話 本気の勝負だ！ 悟天、ヴィヴィオVSトランクス、アインハルト

悟空「オッス！オラ悟空！！ どうやら修行の成果が出ているみてえだな。ほとんどムダな動きがねえぞ。」

ベジータ「フン、まだまだ甘いな。到着したらオレがみっちりしこいてやる。」

悟飯「ああ〜！悟天とトランクスのバカ！！なんで超サイヤ人になるんだよ〜。」

ピッコロ「騒ぎにならなければいいが…。」

悟空「次回ドラゴンボールVivid」遂に到着！ フルメンバー大集合！！」

ブルマ「みんなー！リーダーに反応が出たわよーっ！っ！！」

第11話 遂に到着！ フルメンバー大集合！！

「遂に……この時が来た。管理局に復讐する時が……！！」

飛翔魔法を使用しているのか、男は飛んでいた。聖王教会の上空を浮遊する男は憎々しげに華やかな建物を見下ろしている。

その男は戦闘服——即ち防護服バリアジャケットを装着しており、外見上は何処にでも居そうな一般魔導師という素朴な外見であった。

「村人達の恨み、故郷を失った私達の悲しみを味あわせてやる……！！」

更に、男の隣に存在したのは女。二人は目立たないように地味なフードを着込む事で顔を隠していた。素顔を知られる事は彼等の中では不味い事なのか、顔や体系をフードによって隠蔽されている。それは一般人の目に写れば不気味な存在だ。顔はフードと影によって隠蔽され、体系もまったくわからない。それはまるで犯罪者が自身の素顔を知られない為にマスクやサングラス、帽子等を着用して隠すのとよく似ている。

「ほっほっほ、高揚するのは結構ですが、“アレ”を手に入れることを忘れてはいけませんよ。その為にわたしを呼び出したのではありません？」

「……わかっている。今回の計画にはアレが必要不可欠だから……失

敗はするなよ？」

「ほう、このわたしに向かってそのような発言をするとは…本来ならその場で殺してしまう所ですがあなた方には恩がありますからね。それに今あなた方に死なれてはわたし達が困りますので許して差し上げましょう。」

男と女はこの世界から充分過ぎるほどに浮いた存在だが、一番に並外れて浮いていたのは独特な口調で語りかける生き物。それは人間として形容するのは難しい。

外見上は明らかに別種類の生物。地球に存在するかどうかも怪しく、宇宙人という表現が適当な程の外見を持っているのだ。精々共通するのは二足歩行と言葉を喋るという二点ぐらいである。

「……………ありがとう。」

僅かな静寂に紛れた女性特有の甲高い声、同時に巻き起こったのは

—— 聖王教会で発生する”爆発音”。

巨大な轟音が鳴り響き遙か上空にもその凄まじい破壊音が耳に届く。それはこの世界にとってイレギュラーな事態、にも関わらず彼等は反応を示さない。

微かに男の口元が歪む、だがそれだけであり微動な反応を示すだけである。

「どうやら始まったようですね。この星の方々の戦闘力を部下に調

べさせた結果、わたしが出る幕ではないと判断いたしましたので彼等に任せることにしました。

勿論アレの在り処を吐かせるまでは殺さないように命令しておきましたのでご安心を。」

聖王教会から五月蠅く非常ベルが騒ぎ立てれば場は騒然とした大パニックを巻き起こしており、そんな中でも取り乱さず冷静沈着に語り掛ける悪魔は、笑っていた。

一方では金色のオーラを身に纏う二人の姿に圧倒され強風によって吹き飛ばされかねないヴィヴィオ達は動揺を見せながらも踏ん張り続けている。

明らかに自分達とは違う別種類の人間、そして異次元の技術。ヴィヴィオ達の世界から見れば彼等の存在はある種の革命的ではあるがトランクス達から見てもそうだろう。

「二人の姿が変わった……!?」

重力に逆らう金色の髪と威圧的な蒼眼、その外見は以前の姿と比べ

て圧倒的に存在感が増し言葉に言い表せないプレッシャーを感じさせる。

「金色の、戦士……っ。」

「あの金髪……！ あの時の……。」「

「それにしても、凄い力……ちょっと危ないかもしれないね……。」

気を抜けば確実に吹き飛ばされる環境下、危機感を頂かざるをえないのだ。尋常とは思えない強大な力を持つ二人は存在自体が異質以外の何者でもない。

他の姉妹達もそれを同様に感じ取っている。異世界についての事情をノーヴェから聞かされていたとしても、実際に現場に立ち会えばそれを尚更実感させられていた。

「綺麗な色……！」

「うん、カッコイイよね！」

「だけどスバルさんの言う通り、危ないよ……！」

邪気の欠片も感じさせないリオとコロナの会話にヴィヴィオは慌しく割って入り釘を刺すような言葉を送る、だがそれは真実味のある言葉だ。

彼等が今以上にヒートアップさせて戦いを始めれば何らかの被害を

出す可能性は否めない。二人を身に纏う美しき金色の光は畏怖の対象でもある。

「やっぱ今のままだと超サイヤ人には長くなれないようだな。」

「そうだね。でも、それなら変身が解けちゃう前に決着をつけられいいんだよ。」

燃え盛る金色の炎に身を包む二人の少年、それは飛翔する黄金の炎——何気なく取り留めない会話を繰り返すように悟天とトランクスは口を開いていた。

「そんなことわかってるさ。悟天、勝っても負けても恨みつこなしだぜ！」

「うん！よし、いくぞーっ！！！」

幾度と無く轟音が鳴り響き、猛烈な攻防戦が巻き起こる。衝撃破のように荒れ狂う暴風を引き起こす二人の戦闘はヴィヴィオ達から見れば次元の違いを感じさせる程だ。

練習の秘訣を知るアインハルトとヴィヴィオなら二人の強い理由がある程度までは察する事が出来るが他の者からすればとんでもないレベルだろう。

「…あれは止めないとまずいんじゃないかな。」

不意に茶色い長髪を持つデイエチは口を開いた、だがその言葉を投げるのも無理はない——二人の戦闘による衝撃が地面へと広大な傷跡を残しているのだ。

「やりすぎだ…っ、ぐ…!!」

「こんな時に地震…!？」

「うっん、違う…二人が戦ってる衝撃が地面に伝わってるだけだと思っ…!!」

「わわわっ…!」

「リ、リオ大丈夫…!？」

地震が起きたかのような揺れがヴィヴィオ達に襲い掛かっていた、思わず体制を崩したりオはヴィヴィオに支えてもらう形となりつつ、歩く事すら上手くない状況下、それを作り出す元凶は明らかに別次元の存在だろう。

「世話の掛かるチビだ…おい!! 悟天にトランクス〜っ!!」

「今すぐ戦いを止めて!!二人ともーッ!!!」

ノーヴェとヴィヴィオは力強く上空で激闘を繰り広げている二人へと訴えかけるが、その叫び声は虚しく轟音によって消し去られてしまふ。

故に二人の戦闘は止まる気配すら感じる事はなく更なる激化を辿るばかりであった――揺れも急激に激しくなり海が荒々しく波を打ち被害は確実に広まっている。

「っ……、聞こえていないようですね。」

「飛翔魔法で直接呼び掛けるじゃダメっすか？」

「それだと私達が怪我をします……！」

「二人に近付けば近付くほどこの風が物を言うでしょうね……。」

「じゃ、二人に攻撃をするとか……？」

「私達の攻撃ではビクともしないと思いますが……。」

この場に居合わせる中でトランクスと悟天を止められる者はいない、二人が満足するまでこの超越的な戦闘は止まらないだろう。

だがその頃には周辺がどうなっているのか……邪魔をするなどばかりの暴力は一向に激化を巡っていく。

「こんな時、なのはママかフェイトママが居てくれたら……。」

脳裏に浮かぶ二人の母親、あの二人ならもしかしたらトランクスと悟天を止められるかもしれない——だがそんな彼女の思考を吹き飛ばす勢いで地震は起きていた。

「はあああああああつ！！！」

巨大な金色の炎は正しく戦闘の火花、たった二人の少年でさえも止める事すら叶わない。地面には亀裂が入り込みヴィヴィオ達は立ち尽くす事すら出来ずにいた。

「あれ……？」

トランクスと悟天は更なる激闘を繰り広げ凄まじい音響が何度も鳴り響いている、終息を見せない戦いだ。が一つの奇妙な発光体が彼等の周辺に出現してたのは誰もが気付かずにいた。

衝撃破と化した暴風にびくともせず、眩い光が消え去った瞬間——
—ヴィヴィオは目視する、カプセル型の巨大な機械を。

「おっ！景色が変わったぞ。」

「どうやら目的地に着いたようだな。」

「ん？　なんか暑くないですか？」

「確かに暑いわね……ってオーバーヒートしてるじゃない!!」

ヴィヴィオが目視した機械内での会話は場の空気とは相反しすぎた物、内部からの異常現象に気付いた女性は声を張り上げた。

「カカロット、後ろをしてみる。」

「後ろ……？　うわあち！あちちちち……！！」

丁度、背後にはオーバーヒートの末に装置は紅色の火が生じていたのだ。このままでは火が広がり死に至るのは時間の問題——なのだがブルマを除いた四人は大した問題ではない。

「お父さん！？ 大変だ、火を消さないと…。」

「いや、その前に此処から出ることが優先だ。火は既に全体に回ってるからな。」

室内全体に火が包み込む事で当然その後に起きるのは急激な温度上昇、彼等が気付いた時は既に緊急事態とも呼ぶべきトラブルへと悪

化していた。

慌しく周りに視線を張り巡らせる五人は必死にこの状況を打開する術を思考し探し続ける……。

「ダメ…ハッチが開かないわ。」

「ふん、開かなければオレがぶっ壊してやる。」

「まで！ 下手に衝撃を与えれば爆発を起こしかねんぞ。」

余談だがハッチが開かなくなった原因はベジータにあり、この世界に来る以前…出発時点で強引にボタンを壊すように押した彼がこの事態を招いた原因の一つでもあった。

今にも爆発寸前と言わんばかりの勢いで火は全体を包み込み機械自体を焼き尽くしている。

「ボク達は問題ないですがブルマさんは……。」

「えーん、あたしまだ死にたくな〜い!!」

「なにか方法は……— そうだ！ お父さん、瞬間移動を使ってください。近くに悟天達がいるはずです。」

悟飯は不意に思い浮かんだように悟空へと言葉を投げて提案を口にした。それはこの状況を打開するのに最も合理的な判断とも呼べる。タイムマシンが悟天達の居る世界へと到着していた事が不幸中の幸

いだろっ、更に二人の気も全身から伝わってくる事を四人は気付いていた。

「なるほど…その方法なら此処から抜け出せる他にあいつらも見つけることができる。」

「悟飯くん、アタマいい!」

「悟天達の気だな……あつた! みんな、オラに掴まってくれ!」

悟空の指示通り全員の片手が悟空へと触れるように接触する。やがて彼等の姿が消えてしまつまで、およそ数秒の出来事であつた。

「だああああ……えっ!? わわわわっ!!?」

そして二人を停止させるには充分過ぎる程の要素が唐突に出現したのだ。何の前触れも予兆も、一切の通告も無い。ある筈のない物が其処に居た。

世界にとっては異端物以外の何者でもない、故に悟天とトランク스가驚くに値する。猛攻を繰り広げるバトルは即座に中止され代わりに驚きの声だけが広がつたのだ。

「よう、悟天！迎えにきたぞ。」

「無事でよかった。あまり母さんを心配させるなよ？」

「お父さん！兄ちゃん！！」

見慣れた人物が其処に居た、悟空と悟飯を直視した途端に悟天には無意識の笑顔を露にして叫ぶ。

「トランクス！」

「手間かけさせやがって…。」

「パパ！ママ！！」

同様の現象がトランクスにも起こっていた、ブルマとベジータの顔を目視した直後に嬉しさ交じりの驚いた表情を浮かべて。

「悟天く〜ん！！トランクスく〜ん……！！」

「二人とも、やっと止まってくれたのね……っ。」

「地震とか起きちゃったからびっくりしたよ！」

「！……もしかしてさっきの光って…」

「トランクスさん、悟天さん、そちらの方は一体…？」

スバルとティアナが二人に追いつくと同時、リオが感想を述べた。同時にアインハルトとヴィヴィオは二人の周辺に佇む悟空達へと視線を向ける。

純粹に問いを示すような視線だったが何故かピッコロ相手にだけは誰もが冷やかな警戒が入った視線を送り続けていた。

「あ、アインハルトちゃん。一緒にいるのはオレのパパとママ、悟天のパパと悟飯さん、それとピッコロさんだよ。」

「オッス！　オラは孫悟空だ。悟天達が世話になったな。」

「はじめまして、悟天の兄の孫悟飯です。」

それはこの世界に存在しない人間達、いや正確には人間ではない——人当たりのよい返事を返す悟空に思わずヴィヴィオは慌てて頭を下げつつ。

だがトランクスの発言に誰もが疑問を持ったろう、悟天の父親と言われた悟空の外見は明らかに二十代。父親としてはあまりにも若すぎるのだ。しかし髪型や服装が親子だと物語っている。

一方では兄と称された悟飯は穏やかな優しさを感じさせる笑みを浮かべていた、名前以外を除けば特に不振に感じられる要素は一切ない。

「……………」

「あたしはトランクスの母親のブルマ、それで腕を組んでるのが父親のベジータよ。」

「…ピッコロだ。」

初めて緑色の生き物は口を開く、ベジータと称された男は無言を貫き通しながら。しかしノーヴェやスバル達は驚いた表情を崩す事はなかった。

「え、えつとはじめて…！悟天くんのお友達の高町ヴィヴィオです…！」

「……アインハルト・ストラトスです、以後お見知りおきを。」

戸惑いが残った自己紹介を口にする、頭を下げるヴィヴィオと物静かに名を名乗るアインハルトは正反対の反応をそれぞれ示していた。

「でも、どうしてオレ達がここに来てるってわかったの？」

「ふふっ…それはトランクスの荷物に入れておいた発信器の反応をタイムマシンで……ってそうよ！タイムマシンは！？」

ブルマは慌てて視線でタイムマシンを探すがそれらしい物は見つからず、破片の一つも視界に飛び込んではいない。

だが海の真上でそれは見かけた。焦げ切ったタイムマシンが海の中へと沈んでいく光景を彼等は目にしたのだ。

「…し、沈んじやいましたね。」

「これでオレ達が元の世界に戻る術を失ってしまったな…。」

「そうなんか！？ まいったな…こっからじゃ界王様の気も感じねえから瞬間移動でもムリだろうし……。」

「ねえ、帰れないってどういうこと？」

首を傾げる悟天、だが回答は誰も投げない。

「うるさい奴等だ、壊れたならまた作ればいいだけだろ。」

「なんですって！ 元と言えばアンタがハッチのスイッチを壊すからこうなったんじゃない！！それにタイムマシンは特殊なパーツが必要でそう簡単に作れないのよ！！」

呆然と眺める悟空達、一人だけ五月蠅く騒ぐブルマに対してヴィヴィイ達までもが半分放心状態で沈んでいくタイムマシンを見守っていた。

まったく話についていけない、ヴィヴィオ達からすれば悟空達がどのような手段でこの世界に辿り付いたのか。

そして彼等の反応もまた同様に。迂闊に口を挟むことも出来ずに状況認識に努力を費やすだけである。

『——スバルさん、大変です……!!』

「シスターシャツハ……!?!」

だがその雰囲気を一瞬的に断ち切られてしまう、それは誰もが予兆しなかった緊急事態。

『何者かが聖王教会を襲撃してきました……!! 爆発によって辺りは酷い事になっています……。』

「襲撃……!?!」

空中にモニター画面が出現すると同時に映し出されたのはシスターシャツハ、突然の出来事に認識すら忘れてしまうような光景であった。

『つぐ……!!』

『なのはさん！？ 大丈夫ですか、なのはさん…っ！！』

「——なのは、ママ……？」

シスターシャツハは戦闘が起きている現場から離れた位置で通信しているようにも見えた、少なくともスバルとティアナからはそう予想したのだ。

しかしなのはの悲痛に塗れた声がヴィヴィオの思考を急停止させた。それはスバルとティアナにも同様に思考回路を悪くさせる要素だ。

一等空尉と呼ばれし存在が苦戦している。状況は思った以上に酷な印象を植えつける物だった。

（えっ？ なのはって…まさか！？）

決して口にはしない声を抱える悟飯は深刻な表情へと成り代わる。それはあまりにも唐突だ。

「どうなってるんだよ…っ！！」

『今、高町一等空尉とフェイト執務官が現場に居合わせていますが、両方とも苦戦しています……。』

「フェイトママも……？」

「ヴィヴィオ、大丈夫……？」

「…う、うん。大丈夫だよ！ありがとう、リオ！」

二人の母親が今戦っている。ヴィヴィオは胸が締め付けられるような痛みを感じながらもリオに明るい返事を口にしていた。

「あの二人が苦戦って、只事じゃないッス！」

「……二人の事はよくわかりませんが、すぐに聖王教会に行った方が……。」

「おーっと、こんな所に隠れて何をしているんだ？」

『天下のギニュー特戦隊から逃げられると思うな。』

『なっ……至急聖王教会までお願いします！では……っ。』

その耳障りな声を聞いた瞬間、全員は体を凍り付き一瞬の間沈黙が包み込んだ。

シャッハの声を最後にモニター画面が消えると不穏な空気だけがヴィヴィオ達や悟空達を包み込み、背筋に悪寒を走らせていた。

「——お父さん！ 今、ギニュー特戦隊って……。」

沈黙を打ち破ったのは悟飯の声、だがその発言はあの耳障りな男達の声の正体を知っているかのような口ぶりだ。

「あの方角から邪悪な気を複数感じる。恐らくそれが奴等なのだろう。」

「ちょっと待つてよ！ 確かギニュー特戦隊って昔、孫くん達がやつつけちゃったんでしょ？なんでこの世界にいるわけ？」

「オラにもわからねえ…けど、死んだらあの世にいくはずなんだけどな…。」

「奴等が生きていようが関係ない。またオレがぶつ殺してやる…。」

物騒な言葉を並べる男にヴィヴィオやリオ、コロナは小さく震えてその様子を眺める。殺し合いは決して禁じられるべき行為なのだがその男は本気で殺しそうに思えた。その様子を逃さずに目にするスバルとティアナは改めて口を開く。

「…とにかく私達は聖王教会へ向かいますが、危険地帯に民間人は連れて行けません。」

「止めておけ…お前達では殺されるぞ。」

まるで彼女達を見通したような視線を向ける男、外見からして人間

ではないのは明確なほど異様な外見を持っていた。

貫くような眼光に言葉を失い呆然としてしまうスバルだが再び覇気を取り戻した彼女は迷いのない一言を呟く。

「……それでも、民間人を巻き込むわけにはいきません。」

「ノーヴェ、ヴィヴィオ達の事は任せたわ。」

「ああ、気をつけろよ……！ヴィヴィオ達を送り届けたらそっちにくからな。」

「スバルさん、ティアナさん……ママのことお願い。」

スバルとティアナは同時に軽く頷けばヴィヴィオ達に背後を向けて走り出す。向かう先は勿論聖王教会、なのはとフェイト、シスターシャツハが戦う戦場。

不穏な空気だけが残されたヴィヴィオ達は気まずい空気をどうにか崩そうと必死に思考を繰り返した末に発言した。

「孫、どうするつもりだ。あいつらだと殺されるのは目に見えてい
るぞ。」

「そうですよ。やっぱり引き止めに行った方が……。」

「ん〜だったらオラ達も聖王教会ちゅうところに行くってのはどう
だ？　そこで、犠牲者が出る前に力タをつけるんだ。」

ノーヴェや姉妹達はそれぞれ黙り込んだまま思考を続ける中で、悟空達にしか聞こえない程の小声で会話をする。その内容はノーヴェ達の耳には入らない。

だが悟空の声だけはごく普通に会話するには十分な大きさ——つまり場の空気を読まない大きさを持つ声で口に使っていたのだ。

「あの……もし聖王教会に行くなならわたしも連れて行ってください！」

「ヴィヴィオちゃん……？」

「陛下……！？」

ヴィヴィオの迷いの無い瞳が彼等を貫くと同時に全員の視線を浴びる事となる、それぞれが驚いた表情を浮かべて沈黙が流れていた。

「あそこにはわたしの大切な人やママ達がいるんです……わたしはその大事な人やママ達のこと助けたい！」

悟天くんみたいに強くないけど、戦うことはできます。せめて足を引っ張らないようにしますから……連れて行ってください……！」

「……私も、連れて行ってください。ヴィヴィオさん一人で行くには危険すぎると思いますので……それにあなた方の強さも気になります。」

「アインハルトちゃんまで……。」

ヴィヴィオは二人の母親が自分を助けてくれたあの出来事を思い出しながら大きく声を張り上げた声と共に頭を深く下げる。

後に静かな声が降り注ぎヴィヴィオは見上げるように視線を向けた先には険しい表情で悟空達へと虹彩異色を向けるアインハルトの姿だった。

「気持ち嬉しいけど、本当に危険なんだ。最悪死んでしまうことだって「それならボクも一緒に行くよ！」ご、悟天……」

「お願い兄ちゃん！ボクがヴィヴィオちゃん達を守るから一緒に連れてってあげて！！」

次に名乗り出たのは悟天、小さな身体とは相反する決意の強さを晒しだす三人はギャップのような物を感じさせられる。

悟天は日常的にヴィヴィオやなのは、フェイト達にお世話になっているのだ。浴槽を破壊した事や自身の我侭を受け止めてくれる彼女達への恩返しをこの形で表そうとしていた。

「確かに悟天くんがいれば心強いとは思うけど……。」

「でも聖王教会を襲撃してる人達ってすごい強いんですよ……！」

「ヴィヴィオとアインハルトさんだけじゃ危険だよ……。」

「陛下の身に危険な事があつては困ります。」

「だがあの二人が付いているのなら…」

様々な反応を口にするリオとコロナ、姉妹達は混乱しているように見受けられる、だがノーヴェだけは一言も口にするのではなく場を見守るだけだ。

「…トランクス、お前はとうするんだ？」

「…オレも行くよ、ヴィヴィオちゃんやアインハルトちゃんがムリしないように見張つとかないといけないしね。」

「ありがとうございます、トランクス。」

「トランクスくん…ありがとう！」

ノーヴェは静かに問いを投げれば回答が返ってくる。それはある意味、ノーヴェの予想通りの回答でもあった。

悟天とトランクスは強い。それは誰もが知っている事実だからこそリオとコロナ、姉妹達は言葉を失ってしまった。

連れて行ってほしいと頼むべきか行くなと止めるべきか——誰もが思考するが結果は出せない。

（でも、こんなに大勢で向かって大丈夫かな…。もし他に敵がいてボク達がない時に襲撃でもされたら…。）

一人だけ、若い青年は険しい表情を浮かべて黙り込んでいた。周辺を視線で見渡す等の動作を行う青年は明らかに何かを考えている。

「なら、オレは残ろう。此処にいる奴等も守らなければならんからな。」

「ピッコロさん！それならボクも……。」

「いや、オレ一人で問題ない。悟飯、お前はあいつらと聖王教会に向かえ。」

「で、ですが……わかりました。」

ピッコロの言葉に渋々承諾した悟飯の顔色には不満が残っていた。

「メンバーはオラと悟飯、悟天とトランク스에ヴィヴィオとアインハルトだな。ベジータ、おめえはどうすんだ？」

「さっき言った筈だ。全員まとめてぶっ殺すとな……。」

「こらベジータ！子供達の前で物騒なこと言わないの！」

「ははっ。ピッコロ、ブルマとみんなのことを頼んだぞ。」

「ふん……お前達も過去に倒した敵とはいえ油断はするなよ。」

まるで聖王教会を襲撃した敵を知っているかのような口調だ、姉妹達は疑問に感じながらも事の経緯を見守りつつ。

「ほら、ヴィヴィオちゃん。」

「…えっ？」

「アインハルトちゃん、絶対に手を離しちゃダメだよ。」

「わかりましたが……これは……。」

首を捻らせてしまいがちな光景が唐突に出来上がってしまう、ヴィヴィオの片手を握る悟天は悟飯の片手を掴み、悟飯は悟空の肩へ手を置いていた。

そして片方の悟空の肩に乗せるベジータの片手。更にトランク스가ベジータの手を握りもう一つの手はアインハルトの手。まるで悟空を中心とした独特な構図が完成していたのだ。

「じゃあ、ちよっくら行ってくる！」

そして悟空が二本の指を額に触れた瞬間、風景に溶けるように風切り音を奏でて彼等は消失していたのだった。

第11話 遂に到着！ フルメンバー大集合！！（後書き）

悟空「オッス！オラ悟空！！ 悟天達に会えたのはいいけど、タイムマシンがねえから帰れなくなっただぞ。」

ブルマ「だから、アタシは行きたくなかったのよー！アンタ達と関わるとロクな目に合わないわ。」

ピッコロ「しかし、今はそれよりもやるべきことがあるだろう。」

ヴィヴィオ「まって！なのはママ、フェイトママ！！」

悟飯「……」

悟空「次回ドラゴンボールVivid「蘇りし死者、復活のギニュー特戦隊！！」」

アインハルト「この闘いであの方達の真価がわかります…。」

第12話 蘇りし死者、復活のギニュー特戦隊！！

陽が沈み始める頃、茜色の雲が宙を覆っていた。赤色と橙色の鮮やかなコントラストは絵に描いたような美しい光景である。だが空を切り裂くように奏でる悲鳴と爆煙だけはその光景からあまりにも浮いていた。

「リクーム……キック！」

「ぐう……っ……！」

火に包まれた聖王教会は荒々しい強風が攻撃的な衝撃破と化して散乱し、麗々しい建物を瓦礫と化してしまっている。壁に亀裂が入り込み今も全壊しそうな状況下だ。

そして大勢の魔導師達は襲撃犯を食い止める為に武器を手にとって戦いを挑んでいたが虚しく地面に倒れ伏している。

立ち上がって戦う者は数える程の人数しかない、当初の圧倒的な数は少数の襲撃犯によって『全滅』させられかけていた。

「もっとビシッ！とした技はないのか？ これじゃつまらんど。」

「レヴァンティン……こいつを必ず倒すぞ！」

『——Schlang reform!!』

聖王教会周辺の上空を飛行するシグナムに対なす大男が其処にいる、
不服そうに物足りないと言つような表情を浮かべる男の体は傷一つ
付けられていない。

電子音声と共にシグナムが手にする武器は形状を変える——片刃
の長剣から蛇腹剣へとレヴァンティンは姿を変えた。

彼女の防護服は男と相反して傷だらけの衣服となっており、苦々し
く歯を食い縛つた表情を浮かべている。

「手加減してやってるんだからもう少し楽しませろよ。」

紫色の魔方阵が浮上すると共に強風が伴いシグナムを中心として発
動させ、紫色の火炎が華麗に舞い踊る中で鞭状に連結された刃身が
蛇のように舞う姿は美しさをも表現していた。

目の前の立ち塞がる男への容赦ない敵意と迷いの無い決意が体現さ
れた彼女が繰り出すであろう必殺の一撃は剣技とは到底思えない大
威力を秘めている。

「飛竜一閃——ッッ！！！」

シグナムは上体を大きく逸らすと同時、紫色の火炎が螺旋状に描き
ながら男へと降り注ぐ。火炎の中から姿を現すのは蛇腹剣であり、
それは無造作に男の身体を挟み取らんとばかりの一撃。

その光景は蛇が獲物に喰らい付く刹那が体現されている。そして直
撃したのか強烈な爆発を生み出し、辺りを爆煙と火花で全てを埋め

尽くす。

（倒したか……？）

もはや聖王教会は戦場と化し、シグナムの飛竜一閃による爆煙と火炎から零れ落ちる火花によって優雅な麗しき建物は姿を消していた。それは正しく戦場の傷跡とも呼ぶべき争いの痕跡しか残されていない。

手応えがあつた様子を見せるシグナムは額に流れる冷や汗を傷だらけの片腕で払い除ける。自身の血液が額に付着するが気にする様子もなく苦々しい表情に何処か微かな光を見据えたように、男が居た場所を見つめたまま。

恐らく男も先程の攻撃を直撃すれば一溜まりも無いだろう、その思考がシグナムの脳内を駆け巡る。避けられたのならともかく、少なからず傷跡一つは残せただろうと最低限の結果を想定した上で彼女は煙の中に佇む一つの影に視線を射抜きながら考えていた。

「ヤッホー」

清々しい声がシグナムの耳を通り抜ける、呆気にとられてしまうような声こそが絶望感を与えるのに充分すぎた。それはあまりにも不可解な光景。

「何…ッ！？ あの攻撃を受けきって、傷が付いていないだ…！」

！
」

回避された？シグナムは回避という思考をすぐに切り捨てた。なぜなら相手は確実に直撃した事を物語る証拠が残されている。

それは無残なボロボロの衣服——もはや衣服としての機能を備えていない、ただの屑切れ。男はそれを羽織っている。

「今の攻撃はなかなかよかったぞ。この調子でオレを楽しませてくれ。」

「化け物め……！！」

唯一、男の身体に残されていたのは埃だけだった。

——鉄槌の騎士ヴィータはグルドと名乗る異様な生物と戦いを繰り広げている、だが其処には息を切らすヴィータと余裕を露にするグルドの姿。

何度も何度も幾度と無く強靱な破壊力を秘めたハンマーをヴィータは振り回す。狙いは勿論グルドであり、的確に狙いを定めた攻撃が何度も耐える事は無く降り注ぐ。

「くそっ、なんで当たらねえーんだよっ!!」

「ガキの癖に…！ 止まれ!!」

聖王教会の外庭、シグナムとまた別方面で戦闘が立て続けに行われている。

ヴィータの放った攻撃は熟と避けられ続け一向に当たる気配を見せない。絶対に避けられないであろう一撃でさえも必ず避けられる、その無限ループでヴィータを苦しめていた。

奇妙な事に太った緑色の生物グルドはヴィータの攻撃が当たる直前に姿を消すのだ。そして別の位置に移動している、更にその移動姿を目視する事すらできない。まるで瞬間移動しているように。

「ガキじゃねえ!!っか、いい加減当たれえええっ!!!!」

『Schwalbfliegen!』

突如、ヴィータの片手は何かを放り投げる。同時に宙を舞うのは数個の鉄球だった、赤色の光を纏う鉄球を勢いよくハンマーで打ち出す。

赤色の線を描きながらグルドへと目掛けて飛翔する鉄球は誘導制御という特性を併せ持っている。誘導制御とは何かの障害物にぶつからない限り敵に命中するまで追い掛け回す。

「止まれ!」

視界からグルドは消え伏せると同時に前方へと直進していた赤色の光を纏う鉄球は方向転移する、方角は何故かヴィータ自身へと。そして背後から感じる気配と地面に映る影。

ヴィータは理解する、何らかの方法によって瞬間移動したグルドは自身の背後にいます。故に手に持つ鉄で出来た武器ハンマーを回転するようにぶつけようとした。

（これ以上時間を止め続けたらオレのエネルギーが尽きてしまう。
ちっ、こんなガキに使うのはシャクだが仕方ない…）

咄嗟の判断はグルドを追い込むのに十分な効果を發揮している、何故ならグルドは徐々に余裕が削れつつあったのだ。息切れを引き起こすヴィータと同様にグルドもまた息が上がっていた。

それが何を意味するか、それは戦闘を持続させる為の体力が今も減っている。だからこそ彼は奥の手段を使うのだ——！

「きええええええー……つ！……！」

「ツ……動かねえ……！？」

グルドの奇声と共に動かなくなるヴィータの体とグラーフアイゼン、突然凍り付いた全身に戸惑いを露にすればヴィータの視界に接近し続ける鋼鉄の鉄球が頭に入り込む。

「くつくつく、どう料理してやるか。」

「畜生……!!」

このままでは衝突する、焦りから冷や汗が額から流れ出すヴィータは必死に身体を動かそうとするがビクともしない。原因不明の現象に襲われるヴィータは成す術がなく、悪意が込められた嘲笑い声が背後で広がっていた。

——もはや数々の戦闘によって聖王教会は原型を留めていない、半壊した建物内部には瓦礫と倒れた兵士だけが散乱している。だが兵士は決して命まで奪われていない、気絶しているだけだ。襲撃犯の兵士と時空管理局の魔導師が通路に次々と倒れていた。

そして聖王教会の中庭、シグナムやヴィータとはまた方角が違う別方面。其処には桜色に輝く光と金色に輝く光が交差している。

『Short Buster!』

『Plasma Lancer!』

事態は悪化を辿る一方であり、なのはの衣装もまた手加減無しのエクシースモードで敵の侵攻を食い止めようとしていた。

「おせえぜ！」

「あらよつと！」

膨大な魔力を秘めた桜色の砲撃と金色に煌く無数の弾体は牙を向くが次々と男は避け続け、砲撃と無数の弾体は爆発を引き起こす。余裕を持った速度は遊びという言葉を連想させるかのように軽々と二人は空中を泳ぎ回る。なのはとフェイトの攻撃は一向に当たる気配も見せなければ隙も無い。

圧倒的過ぎる程の実力が生み出す戦闘は茶番劇のように男は飛び回っていた。当たらない苛立ちと相手の強さに対する焦りがなのはとフェイトを蝕んでいく。

「くつ、当たらない……！」

「このままじゃ魔力を無駄に消費するだけかな……フェイトちゃん、わたしはプラスターモードでいくよ。」

「な、なのは……！？あのモードを使ったらなのはが……！」

「フェイトちゃん、言いたいことはわかるけど……でもみんなを助け

ないといけないから。」

穏やかな微笑を浮かべるのはに対してフェイトは思わず言葉を失ってしまふ。ゆりかごの一件がフェイトの脳裏を支配する中で桜色の粒子が出現する。

大量の桜色の粒子がなのはを包み込み、彼女の掛け声と共にそれは消失してしまふ。外見上の変化が見受けられない彼女の姿に男達は疑問に感じたが一瞬でその感情は消えた。

「…ごめんねフェイトちゃん。けど心配しなくても大丈夫だから。」

「なのは…?」

「わたしが一瞬だけ隙を作る…だから、フェイトちゃんは急いでカリムさんとはやてちゃんの所に…!!」

強風と共に出現した彼女の雰囲気は以前と比べて威圧的な物へと変化しているようにフェイトは感じている、それは最もなのはと身近な関係だからこそ一層それを感じていたのだ。

「…わかったよ、なのは。でも無茶だけは絶対にしないで……。オ―バードライブ―真・ソニックフォーム!」

『Sonic Drive・Riot Zamber』

金色の文字が武器に埋め込まれた宝石に刻み込まれていく、そして唐突に広がったのは金色の光。光はフェイトを覆い隠して新たな姿へと変貌させた。

「うん、なるべく善処するよフェイトちゃん……ありがとう。」

金色の光が消失し、強風と共に現れたのは露出度の高い防護服を着込むフェイトの姿、それは明らかに無防備極まりない紙一重のもの。一撃でも体に叩き込まれれば立てなくなるほど防御力を低下させている。

だが鎧を捨てた代償として彼女自身のスピードが大幅に上げられていた。一撃でも当たれば落ちるがその一撃を当てる事は至難の業であり、ハイリスクハイリターンな戦法を体現させたのがソニックフオームだろう。

金色の剣を両手に敵を見据え、フェイトは二人の男と睨み合う。

「おっ！戦闘力が上がったようだぜ。」

「これで少しは楽しめそうだな。」

男達は口角を上げて笑う、それはなのはの得体の知れない威圧感の正体に気付いているかのように笑う。その男達の様子にフェイトは背筋に寒気を感じさせていた。

何故なら男達の態度をフェイトは理解できていない。理解できない

敵の仕草は不気味な物にしか写らない、だがそれでもフェイトは相手から視線を逸らさずなのはが作る隙を待ち続けている。

（多分わたしの魔力じゃ叶わない…。）

なのはは既に気付いていた。自身の限界以上の力を引き出しても男達を打倒する程の力はない、それは決定的な実力の差が裏付けている。

しかし、それでも敵に立ち向かう術は残されているのだ。幾度の戦闘経験で積み上げられてきた才能と努力の結晶体を彼女は持っている。

（体内のエネルギーを魔力に変換して……。）

なのはの体内に存在するエネルギー、人が生きる事に必要な力を魔力へと性質を変化させていく。その技術自体はこの世界では異端の分類だ。

通常、魔力とは大気中に漫然している魔力素をリンカーコアが吸収し純粋な魔力として加工させる事で魔力を生み出す。

魔力を生み出すには魔力素が必要であり、その魔力素を代替した物が彼女の体内のエネルギーだ。

それはある異世界へと足を踏み入れた時になのはが独自に編み出した技術である。

「これで…！ レインジングハート、いくよ…！！！」

限界以上に引き出された大量の魔力を倍増させるかのように生み出される魔力と共になのは自身は桜色の光を纏い、太陽のように輝く姿には誰もが見惚れてしまうような風景を描き出していく。

槍状の杖を両手に男達を標的として捉えれば凄まじい破壊力を秘めた桜色の衝撃破が放たれ、空気を引き裂き其処にある物をすべて掻き乱すように貫いていく…！！

「なにっ…！？」

「ぐう…っ…！！」

「（す…凄い…）——行こうバルディッシュー！！」

突発的に威力が倍増された攻撃に対して男達はその衝撃破を真正面から受け止める事になってしまう、想像以上の破壊力が男達を襲い腕や脚に傷を付け始める。

男達の反応を見計らってフェイトは二人の隙へ潜り込むように、彼等の後方へと通り過ぎていく。目指すははやてやカリムが居る場所へ、金色の閃光と化してとてつもない速度で向かっていくが——。

「ちいつ、ナメたマネしやがって…。」

「遊びはここまでだ。ギニュー特戦隊の真の恐怖を見せてやるぜ！」

フェイトの行動を男達は見逃すはずもない、青い色の肌を持つ男は振り返って金の閃光を視界に捉えた直後にそれ以上の速度で衝撃波の中を突き進んで彼女を追い抜いてしまう。

「え…？」

瞬きもできない速度を持つて男は瞬間的にフェイトの前方を取ってしまっていた、先程追い抜いた筈の男が瞬間移動でもしたかのように目の前に立ち憚る光景にフェイトは啞然の声を上げる。

能力的に最大限の速度を発揮できる状態であるフェイトは純粹な速度で追い抜いた男により彼女の一番の強みがたった一秒によって潰されたといってもいいだろう。

何の効力も彼等の戦闘では僅かな勝機すら掴めない。フェイトの目の前に広がるのは敗北のみであり、実力の違いはなのはやフェイトが想像している以上の差が存在している。やがて男は容赦なくフェイトの腹部へと目視できぬ蹴りを入れた。

「ぐ、あああつ……！！」

「まだまだいくぜっ！」

苦痛な悲鳴を口にした瞬間、更に叩き込む拳と蹴り。無慈悲な攻撃が一つ一つ確実に装甲の薄いフェイトの体へと命中していく。

一発でも叩き込まれば瀕死状態に追い込まれるにも関わらず数え切れない重い一撃が次々と叩き込まれていく非情過ぎる光景だった。

「フェイトちゃん…っ！！」

「おっと、よそ見るなよ！」

力無く落下していくフェイトに気を取られている間が結果的に隙を見せる事になってしまっ、その間に飛び込むのは赤い色の肌を持つ男。

「おらあっ！！」

「あ……ぐ……！」

突然、なのはの腹部から激痛が生じたのだ。戸惑いを覚えながら視線を腹へと向ければ男の持つ白髪が目に入り彼女は理解した、腹部に男の拳が滑り込んでいる事実。

まるで瞬間移動したかのような動作になのはは焦りを感じつつ、悲痛に塗れた声を漏らす。無論、瞬間移動をした訳ではない。なのはの目では捉えられない速度で攻撃をしただけである。

腹部からの凄まじい衝撃になのはの体は耐え切れず、そのまま地面へと突き落とされるように体を叩き付けるのだった。

「くつくつく…さっきの威勢はどうしたんだ？」

「う、くう……。」

顔を歪ませ敵を睨み付けるが迫力は感じられない、だが嘲笑っていた男は何故かなのはから視線を外して周辺に目を向ける。それが奇妙な行動として写ったのかなのは男を直視し続けていた。

「……ん？ 誰か隠れていやがるな。」

男が呟いた声をなのは完全に聞き取る事はできずにいる、何故なら微かに別の声が耳に入り込んでいたからだ。今にも消えそうな声に集中するようになるのは耳を澄ます。

「何者かが聖王教会を襲撃してきました…！！ 爆発によって辺りは酷い事になっています……。」

「シスターシャッハ……？」

瓦礫に身を潜めているのか、姿はなのはの視点から確認できないが誰かと会話しているように聞こえた。先程からシャッハが近くに身を潜めている事に気付いていなかったのはは思わず目を見開いて声が聞こえる方角へと視線を向けて激痛に耐えながら体を起こそうとする。

「つぐ……!!」

「なのはさん!? 大丈夫ですか、なのはさん…っ!!」

「おーっと、こんな所に隠れて何をしているんだ?」

男の声に思わず凍り付くシャツハ、同時に微かに耳に届いたヴィヴィオの声になのはは上体を起こして戦闘体制を整えようとしていた。

「天下のギニュー特戦隊から逃げられると思うな。」

ようやくシャツハの姿を目視した頃には誰かと通信していたのか、モニター画面を切って青い色の肌を持つ男と睨み合う。

——絶体絶命という言葉に相応しい絶望的な状況が展開される中で息を飲むシャツハ。このままでは、という思考が脳内を駆け巡っていた。

「ギニュー、特戦隊……?」

唐突に名乗り出た言葉に頭が回らない様子でシャツハは呟く、何かのチーム名のように感じられた名前に対して青色の肌を持つ男はきよとん、とした表情を見せて口を動かす。

「おいおい、ギニュー特戦隊を知らねえのかよ…。」

「ま、ここは異世界つてとこらしいからな。よし！バータ、久しぶりにあの名乗りをするぜ。」

思わず両手に武器を手に取り構えを取るシャツハを無視して男達は一定の配置に付いた途端、奇妙なポーズを取り出す。その光景はあまりにも戦場とはかけ離れた奇矯な行動になのはとシヤツハは呆然と眺める事しかできなかった。

「ギニュー特戦隊の赤いマグマ！ ジー…ース…！」

「ギニュー特戦隊の青いハリケーン！ バ…ー…ータ…！」

「……………えつ、と。」

両手を広げて青い色の肌を持つ男はバータと名乗り、肩膝をつく赤色の肌を持った男はジースと名乗り出て可笑しなポーズを取る姿に二人は啞然とした表情を浮かべている。

「ふっふっふ、どうやらオレ達のファイティングポーズに見惚れて言葉が出ないようだな。」

「当然だろ。ギニュー隊長が直々に考えてくださったポーズなんだから。」

ギニュー隊長？シャツハとなのはは思考を続けていたが彼等の言葉に一時的なストップが掛かった。彼等はギニュー特戦隊と呼ばれるチームの一員、そしてリーダーがギニューと呼ばれる何者か。だが二人が相手をした中でそれらしい人物は見付からずにいる。シグナムがヴィータが相手をしているという思考が浮かぶが何故か腑に落ちない思考でもあった。

「……フェイトちゃんに酷い事をしておいて、大勢の人を傷つけておきながら…よくそんなことができるね。」

「貴方達…そんなふざけたポーズを取って私達をバカにしてるの…！！」

だが笑って済ませられる訳もなく、二人は怒りを露にさせた言葉を言い放つ。しかしジースとバータも同じように激怒して言い放った。

「ふざけたポーズだと！ てめえオレ達のファイティンングポーズをふざけたポーズと言いやがったな！！ おい、ジース！！」

「ああ。殺すなという命令だったがオレ達のポーズをバカにされてはガマンならねえな。貴様だけはこの世から消し去ってやる！」

ジースは空中を浮遊し、紅色に輝く球体を出現させる。唐突に出てきた彼等のむき出しの感情と殺意を直視する暇もなくジースは叫ぶ。

「クラッシャー……ボール!!」

『Protection EX!』

片手で直接当てる事で打ち出す球体、即座に反応したレイジングハートは防御魔法を発動させ桜色の障壁を形成させ球体と激突する。だがジースの放った攻撃は今のものでは防ぎ切る事はできずにいた、障壁を突き破ろうと障壁に滑りこむ球体に必死で防ぎ切ろうとレイジングハートとなのはは努力を重ねつつ。

(もう、だめ……。)

足場に亀裂が入り込む、それはなのはの防御魔法——障壁が突破される寸前という証拠だ。それを何より理解していたのはなのはとレイジングハート。

自身の限界を突破した力を出しても叶わない敵に歯を食いしばる、その様子を静観し続ける事しかできないシャッハは悔しそうに覚悟を決めた。

（ヴィヴィオ、フェイトちゃん…はやてちゃん、みんな……ごめんね。）

ガラスが破壊されるような音を奏でて障壁は木っ端微塵に破片と化してしまう。——もはやなのはとシャツハを守る物は存在していない。

「いくぞ悟天！」

「うん！」

幼い声が唐突に降り注いでシャツハとなのはは驚いてその声の主へと目を向けた。其処には地を駆ける二人が視界に入り込む。あまりにも突然な出来事で二人の思考は状況を飲み込む事ができなかった、同時に生暖かい手や腕の感触が伝わって二人は一気に足場が疎かとなる。

「「いつせーの…せつ…！」」

「「なにいつ！？」「」

そして飛来する少年達は互いに拳を突き出し紅色の球体に命中させて弾き返し、遙か何処の方角へと球体は吹き飛ばされてしまう。男達の驚駭な声を上げてその二人の少年を睨み付ける。理解できない状況が眼前で目まぐるしく展開され理解不能に陥る二人に、不意に声が届いた。

「大丈夫ですか…？」

「え……えっ？」

「なのはママ、フェイトママ……っ！！」

改めてなのはは自分の状態を理解した瞬間、まるで絵に描いたような光景が広がっていたのだ。

一人の青年がなのはの膝を片手で抱えていた。それは横抱きと呼ばれる抱き方であり、お姫様抱っことも呼ばれる抱き方だ。

更になのはの視界に飛び込むのは自身の娘であるヴィヴィオだった、今にも泣きそうな表情で彼女を見つめている。

「お父さん！仙豆を二粒くれませんか。早くしないとこの人達が…！！」

「ああ、わかってる。ほれっ！」

冷静な思考回路になりつつあるのはとは違い、シャツハは未だに混乱が残る様子で辺りを見回している。四方八方に伸びた黒髪の男に腕を掴まれている様子のシャツハは男が突然取り出した豆粒に視線を向けた。

青年の言動はなのはの容態を気に掛けた故の言動である。なのはは先程の戦闘による傷跡が酷く下手をすれば命にも関わるほどの致命傷であった、限界を突破した状態を持続させるだけでも体力の消耗は激しい。

それにも関わらず、今の彼女の表情は苦しみに満ちた顔を浮かべる事もなく穏やかな表情を浮かべていた。その表情の真意なのは自身にも理解する事はできずにいる。

（なんだか、懐かしい感じがする……。）

言葉では言い表せない複雑な気持ち彼女が彼女の心を満たしていた、青年の手や顔付きは決して初めてではない。錯覚のような感覚が青年を見る度に思う。

「聞こえますか？　これを食べてください。」

「……………っ。」

小さな豆を片手に掴んだまま。静かに問い掛ける青年の声になのはは回答を返すわけもなく彼が手に取っている豆をなのはの口に含ませようとする。

なのははそれを口に含めばすぐに噛む。大した味が広がるわけもな

く軽い齒応えだけが印象に残るのだった。

「悟天、仙豆をあの人の方の中に入れてくれ。気絶してるから飲み込ませないとダメみたいだ。」

「わかった！ ヴィヴィオちゃん、手伝って。」

「う、うん…！」

青年はフェイトに目を向けるが気を失っているせいではと同じような反応は期待できないと判断した様子である。

無邪気な声と共に青年から仙豆を受け取った悟天とヴィヴィオは今も倒れ伏しているフェイトの元へと駆け寄っていく。

間近で彼女を確認すれば酷い傷跡がより一層、明確に視界に飛び込んできく。ヴィヴィオは倒れている彼女の体を少し浮かせ、悟天はフェイトの口元に豆を飲み込ませるように含ませた。

「おめえも食うか？」

「わ、私は大丈夫です。それよりも聖王教会の中に騎士カリム達が…！」

シャツは慌てて燃え落ちていく半壊状態の聖王教会へと視線を向けて訴える、だがもはや聖王教会は瓦礫の一角となりつつある。崩れ落ちていく聖王教会を目にした悟空達はその建物を見据えて、口を開いた。

「あの家んなか…邪悪な気が集まってんな。悟飯、ベジータ。こっちはおめえ達に任せていいか？」

「あ、はい。構いませんよ。」

「こんなザコ共すぐに片付けてやる。」

「……あの、気をつけてください…。」

気を察知する能力に長けた彼等は相手の強さを測ることができる。故に、最も力が集中した地点は“此处”ではない。

シャッハが先程訴えた場所こそが最も力が集中する場所なのだ。身震いを覚えさせる邪悪な力の根源を追い求めて、悟空は――。

「サンキュー！ そんじゃ、頼んだぞ。」

「なっ、飛んだ……！？」

シャッハにとっては予想外な出来事……いや、予想外な出来事は以前からも立て続けに起きており今更驚くのも野暮である。そんな風にシャッハは薄々と感じてしまった。

魔法を使っているわけもなく男は突然浮遊して空中を移動したのだ。何らかの術を使っているのは明白だがそれが魔法ではない。その事が彼女にとって驚きを与えるには充分すぎた。

悟空は背を向けて、火炎によって殆どが焼け落ちた教会へと飛び込んでいく。

「えっと……あの、もう大丈夫ですよ。立てるようになりましたので……。」

改めてなのは声を上げて悟飯の腕から離れて地面に足が付く。命の危険が伴う致命傷はあつという間に見る影がなくなっており、何一つ傷が入っていない彼女が其処にいたのだ。

それは秒刻みで怪我が治療されていくという驚異的な回復力だった。悟飯がなのは豆を食べさせた直後にその現象は現れ、あつという間に完治させたのだ。それは正に万能薬と言ってもいいだろう。

「なのはママ……よかった……。」

「ヴィヴィオ……うん、なのはママはもう大丈夫。」

ヴィヴィオは安静の一息を吐いた。なのはは内心、何故ヴィヴィオやその友達であるアインハルトが此処に居るのか今すぐにでも問いかけたかったのが本音だ。

だが彼女達の様子は明らかに普通ではない。相手の態度は自分を心配してくれている、それを理解したなのはその質問を口にするのを止めて今は穏やかな顔で答えるのだった。

「あ、あの…本当に大丈夫なんですか……？」

「うん……心配してくれてありがとう、けどもう大丈夫だから。」

誰もが先程の豆について問いただしたい気持ちになっている、だが異世界の産物についての質問はこの場では相応しくない。故に問いかける事はなくアインハルトとシャツハはなのはに心配した眼差しを向けているのだ。

この場で起きた疑問は、この事件が終わった後で答えを聞こう。その思想が彼女達の脳裏に共通した思考であった。

「フェイトさんの怪我が……！」

先程、豆を食べたフェイトにもなのはと同様の効果が現れている。シャツハはフェイトの急激な回復力に驚きながらも声を上げた。

「よかった…此処は危険ですので離れててください。」

「え……っ。」

静かに呟く悟飯の声、その返答に対して困ったように口を閉ざすなのは。敵の強さを直接目の当たりにした彼女は決して素直に頷く事はできなかった。

自分の力では彼等の強さに及ばない事を理解している、故に青年に

託す事にも賛成できない。故に彼女は口を閉ざしたままどう言っべきかと思いを繰り返す。

勿論それはシャツハにも言える事だ、彼女は「危険です……!!」と安易に賛成する事はなかった。

「…なのはママ、シャツハさん。たぶん…大丈夫だと思うよ。」

「ヴィヴィオ……?」

「悟天くんやトランクスくんのお兄さんお父さんだから…すごく強いと思うんだ、だから大丈夫だよ!」

屈託のない笑みを浮かべられ、なのはとシャツハは否定の言葉を出す事はできなくなってしまふ。ヴィヴィオの言う事は確かに一理あるのだ。

少なからずなのは悟天の強さを目にしている。ほんの数日間の生活でなのはが見た悟天を思い返し、そして悟飯と呼ぶ青年を目にすれば——彼女は首を立てにする事を決めたのだった。

「そうだね…わたし達は此処から離れていた方がいいかもしれないね。シャツハさんもそれでいいですか?」

「……なのはさんがそう言うなら、わかりました。」

「なのはママ……!」

「みなさん…あとはお願いします。」

最後にアインハルトが彼等へと視線を向けて頭を下げて言う。意向が決定した所でののははフェイトを抱えようと倒れ付している彼女へと足を進める。

途中で彼女の視線が泳いで悟飯へと一瞬だけ目を向ければ暫く彼を見据えた跡にフェイトを抱えてヴィヴィオ達と共にその場から距離を取るようにして離れていく。

（もしかして……。）

彼女の視線に対して悟飯や他の者達は気付く事はなかったが、唯一悟天だけがその様子を視界におさめていた。

「バータ…なんでベジータ達がいるんだ。」

「お、オレが知るかよ。なに、今のオレ達はあの頃とは違うんだ…振り返ちにしてやろうぜ。」

顔見知りのような静かな口調で会話をする二人は目の前のベジータや悟飯達を見ては頭に疑問が浮かぶが特に気にする様子もなく見据える。

「こんな酷いことを…お前達がやったのか!」

周辺に倒れ付している大勢の魔導師達に目を配りながらも叫ぶ、血液が流れ怪我をしている魔導師達の存在は悟飯の怒りを誘う結果となっていた。

しかし殺されているわけではない、気絶している事から彼の怒りは最大極限にまで膨れ上がる事態は避けられていた。

「ああ、そうだ。この星の連中はザコばかりだから手加減するのに苦労したぜ。」

「フリーザ様の命令じゃなければあの建物ごと破壊して皆殺しにしてただらうけどな。」

「ひどい……。」

だが彼等の言葉を聞けば聞く程、怒りを感じざるをえないだろう。平然と語るバータとジースは周辺に転がるように倒れている魔導師に見向きもしない。

「ち…フリーザのヤロウも絡んでいやがったか…。」

「ベジータ！あの時に殺された恨みは忘れんぞ！！今のオレ達は昔のフリーザ様に匹敵する力を持っているのだ。」

忌々しく殺意を向ける彼等の中に蘇るのは遠い昔の出来事。まるで

映像のように思い出すその映像を回想していれば同時に怒りを表す。過去の因縁が絡まり合うように再現した今の風景は奇妙な光景でもあった。

「ふん、オレはフリーザなどとうに超えている。くだらんお喋りはここまでだ…向こうで闘っているグルド、リクームごとまとめて消し——。」

「すみませんベジータさん…あの二人の相手はボクにやらせてください。」

静かに名乗り出た悟飯の主張にベジータや悟天、トランクスは驚いた表情を浮かべてすぐに反論を口にする。

「なんだと？ 何故貴様が……——！？」

「…兄ちゃんが怒ってる…。」

「悟飯さん……。」

彼等が見た先には怒りで震える悟飯の姿であり、無意識に歯を噛み締めてはジースとバータを睨みつけていた。

思わず悟天やトランクスはその態度を見て言葉を失ってしまうほどに悟飯は内心溜め込み続けていた怒りを静かに露にする。

「はああああ……っ！！！」

悟飯を中心に攻撃的な強風が荒れ狂い重量のある瓦礫が簡単に投げ飛ばされてしまう、地面に傷跡を入れては我武者羅な突風で乱暴に周囲へと撒き散らしていた。

なのは達は彼の突然出てきた激しい怒りにたじろぎながら強風によって吹き飛ばされないように踏ん張り続けている。

そして強風が治まり体内に眠る潜在能力を限界以上まで引き出した悟飯は敵であるジースとバータに対して威圧的な眼光を向けていた。

第12話 蘇りし死者、復活のギニュー特戦隊!!（後書き）

悟空「オッス！オラ悟空！！ あいつら相手にあの姿になっちまうなんて、悟飯のやつ本気で怒ってんな。」

ベジータ「あいつの持つ潜在能力は計り知れん…。」

なのは「（か、かつこいい……）」

悟天「やつぱり凄いや兄ちゃん！」

トランクス「ああ！オレ達も負けられないな。」

アインハルト「私もあんな風になれたら……。」

ヴィヴィオ「でも、イクス大丈夫かな…。」

フェイト「はやてとカリム達も心配だね…。」

悟空「次回ドラゴンボールVivid「悟飯の究極パワー炸裂！
そして迫る宇宙の帝王」

悟飯「勝てんぜお前は。」

特報

これは……。

「わたしは、なのは…高町なのは！」

不屈の心を持つ魔法少女、高町なのはと。

「ボクは悟飯、孫悟飯だよ。」

心優しき少年、孫悟飯の出会いの物語。

「あ、あれ？　ここは…？」

ある日、時空管理局の指令によりある魔導師を追跡していた時に起こった異常事態。

ロストロギアによって眩い光に包まれたなのはは気がつけば異世界へと足を踏み入れていた。

「グオオオオッ！」

「ふえええっ！？ 恐竜！！」

「大丈夫、ボクの友達だから。」

「悟飯から話は聞いてるぞ。お前は魔法が使えるらしいな。」

「この人が悟飯くんの武術の先生…？」

「ん？見かけない女の子だなあ。もしかして悟飯の彼女だったりするの？」

「ち、違いますよっ！」

「かかか…彼女！？」

「悟飯さんの知り合いですか？」

「魔導師だが高んたか知らんが、ガキがでしゃばるな。」

そこで出会う少年とその仲間達と平和な日常を共に過ごしていくことになる。

だが、平和な日々は唐突に終わりを向かえた。

「ふっふっふ、時はきた…今こそ復讐の時…!!」

世界は混迷に満たされ脅威に対する恐怖が、支配する。

「このままデストロンガスが広がれば70日後に地球人は絶滅するわ。」

「それじゃ、ツフル人の目的は!」

「オレ達、サイヤ人への復讐……だろうな。」

あらゆる生命力を無残に奪い取る恐怖のガス、なのはや悟飯達も例外ではない。

「どうして…みんなお父さんが倒したはずなのに……。」

「くっくっく、オレ達はサイヤ人に復讐する為に蘇ったのだ。」

更に蘇る過去の強敵達、目的はサイヤ人への復讐。

「あ、あれ何…。」

「サイヤジン…タオス…。」

「うわああああっ!!」

そして最強の敵が悟飯となのはの前に牙を向く…。

「ぐう…ああ…。」

「こんなヤツがいたとは……。」

圧倒的な力の前に絶体絶命の危機に陥った戦士達。それでも諦めないのは桜光が天へと届く時、奇跡が舞い降りる！

『おめえがやられれば誰が地球を守るんだ！。力を解放しろ…!!』

「おとう…さん……。」

再び限界の壁を越えた超戦士、孫悟飯と不屈の魔導師、高町なのは最後の闘いが始まる。

「11、12、13、14……今だよ悟飯くん!!」

「でりゃああっ!!」

「ボクは孫悟空の子供だ……お前のスキ勝手にはさせないっ!!」

「わたしは諦めないよ…最後まで、全力全開で!!」

今まで相容れなかった二つの光が一つへと交わった時、絶望が希望へと変わる!

「スターライト……。」

「か……め……は……め……」

『いっけええええええっ!!!!』

「ブレイカー……ッ!!!!」

「波あああ……っ!!!!」

ドラゴンボールVivid(少年と少女の奇跡の一週間)
fboy and girl

「約束だよ…絶対に、また会おうね……。」

近日公開予定

第13話 悟飯の究極パワー炸裂！そして迫る宇宙の帝王（前書き）

「???」パンパカパーン！またせたな。今回はボリウム増量だぜ
「！」

ピッコロ「こら、勝手に出てくるな！」

第13話 悟飯の究極パワー炸裂！そして迫る宇宙の帝王

悟飯が放つ凄まじいエネルギー体が大地を震わせ、激しい地震を起こす引き金となっていた。それはギニュー特戦隊の運命を決したとも呼べる。

「ん〜？ 何か起きたのか？」

「ぐっ……………」

額から血液を流し、片膝を地面に付くシグナム。突拍子もない地震が聖王教会を揺らしてリクームは疑問を感じていた、だがその疑問は地震に向けられた物ではない。

聖王教会に強烈な力の変動を感じ取った故の疑問なのだ、それは必然的にも悟飯の力に対して。だがリクームは彼が此処に来ている事実を知らない。

そして突然消え入りそうな足音が耳に入る、その足音を奏でる人物を目にしたリクームは一瞬驚きを見せるが、途端に上機嫌な表情を浮かべて口にした。

「ハイ、ベジータちゃん。どうして此処にいるのかはわからないが、こいつを助けにきたんだろ…？」

「勘違いするな…オレは貴様に用があるだけだ。そいつがどうなるうが関係ない。」

「っ……？」

逆立った黒髪に鋭い目付きを持った男は気が付けばリクームの近くにまで歩み寄っており、シグナムはその男とリクームの場を見届ける事しかできずにいる。

だが二人の間柄は良好的な物ではないようにシグナムの瞳にはうつった、緊迫感に包まれ隙を見せない。ギクシャクとした冷たい何かがある。

「オレに用だと？ ま、まさかギニュー特戦隊に入りたいなんていう気か！！」

「…死んだ筈の貴様等が何故ここにいる。地獄で異変でも起きたのか？」

（死んだ……！？）

シグナムの脳裏に衝撃が走る、相変わらずリクームのとぼけているのか真面目なのか受け取りづらい言動に対しベジータは華麗に無視してしまう。

だがシグナムとベジータは互いに物があつた、それはリクーム達…ギニュー特戦隊のこと。何故彼等は此处を襲撃したのか——目的がわからない。そして死んだ筈のリクームが現世に存在している事、例を上げればキリがないだろう。

「へっへっへ、そんなこと教えるわけないだろう。」

嘲りを含んだ笑い声を上げて否定の意を表せば、ベジータは彼に対する興味を失ったように呟いた。

「…そうか。なら、もう貴様に用はない。」

その言葉を口にした瞬間、刹那が起こる。突然——リクームは地面を這い蹲っていた。いや、そう言っても過言ではないほどの秒刻みの現象が起きたのだ。

シグナムがどう足掻いても傷一つすら付けられないリクームは不様に地面に這い蹲っては耐えがたい激痛を堪える姿となっていた。

「あぐ…っ！！　べ、ベジータ…タ…。」

それはベジータが一般人には目視できない速度でリクームを攻撃したからに他ならない、その速度はシグナムやリクームでさえも目を通す事はできないのだ。

故に、まるで一般人やシグナムからすれば唐突に彼は地面に這い蹲っていたという異常現象を目の当たりにしてしまう結果となる。

「この程度の相手に苦戦するようでは、この星の奴等の戦闘力もたかが知れてるな…。」

「……………」

ベジータの攻撃によってリクームは殆ど動けない状態に追い込まれていた、その事実がシグナムの脳裏に突き刺さるような衝撃を与える事にもなる。

「何……！！」

（消えただと……！ どうなっていやる……。）

だが更に二人が驚くであろう光景が唐突に広がったのだ。蹲つて堪える姿を見せるリクームの肉体は霧のように跡形もなく背景へと溶けていた。

その現象を明確に表現するのなら“霧散”^{むさん}。まるで彼は最初から存在しなかったように体は消えてなくなりこの世から姿を消している。シグナムとベジータは互いに啞然とした表情を浮かべながら、リクームがいた場所を眺めていた――。

「うおっ！？ バータとジースのヤツ派手にやりすぎだ。こっちまでホコリがきてやがる。」

「くっそお……!!」

荒れ果てた大地から浮遊するグルド、未だに体が動かないヴィータは歯を噛み締めて彼を睨み付ける――が、その荒んだ地上とは裏腹な幼い子供の声が響いたのだ。

「あゝあ、兄ちゃんの闘いみたかったなあ……。」

「しょうがないだろ、敵は他にもいるんだから。まずはそいつらをやっつけるのが先だ!」

その暢気な会話を耳にしていたグルドは呆れて物が言えず、彼が目にした先には悟天やトランク스가何処かつまらなさそうに歩いている風景。そして後方にはアインハルトとヴィヴィオ。

「そうですね、これ以上怪我人は増やすべきではありません。」

「そうそう……ってなんでアインハルトちゃん達がいるんだよ!？」

「私があそこにも戦闘の邪魔になるだけだと思ったからです。」

「それに、此処にいる人達は放っておけないから……。」

アインハルトは無表情を崩さずに述べる、だがその表情の裏には何処か悔しさを含んだ複雑な物だ。

そしてヴィヴィオの言葉に素直に共感を抱く二人。――放っておけない、その気持ちだけは四人にとっての共通点である。

「おい、ガキ共！　なにしにきやがった！！」

遙か遠くから聞こえた声に全員、気付いていないのか見向きもしない。

「どうしよう、トランクスくん……。」

それよりも問題なのはアインハルトとヴィヴィオであった、悟天は途方にくれた視線をトランクスに向けて訴える。

「うーん、来ちゃったものは仕方ないか……もし何かあったらオレ達で二人を守ればいいだけだしな。」

「いいえ……自分の身ぐらいは守りますのでお構いなく。」

「二人ともありがとう、でもアインハルトさんとでなんとか頑張ってみるから……。」

「こ、この野郎……オレをムシしやがって……これでも食らえー……っ！……！」

子供が四人、それはヴィータにとっても予想外の展開。グルドは怒りに身を任せて周辺の物体を超能力で浮遊させてしまう。
木の枝、ガラスの破片、瓦礫、小石、グルドは周辺に存在する物体を悪戯に浮遊させて武器として四人に投げ放つ――！

「「危ないっ！！」」

「「きゃああああ！！！」」

トランクスと悟天の声は重なり合う、アインハルトとヴィヴィオの背後に迫り来る凶器は高速を飛び越えて彼女達に襲い掛かっていた。その速度は例え武器にはならない物体でさえも殺傷能力が芽生え武器へと変異させる速度。常人の反応速度では到底追いつく事はできない、いや攻撃されているという事実さえも気付けないだろう。

故に二人だけはその速度を目視し、トランクスはアインハルト、悟天はヴィヴィオへと互いに強引な腕力によって地面へと押し倒すように攻撃を避ける。

アインハルトとヴィヴィオは忽然こつぜんの攻撃に驚いた表情で二人を見上げていた。自身の状況が頭に入れば入るほど、顔面を紅色に染め上げていく。

「えっ、ええっ……えつと……！」

「は、離れてください……！！！」

「あ、ごめんね。」

「……ッ…ごめん!!」

戸惑うヴィヴィオに拒否反応を見せるアインハルト、その構図がどういう物なのか。それが頭に入ったトランクスまでもが顔面を真っ赤にさせてすぐに離れる事になる。

一方で悟天は上手く頭に入っていない様子でヴィヴィオから体を放すように離れていた。ヴィヴィオの顔が紅色に染まっている理由は勿論理解できないまま。

まるで主役とヒロインのワンシーンを見せ付けられたグルドは更に怒りを溜め込む結果となってしまう、自分は眼中にない——そんな不愉快な構図が眼前で描かれているのだ。

「て、てめえらしい加減にしろーっ!!」

「うるさいな…そんな大声出さなくても聞こえてるよ。」

アインハルトとヴィヴィオへの不意打ちを行った犯人に鋭い目付きを向けるトランクス、その視線には相手を威圧する敵意が込められている。

「トランクスくん、あいつが敵だよ!さっき見たのと同じ格好してるもん。」

ジースとバータが着ていた衣装、それは戦闘服。まったく同じ物をグルドは試着していた。

とはいえ体の形状はともジースとバータには似つかない、非常に小柄で全身は緑色という地球外生命体と思わせるような外見なのだ。

「だろうな。よし、一気に終わらせるぞ！」

「オッケー！」

「ナメやがって…串刺しにしてやるーっ！！」

再び念力によってグルドの視界に入る木を地面から引き抜けば真つ二つに引き千切ってしまう、強引な力で二つに千切れた木は刺々しい傷跡部分を二人に向ける。

武器として活用された木は超高速という速度に乘せられて飛来していく、飛来する通路周辺に風圧を撒き散らしながら目標地点へと放つ――！

「なにっ！？」

二つの凶器は避けられる事はなかった、だが命中する事もない。その不可思議な光景を目の当たりにしたグルドは驚きの声を上げる。無理もない、目の前には確かにトランクスと悟天の姿があるにも関わらず攻撃は素通りされたのだ。それは残像のように、実物が存在してないような光景。

「こつちだよー。」

「があ…っ！」

幼い声がグルドの背後から飛来すると同時に彼の背後に強烈な衝撃が走る、それはグルドの予想を遥かに上回った計算外の足蹴りだった。

悟天とトランクス of 行動、攻撃、全ての戦闘力はグルドの想像外だ。悟天に蹴り飛ばされた事実を飲み込めずにいるグルドは上空をロケットのように突き抜けていく、その先には――。

「これって、もしかして……。」

「連携プレーですね… ヴィヴィオさん、私達もやりましょう。」

「はい…！ …… クリス…！」

グルドの前方にはトランクスが待ち構えていた、この機会を狙っていたかのようにトランクス of 拳は固く握り締められ今にも攻撃を放つ体制でいる。

――そしてヴィヴィオとアインハルトは二人の行う行動の意図を読み取った様子で、ヴィヴィオは兎のぬいぐるみを握り締めた。

「でりゃあっ…！」

「うおっ！」

瞬間的に拳は突き出され、グルドの体へと手加減なしの威力が叩き込まれる。やがてグルドは衝撃に操られヴィヴィオとアインハルトの方角へ。

「ヴィヴィオちゃん！」

「アインハルトちゃん！」

「やあああっ！！」

「はあああっ！」

グルドが自身の状況を認識する間もなく、ようやく目を見開いて捉えた先には二つの拳と碧緑の髪を持つ女性と金色の髪を持つ女性。それはヴィヴィオとアインハルトの大人の姿であり戦闘体制を示す姿でもあった。グルドの眼前には突き出された二つの拳。

「ぐおおおおお…っ！！」

グルドの顔面へと叩き込まれ、絶叫と共に地面を抉り取りながら叩きつけられてしまう。四人のコンビネーションによって決して隙を

与えない攻撃が決まり、ヴィヴィオとアインハルトは互いに嬉しそうな笑みを向けていた。

「こいつ意外と弱かったな。オレ達、半分くらいの力しか出せないのに……。」

「もう大丈夫だよー!!」

(…あたしがどうやっても倒せなかった奴を、たったあれだけで倒せた……?)

あっけなく倒れてしまったグルドを見下ろすような視線を向けるトランクス、背後では満面の笑顔を浮かべて声を掛ける悟天の姿。だがそんなありえない状況下、口出す事はなく静観し続けた人物が一人——先程からグルドの超能力によって身動きを取れずにいた少女は始めて口を開いたのだ。

「……なんで、ヴィヴィオが此処にいんだよ。」

「あ、ヴィータさん……! その、色々あつて……それよりヴィータさん大丈夫ですか?」

「お怪我はありませんか……?」

信じられないとばかりに瞳が揺らぐ赤髪の少女はヴィヴィオよりも幼く、アインハルトよりも下に見える。だが彼女、ヴィータが放つ

威圧感や風格はヴィヴィオ達の比ではない。

ヴィータは先程の光景をもう一度回想していた。グルドが瞬きする間に倒されていく光景はヴィータにとって信じがたい光景なのだ。

「…擦り傷だけだから心配すんな、んでそっちは……？」

「アインハルト…アインハルト・ストラトスと申します。」

「ボクは孫悟天だよ！」

「オレはトランクスだ！」

何処か荒々しく男のような口調でヴィータは言う、ほぼ無表情に近いアインハルトや元気な印象を与える無邪気な笑顔を振り撒く悟天とトランクスは名前を名乗っていく。

疑問が積もるヴィータはアインハルトやヴィヴィオから様々な説明を耳にしてもらう事となる。同時にヴィータは驚いた表情を見せながら時は一刻に過ぎ去っていく。

——だが五人の視界にあるべき物がないことに気付く、それは極々単純で先程から目にしていた物だ。それは突然にして消えていた。グルド、彼の姿が何故か周辺に存在していない。彼は完全に息の根が止まった訳ではない、先程の四人の攻撃によって気を失っているだけである。だがグルドはそこには存在していなかったのだった。

暗闇だけが広がる視界に薄暗くぼんやりと入り込む風景と、見慣れた女性の顔。全てを包み込むような優しい青い眼と柔らかな茶色い髪を持つ彼女が、フェイトの視界に入り込んだ。

そして脳が覚醒すると同時にフラッシュバックを引き起こした。鮮明に描き出される青色の肌を持つ男との戦闘、「真・ソニックフォーム」、「行こうバルディッシュ」、そして「ギニュー特戦隊」――。

「っ……！　なのは……！！」

「ふえ、フェイトちゃん……？　大丈夫……かな？」

「フェイトさん……よかったです。」

フェイトは此処に至るまでの記憶を一瞬にして全てを呼び覚ましていた、ギニュー特戦隊と名乗る謎の男達との戦闘によって惨めに敗北するまでの出来事を。

だがそれをかき消し包み込むような、なのはの穏やかな微笑とシャッハの安心した溜め息を目にしていれば自然と心は晴れていくような感覚を覚えていた。

「二人とも、ありがとう……私は大丈夫。ところであれからどうなったの？」

気が付けばフェイトの服装は真・ソニックフォーム時の衣装から変異している、先程までフェイトが思い出した敗北の過程が彼女のモードを解除させた原因だろう。

そして彼女の中で最も疑問視するべき内容を二人にぶつけた所、シヤツハとなのはは困り果てた視線を互いに向けて口を閉ざす。

「そ、それが……。」

「どう言えばいいのかわからないけど……。」

なのはとシヤツハは困り果てた視線を遠方へと向けた、その行動を理解する事ができないフェイトは怪訝な表情と共に彼女達と同様の行為を行う。

だがフェイトの中に飛び込んだ光景はとても理解しがたく現実離れた構図だ……一人の青年と向かい合わせに佇む二人の男——その一人は自身を敗北させた人物。

「……ちょっと言いづらいけど、わたし達じゃ力不足だからあの人に任せてるって感じたよ。」

「え……そんな、無謀だよなのは……!」

「でもわたし達三人で力を合わせるより……ずっとそれ以上に強いと思う。」

その話自体が信じがたい物である、この日の為にと必死に日々訓練してきた人間達が足を引いて無名の人物に任せるという出鱈目な現象が発生していた。でたらめ

出鱈目な現象を体現する一人の青年をフェイトは目を凝らしてその姿を鮮明に目視する。黒髪の青年は桁外れな風格や威圧感が異常な程に備わっているように彼女は感じた。

だがそれでも内心の「無謀過ぎる」という感情は捨てきれない、事の経緯を見守るようにフェイトやなのは、シャツハは静観し続けるのであった。

「な、なんだ…急にあのヤロウの雰囲気が変わりやがった……。」

「へっ！それなりのパワーアップをしたみてえだが、オレ達が相手では運が悪かったな！」

黒髪の青年、悟飯は一切表情を変化させず冷静すぎる態度を崩す事はなく、生死を左右する戦場内でも一切の揺らぎは見せない。それが恐ろしい威圧感となって降り注いでいる。

しかしバータは虚仮威こけおどしと言わんばかりに彼へと突っ込んでいく、前進していく！だが反してジースは目を見開いて声を大にして言う。

「————待てバータ——！」

「くたばれーっ!!」

激声と共に拳が悟飯の顔面目掛けて突き出された、それは数秒もない出来事だがバータの拳は空振りで終わってしまう。

「なっ!?　　ば、バカな! オレは確かにヤツに攻撃をしたはずだ。」

バータ自身でさえ視界に収まらない速度を悟飯は持っている、身震いを覚えさせる光景にバータは額から冷や汗を流し途方もない程の「恐怖」と「畏怖」と「絶望」が襲い掛かっていた。

「どうした?　オレは一步も動いてないぞ。」

「う…うおおおっ!!!!」

がむしゃらに、力任せに、撃つ、撃つ撃つ撃つ! 当たるまで滅茶苦茶に拳で殴り続けるバータ…数撃てば当たるという言葉通りに悟飯へと向け続けていく。

だがそれでも当たらない、全ての攻撃は全て避けられ一つも当たる事はなく避けられ続けている。それは悪夢のような光景だ。

「…す、すごいですねなのはさん……。」

「どうやって避けているのかわからない…一体何が……。」

「……多分、バータって人はあの人に当てる気がないんだと思う。」

なのはの言葉にシャツハとフェイトは目を点にさせて彼女の方へ視線を向ける、意味がわからない。

バータは悟飯を目掛けて殴り続けている、それが一つも当たらず無限ループしているだけに過ぎない光景はバータが悟飯を狙っていないからだと言う。

「あの人の威圧感で、バータって人は無意識に避けようとしてるよ
うな……。」

「そんな、馬鹿な……信じられません。」

「……………」

もはや勝負は決着が付いたのだろうか？バータの根本的な何かは既に「敗北」している。

だが三人の視界には悟飯が動いたような動作は感じられない、それは単純に目視出来ないほどの速度かもしれないが彼女達の目には悟飯の僅かな動作さえも入ってこない。

「く、くそ！全然あたらねえ……。」

「バータ！二人でコンビネーション攻撃だ。地獄で編み出したオレ達の新技でヤツを仕留める……！」

「あ……ああ、わかった。」

なのはの言葉は真実性を物語るようにバータの攻撃は一切当たる事はなかった。代わりに足の震えや額に異常なほどの冷や汗を流しながら。

痺れを切らした様子でジースは叫ぶ、そしてバータはジースの隣まで戻れば彼等は構えを取り始める。同時に発生したの青色の光と赤色の光。

二つの光はまるで燃え盛るの炎のように揺らめき、地響きと共にジースとバータはく空中を飛来する！

「『パープルコメットクラッシュ……！』」

青色の光と赤色の光は混ざり合い一筋の紫色の光と化す、炎のように不気味に襲い掛かる紫色の炎は周辺を一方的な暴力によって掻き

走っていく。

地面は抉り出され突拍子に衝撃破が荒れ狂い抉れた道筋を作り上げて標的である悟飯へと突進する。

「ふははは！貴様にこの攻撃が防げるか！！」

「粉々に吹き飛べーっ！！！！」

強烈な威力を秘めた二人の合体技は並大抵の防御力では歯が立たないだろう、もはやなのは達は手も足も出ず悟飯を見守るしかないのだ。

「きゃ…っ！」

「ふえ、フェイトちゃん大丈夫…！？」

「フェイトさん、なのはさん…！ 此処にいるのは危険です、もう少し離れた方が——ッ！？」

突如、襲い掛かる強風に身を崩しそうになるフェイト。なのはが支えた事によって崩す事はなかったものの、今にも吹き飛ばされるとばかりに地面へと足跡を刻み込む。

誰もが止められる筈もない、絶対的な破壊力が込められた刹那の一撃に恐怖を抱いたシャッハは逃げるように施すが…彼女が見た先にはその一撃は消えていた。

「——かあっ!!」

広がるのは何事もなかったかのように広がる瓦礫の山、いや先程の合体技による傷跡は確かに残されている。

だが悟飯の一声によって全てが無くなっていた。瞬間的に大気が震え暴風が渦を巻くように発生したが直後、紫色の光は風景に溶け短い悲鳴を奏でたのだ。

「うおっ……!!」

「な、何が起きたんだ……や、ヤツがいねえ!？」

バータとジースは悟飯に接触する事はなく遙か後方まで吹き飛ばされていた、更に二人の眼前にいた筈の悟飯は姿を消している。

咄嗟の事態に目標も捉えられない二人は周辺を見渡す。だがそれでも悟飯は何処にもいない、気配を察知するという行動もできず二人は動揺を露にしていた。

「う……後ろだバータ!」

背後の方へと振り向くバータ、その先には先程から探していた人物が不敵な笑みを浮かべて佇んでいたのだ。

そこには一切余裕が崩れていない不敵な笑みを浮かべた悟飯はバータを精神的に墜落させていく。

「ウスノロ…。」

「ウスノロ…宇宙一のスピードを誇るオレ様がウスノロだと!!」

それはバータが最も長所としていた部分であり、一つの誇りとして受け取っていた部分。だが悟飯は不敵な笑みと共にそれを汚した。

「ノロマの方がよかったか？」

挑発的な言葉を何度も投げかける、全ての言葉はバータの感情を剥き出しにさせるには充分すぎる。

その姿は戦闘が起きるまでの穏やかな青年と比較すれば今の青年、悟飯は何処か好戦的で酷く冷静なのだ。

なのはやフェイト、シャッハはその姿を見て戸惑いを覚えていた。先程までの青年の人格については勿論、バータとジースの合体技を簡単に打ち破って見せた彼の力に。

「…こんなこと、ありえませんか……!!」

苦々しく吐き捨てるように言い放つシャツハに少なからず共感を覚える二人。だがなのはだけは、力よりも悟飯の性格の変化に対して気に掛けているのであった。

一向に動く気配を見せないバータとジース、いくら悟飯の挑発を浴びせられても彼の力の強さだけは頭から離れない。圧倒的な実力と精神力、どれを取っても彼等の比ではない。

よって生々しい感情だけが露になる。負け犬の遠吠えとも呼ぶべき二人の言葉だが――。

「ヤツの実力は本物だ…ちくしょう！ あの石のパワーを得られれば貴様なんかっ！！」

「あの石？ 何を言っている…。」

聞き捨てならない言葉を唐突に口にする二人、もはや崖に立たされているような状況なのだ。

「とぼけるな！ 望むだけで究極のパワーが手に入る石に決まっているだろ。今頃、隊長が奪いに向かっている！阻止しにきたつもりだろうが残念だったな。」

「それをフリーザ様が手にすれば再び宇宙の帝王へと君臨する……そして、そのおこぼれをオレ達に分け与えてくださるのだ。」

——この場にフリーザが居る、だがそれはある意味では予想の範疇なのだ。この場に悟飯やベジータ達が姿を現した時点でそれらしき人物には検討が付いている。

だがフリーザ一味を知る者にとっては不可思議な現象なのだ、彼等は既に死んだ存在。それが今になって、異世界で彼等に出会うなんて誰も予想はしなかっただろう。

照りつける夕日の光を吸収する悟飯の黒髪と瞳。だがその奥はフリーザの存在によって僅かに感情が揺れている。

（…なるほど、これで此処が襲撃された理由はわかった。そうすると、やはりあの邪悪な気の正体はフリーザ達か。だが、どうやってこの世界に……。）

「くっ…てめえの相手は後回しだ！まずはオレ達のポーズをバカにしたこいつ等からぶっ殺してやるぜ！！」

瞬間、シャッハやなのは、フェイトは身の危険を感じて一気に張り詰めた表情へと追い込まれてしまう。本格的な殺気を浴びせられ恐怖を心底感じ取った瞬間——。

（たすけて、悟飯くん……………。）

それは誰にも聞こえない、彼女の心の叫び。なのは決してそれは誰にも届く事はなく耳にする事もなく消えていく儚い願いだが……。

「——貴様等の相手はオレだと言ったはずだ。」

オレンジ色に塗りつぶされた瓦礫の山で、冷たい声が異常な精神的威圧を浴びせた。
その声を聞くだけで呆気にとられてしまい全身が金縛りに合うような恐ろしい錯覚を覚えてしまうのだ。

「ぐえっ！？」

「バータ…！？」

その錯覚を覚えていられるのは一瞬だけである、それらの感覚を吹き飛ばすような激痛がバータを襲う。彼の背後には肘打ちをする悟飯の姿。

抵抗する間もなく意識は朦朧とする、朧な視界内は必然的に強制遮断され暗闇だけが広がる。

「だあっ！！」

「がああ…あ。」

同時に悟飯はジースの背後を取り手刀で首筋へと打つ、その動作は数秒という時間を必要としていない。その速度にジースやバータでさえも気付く事すら叶わないのだ。

あまりにも圧倒的な戦力差、現実離れた戦場に呆然と見守り続けていた三人は勝敗が決着しても口を開く事はなくただその戦場を見据えている。

もはやベクトルが明後日の方角に疾走しているような、言葉にしづらい複雑な心境を持つだけであった。

「……悟飯くんが、勝った…？」

「い、一体彼は何を……？」

「突然、二人が倒れたように見えるけど……。」

目に見える範囲に限定するなら、突然ジースとバータが倒れたのだ。戦況を理解する為には脳の処理と現状を目視する事が必要だが彼女達は「現状を目視できなかった」。

だからこそ彼女達は突然二人が地面に倒れ付したように見える。そしてジースの背後に立ち尽くす悟飯の姿だけ。悟飯が何を行ったのか、ジースとバータが何故倒れたのか、その原因が理解出来ない。

「もう大丈夫ですよ。」

地面に倒れた二人は動く気配も感じられない、だが命が絶たれた訳でもない。他の魔導師達と同様に気を失っているだけなのだ。そのまま彼等は静かに消えていく。
突然二人が消えた事に対して疑問を感じるが、脅威は去ったのである。達は達に微笑を浮かべる。その姿に思わずなのはは無意識に安静の笑みを露にしていたのだった。

「いい加減石の在り処を教えろ！」

「……絶対に教えられません。」

瓦礫の山が作り上げられる中である一つの建物だけは半壊状態で済んでいた。というのもこの建物はギニュー達にとって貴重な存在だからだ。

彼等が襲撃した理由は全て此処にある。目当ての品物を問いただすギニューだが一向に話は進められずにいた。

(……今は向こうが話し合いやからええけど、戦えばこっちが負け

る。どうしたらええんやろ……………」

勝算が無い。はやての思考は確信が存在していた、魔道師達が一方的に倒れ付していくという要素は勿論だが目の前の男は彼女が今まで敵にしてきた中で一番に厄介だ。

反応を示さないのはとフェイトは絶望的な状況である事が予測できた。外部からの激しい爆音や轟音はそれを物語っているのだ、「絶体絶命」——何度も経験してきたそれが今、目の前に広がっている。

「そうか…なら、特別サービスだ。今教えるならこのミルクキャラクターを3個やろう。」

「……………は、はあ……………」

(……………はやくイクスの所に行かないとあかんのやけど……………。)

ベッドで眠り続けるイクス。何を口にすればいいのかわからず、戸惑うカリム。周辺に倒れているのは護衛役であるナンバーズの二人、殆ど勝ち目が無い。

はやては思考し続ける。この絶体絶命の現在を突破する逆転策を。とにかくこの場を突破できる何かが存在していれば、彼女の険しい表情は崩れる事がなかった。

「…なんで石が必要なんや……………?」

はやての藍色に輝く瞳はギニューを見据える。襲撃犯は何らかの目標を持つ事はわかりきっていた事だが、聖王教会の襲撃はその目標へのステップでしかないようにはやては感じていた。

「その石は強い力を放っている。つまりそれをフリーザ様が入れば究極のパワーをもった宇宙最強の帝王になれるのだ。」

「それは危険です！この石は、そう簡単に扱えるような物ではありません……！」

突然カリムは感情を露にして声を張り上げる、その言葉は決してこの場を打開する為の脅迫等ではない。真実味のある言葉。
だがギニューは声を張り上げて警告するカリムに動揺することもなく言う。

「ふん、そんな言葉を聞いて怖気づくとも思ったか？早く渡さなければ……。」

「——ギニューさん。まだアレは手に入らないのですか？」

唐突にその場に不釣り合いな足音が響く、その足音を耳にしたギニューは顔色を一変させた。
カリムもはやてもまた、何か不釣り合いな物が此处にいることを直感的に捉えており、二人は胸騒ぎを感じながら新たに姿を見せた”悪

魔”を目にする……。

とても人間だと形容しづらい真っ白な生物が其処に、はやてとカリ
ムの目の前に現れた直後に……二人の動物的本能がひたすら警告を告
げていたのだった。

第13話 悟飯の究極パワー炸裂！そして迫る宇宙の帝王（後書き）

ブルマ「ヤッホー！ブルマよ。遂にフリーザが現れたわね。相変わらず悪い事を企んでるみたいだけど…」

フリーザ「くつくつく、石を渡さなければこの星の皆さんが死ぬことになりますよ。」

ギニュー「これでフリーザ様が宇宙に…！！」

はやて「あ…悪魔や……。」

カリム「アレが邪悪な者の手に渡ればこの世界は……！」

悟飯「大丈夫です！絶対にお父さんがなんとかしてくれますから。」

なのは「次回ドラゴンボールVivid『野望を阻止せよ！伝説の超戦士、孫悟空！…』」

悟空「フリーザ！おめえのスキにはさせねえぞ！！」

季節ネタ

悟天「夏だーっ！！」

ヴィヴィオ「プールだ！」

トランクス「向こうまで競争するぞ〜！〜！」

アインハルト「負けません…。」

（数分後）

子供組「わあっ！？ 目が真っ赤！」

なのは「そんな時はこれ。ロト子供ソフト！」

悟飯「目に染みないから子供でも安心して使えるんだ。」

フェイト「泳いだ後は忘れずに。」

♪ロト子供ソフト

子供組「ドラヴィヴィケースに入れてね！」

第14話 野望を阻止せよ！ 伝説の超戦士、孫悟空！！

「フリーザ様！？も、申し訳ございません…。」

「フリーザ、やって…？。」

表面上は冷静に振舞いながら、白い生き生き物に対して彼女は確実に焦りを感じていた。

フリーザの視線には生々しい殺意を感じるのだ。言葉に言い表せない独特な威圧感に対して二人は息を飲んでいれば案の定……。

「どうやら、此処にはガンコな方が多いようですね。それでは、あなた方には死んでいただきましょうか。」

「……はやて…。」

「っ……。」

抗えない死が眼前にある、最悪自身が死んでも彼等が求める石の在り処はわからないだろう、彼等を倒すのには時間が必要だが。

もはや二人は死を決意していた。目の前の死を、受け入れるべき死を。なのはやフェイト…ヴィヴィオの事を思い出しながら。

「し、しかし殺してしまったら石の在り処が…。」

「その心配には及びません。恐らく石はこの中の誰かが持っているはずです。辺りから強い力を感じますからね…。それに、石さえ手に入ればこの惑星ごと消し飛ばす予定でしたので。」

「なんてことを……!!」

惑星ごと消し飛ばす、そんな無茶苦茶な事を成し遂げられる実力を彼等は持っている。そして冷酷にもフリーザは言葉を紡ぐ。

「ほっほっほ。大人しく石を渡してくださいのなら寿命がほんの少しだけ伸びますよ。3秒だけ待ってさしあげましょう、ギニューさん、カウントをお願いします。」

「わかりました。いーいーち!」

未練は残るが、それでも生き残る術が思いつかない。こちらが死を覚悟でなのは達が倒せるようにフリーザとギニューに傷跡を付けるか?

いや、だがこの二人はそれさえも許してくれないだろう。カリムとはやてに残された2秒間で成し遂げるには不可能だ。

「2秒」、ギニューは言葉を投げる、それでも彼女達は決して石の事は口にしない。

「さーいーん!」

「死になさい。」

死の宣告と共に指先を彼女達へと向ければ煌びやかな光が収束する、尋常ではない殺意が発すその威圧感ギニューでさえも恐怖を覚えさせる光景だった。

それを間近で浴びせられているはやとカリムはほんの数秒の出来事が途方もなく長く感じている。二人の心臓の鼓動は大きく、自身の死が嫌というほど目の前に存在しているのだと実感させられるのだが――。

「消えた！」

「なにっ!？」

あまりにも突発的な展開にフリーザは目を見開く、眼前に居た二人の女性が突然消えた。まるで瞬間移動でもしたかのように、風を切るような音と共に二人は其処にいない。

慌ててギニューは周辺を見回した先に見据えたのは黒髪の男。本来なら其処に居るといふ事がイレギュラーであり、緊急事態というレベルを超えた危機なのだ。

「ふうっ、危機一髪つてところか。」

「きつ!貴様はっ!？」

それぞれの腕で抱えられているはやてとカリムは自身の状態に啞然としてしまう、何時の間にか彼女達は悟空に抱えられていた。その状況はあまりにも唐突過ぎて思考が一瞬フリーズしてしまう。更に首元には幼い手があった、彼女達はそれを見上げるような視線を送った先には眠り続けるイクスの姿。その穏やかな寝顔に思わず安心感を覚えるからこそ二人の頬は緩くなっていた。

「イクス様……！？」

「失礼ですが、貴方は……？」

男の首元に華奢な白い腕を目にしてカリムは瞳を見開く、その先には眠り続けるイクスが居たのだ。あまりにも唐突に差し伸べられた救いの手に二人は冷静を装いながら困惑を感じつつあった。

「オラか？ オラは悟空、孫悟空だ。」

「じ、悟空………？」

「何故イクス様を……。」

「こいつイクスって言うんだな。たまたま入った部屋が炎に包まれてて寝てたこいつを起こそうとしたんだけど全然起きなくてよ、仕方ねえから連れてきたんだ。」

彼女達からすれば疑問を抱かざるをえない程の奇妙な話である、だ

からこそはやては口を開いた。

「一体、何処から入ってきたんですか？」

恐らくフリーザ達も彼の存在を知る事はできなかっただろう、ギニュー達も啞然とした表情を浮かべてこちらに視線を向けている。はやての質問に彼はキョトン、とした顔を浮かべた。その表情は質問の意図を理解していないように見え、どう返答しようかと彼は思考しているようにも見えるのだ。

「何処つて…上からだ。」

「う、上……？」

ぴん、と悟空は人差し指を突き立てて天井の方を指差す。しかし今度ははやての方がキョトン、とした顔を浮かべることになってしまふ。その心境はカリムも同様に、悟空の言う事が理解できずにいた。何故なら上から来れるはずがないのだ、上には当然のように天井。決して誰かが破壊して穴が空いているわけではなく、ごく普通に当たり前のように天井が存在している。其処からどのような手段を持ちえて上から移動するのだろうか。

「な、なぜ貴様がここに……。」

「よう、フリーザ。また悪さしてるみてえだな。」

「どうやって中に入ってきたんだ！外は他の隊員たちが見張りをしていた筈だ……！！」

「どうやってって、普通に入ってきたただぞ。邪悪な気がバラバラだったからここまで来るのに時間かかったけどな。」

「普通に……？」

先程から噛み合わない話にフリーザは苛立ちを募らせている様子だった。明らかにフリーザはこの男が出現してから様子が可笑しい、丁寧で冷静沈着な印象を受けたはやてとカリムはそんな彼のギャップに戸惑いを覚えている。

今のフリーザとギニューは焦っている事が明白であり、各事件を解決してきたはやての勘が告げているのだ、確実にこの男を目の前にしてから様子が一変していた。口調が変化したのもその一つだろう。

「ん？ ……ああーっ！おめえギニューじゃねえか！！ ははっ、カエルから元に戻ったんだな。」

「…今頃気づいたか。そうだ、オレこそが貴様等によって無様な力エルにされるも、地獄から蘇ったギニュー特戦隊の隊長、ギニューだ！！」

「あの…そろそろ下ろしてくれませんか？」

「ああ、わりいわりい。」

「……………」

決して調子が崩れない悟空に対して思い出したかのように言うはやて、あまりにも唐突な展開で今自分達がどういった体制なのか、ようやく頭に入ってきた様子で呆れを含んだ苦笑を浮かべて言う。ポーズを取って名乗ったのに相手にされず複雑な心境を表すようにギニューは言葉を失っていた。数秒後、はやてとカリムは地面に着地している最中でイクスは安らかに悟空の背中の上で眠り続けている。

「っと、ありがとうございます。」

「…イクス様を助けてもらい、ありがとうございます。」

「フリーザ様。どうやら、残ってるのは我々だけのようです。他の隊員たちも一緒に呼び出された死者達も反応がありません。」

「おのれサイヤ人め……！」

「どうやって生き返ったかは知らねえけど、また閻魔のおっちゃんのとこに戻ってもらうぞ！」

「フリーザ様！今の我々では勝ち目はないかと。ここは一旦退却を……。」

悟空は睨みを利かせた視線を二人へとぶつける、悔しまみれにフリーザは歯をギリギリと噛み締めて怒りを膨らませながら悟空をその

独特な眼光を向けていた。

だが現状はギニューの言う通り。彼等には勝ち目がなく、その僅かな勝機さえもない。悟空が此処に現れた時点で既に勝敗は決まっているのだ。

「うるさいっ！宇宙の帝王であるこのオレがたかがサル如きに逃げるだど？ ふざけるな……！！」

「きゃ……！？」

怒声を浴びせると同時にフリーザを取り巻いていた気は突如轟音を響かせて大地は震える、聖王教会に瓦礫が入り込み天井に罅が刻まれていく。

その光景は悪夢としか言いようがない、悲鳴を上げたはやてとカリムは立つ事も間々ならず体制を崩して地面に這い蹲る。それでも尚、取り乱す事はなく冷静に装う悟空はただフリーザを見据えるだけだ。

やがて天井が崩れ落ちると同時、はやて達の仕業によって隠されていた蒼色の宝石が天井と共に宙を舞う。

「ロストログアが………！！」

「バレてもうた……！！」

「——それはオレのものだ……っ……！！」

「させません……！！」

突如顔を出すのは小さな少女、いや小柄過ぎるその少女は身長が低い等とお世辞で言えるレベルではない。だからこそ悟空はその少女を見て驚いた表情を浮かべていた。

丁度両手で掴めるほどの、まるで小人のような彼女は勇敢にも空中を落下するロストログアに向かって浮遊する。同時に伸ばされたフリーザの手に収束する殺意を含んだ煌びやかな光。

「危ねえっ！！」

「えっ……！」

手の甲から発射された光弾にリインフォースが命中する直前、悟空はリインフォースを掴むと同時にもう一つの片手によってパン！と甲高い音を撒き散らして光弾を弾き返してしまう。

勢いは止まる事なく光弾は後方の窓ガラスを突き破って遙か上空へと虚しく飛来する。だがそれらの一連がはやてを始めたリインフォース、カリムにはまったく視界に入らない、故に今何が起こったのか理解できずに居た。

だがフリーザの突き出された手から予想するに攻撃の類、それを理解したリインフォースは悟空へと顔を向ける。

「あ、ありがとうございます……。」

「おめえ、ちっこいのにムチャすんな。危ねえからオラン中に隠

れとけ。」

「えっ、えっとまってくださ…ひゃあ！」

掴んだ彼女に拒否する暇も与えずそのまま懐へと仕舞うと同時に堪えるような笑い声が響いて全員の視線はフリーザへと向けられ、当の本人は握り締めた宝石を目にして笑みを浮かべていた。

「くつくつく、ついに手に入れたぞ。これでオレは宇宙最強だ…！」

「やりましたね、フリーザ様。お祝いに喜びのダンスを踊りましょう！」

「……………」

悪どい笑みを浮かべるフリーザの傍でバレエのようなダンスを踊るギニュー。そんなギニューに対して何処か呆れを含むように呆然とした表情を見せるはやとカリムにとっては彼等の事は理解できずにいる。

「あの石から強え力を感じるぞ……………」

「あれはロストロギアと言って、使い方次第で次元を消滅させるほど危険な力を秘めた石なんです……！」

「この力を手に入れたからにはオレを呼び出したあの下等生物共と手を組む必要もない……後でじっくりと痛ぶって殺してやるう。」

掴み取った宝石はフリーザの手の中へと溶け込まれ、全身へとその力が吸収された途端——突然変異でも起こったかのようにフリーザの気は膨れ上がっていく。

その異変に誰よりも先に気付いたのは悟空だった、眉がぴくりと動かし目を目開いてフリーザを見据える。

「とてつもない気だ……まだ増え続けている。」

「……悔しいけど、もう私達の力じゃどうにもならへん……！」

「きゃああつ……！」

フリーザの体内に存在する気は外へと溢れ出す、紫色の炎が凄まじい凶器となつて地響きを引き起こし聖王教会を完全崩壊させてしまふ、当然のように天井は落下し教会を形成していた柱や窓ガラスなどの部品は雨のように降り注ぐ。

その光景を目にした悟空は落下する寸前にはやてやカリム、イクスや聖王教会に残る者全てを一気に抱えて強引に上空を突破する。その脅威的な速度は数秒という次元ではない。

「うおおおおおお…っ！！！」

「ぐあああっ！！！」

更に倍増する気は周辺に向けて衝撃破を激しく撒き散らし、未だにその惨事に気付かず踊り続けるギニューを遥か彼方へと軽々と吹き飛ばしてしまう。

やがて上空へと上り詰める悟空が見下ろして視界に入り込んだのは超絶的な大爆発。瓦礫の山を全て消滅させてフリーザは途方も無い殺意を剥き出しにしていた。

「やべえな…早くなんとかしねえとこの星のみんなが殺されちまう。」

「そんなこと……！」

「…どないしたらええんやろう、ロストログアを取り込まれたらもう策はないで……。」

「なのはさん……フェイトさん……。」

決して口に出したくなかった諦観の言葉、はやての拳は力強く握り締められており悔しさに震えている。其処に恐怖が入り込んでいるのかどうかは誰が見てもわからないだろう。

その心境に近いカリムもまた大爆発を引き起こした張本人へと視線を向け、悟空の懐から顔を出すリインフォースはただ自身の仲間を思い浮かべ殺されるという悪夢が一瞬脳裏を掠めて振り払うように

首を振るう。

——このまま放置する訳にもいかない。ただ一人、悟空だけが冷静な態度を崩す事は無く純黒の瞳に悪魔を映し出していた。

「なんてパワーや……あかん、やっぱり放っておく事なんてできへん。」

「…そうですね、はやて。」

悟空達は聖王教会周辺に存在する森へと飛行し、地面に降下すると抱え込んでいたはやて達を解放させる。

「おめえ達、ここは危険だから安全なところに……。」

「後ろから来ます！」

カリムの警告に思わず悟空は振り返って背後に迫る正体を見据えようとしたり直後、顔面に拳が埋まった。それだけで悟空は呆気なく吹き飛ばされ、悟空が吹き飛ばす衝撃によって大量の木を破壊し尽くし地面に酷い傷跡を刻み込んでいく。

「がああっ!!」

だがフリーザの攻撃は終わる事なく、更に悟空の背後を奪い取って上空に向けた蹴りを背中へと叩き込む。悲痛な叫びと共に悟空は再び悪戯な腕力によって宙を舞う。

「くたばれええええ!!」

「うわあああつ！！」

「きゃあああああ！！！！」

「ラインが……！」

今起きている現象を明確に把握する事も間々ならないはやて達にとつて、突然木が破壊され地面が無残に決り取られるという超常現象を目の当たりにしているような物だろう。

それでもその現象の原因ぐらいは予想が付く、異常なエネルギーの塊は衝撃破となつて周辺を暴風の如く巻き取らしている。そして最後に悟空の懷に隠れ続けるリインフォースに気付いて彼女は杖を握り締めた。

本来ならばやて達同様に降ろされる筈だったリインフォースはフリーザの予期せぬ攻撃によってできなくなってしまうている。やがて数秒後…はやての足元に煌びやかな光と共に魔方阵が出現した。

「少しでも、あの人の援護になつたらええんやけど……！」

「はやて、危険です！こちらに攻撃されるかもしれません……。」

「せやけど、このまま何もしなかったらもつと危険や！」

はやての言葉に押し黙ったカリムを差し置いて、はやては分厚い書物を開き魔法の言葉を復唱する。

「——灰白き雪の王、銀の翼以て、眼下の大地を白銀に染めよ。
来よ…氷結の息吹！」

上空に圧縮された気化氷結魔法…即ち複数の立方体が形成され、その力は増してく。彼女自身に存在する膨大な魔力が立方体に蓄積されるように発光体は照らし出す…。

「A t e m d e s アーテム・デス・アイセス E i s s e s ……！！」

はやてが主に扱う魔法は広域攻撃魔法、文字通り広範囲に渡って攻撃が可能な魔法の事である。ある程度の詠唱も必要だが発動させれば一気に敵を大量殲滅する事が可能だ。
特に彼女が使用する魔法は桁外れであり、その圧倒的な魔力と攻撃

性能は管理局内でも高い評価を得ている。その強大さは彼女自身も扱い切れない面が強い。

「はーはっはっは！あっけなかったな。それともオレが強くなりすぎてしまったか。」

彼女の発声が合図となり複数の立方体が高速飛来しフリーザの周辺へと着弾していく、派手な爆発音が支配する中で保たれていた熱が一気に消滅して極寒の地を作り上げる。

地面は蒼白色に塗り替えられ樹木は凍り付き、異常現象を体現させた環境はフリーザをも容赦なく氷結させようと絶対零度の牙が向く――
悟空を注視して高笑いしているフリーザは動作を引き起こす事が遅れ、彼の体温が急激に低下し蒼白の塊と化してしまう。

「凍った……やりましたね、はやて！」

「……………っ!？」

蒼白の塊を見据えるはやては眉を顰めて張り詰めた表情を崩す事はなかった、そして数秒後…突然亀裂が氷を刻み込み耳障りな程の甲高い音を奏でてそれは木っ端微塵に砕け散ってしまう。

そしてその中身は邪悪なバイオレット色の炎をオーラのように身に纏うフリーザの姿があり、激しい電撃をその身で奏でながら不敵な笑みを露にはやて達の方角へと視線を向けていた。

「ふっふっふ、その程度の攻撃でこのフリーザを倒せるとも思っ
たか。」

「っ……ちょっとだけでも傷、つけられると思ったんやけどな……。」

「はやての攻撃が、通用しない……!?!」

氷点下の地上、手加減無しの一撃をフリーザに叩き込んだにも関わらずの本人は無傷。ただその攻撃は苛立ちを募らせるだけでまったく無意味に等しい。

やがてフリーザの片手をはやての方角へと突き出す、その動作が攻撃を予想させるのは容易ではやては杖を構えて戦闘体制を見せるが……。

「鬱陶しいハエ共だ…そんなに死にたければすぐに殺してやる!」

「なっ、体が……うごかへん……!?!」

「はやて!?!」

フリーザはただはやてに片手を突き出した、たったそれだけの動作に過ぎない。何か攻撃を仕掛けた訳でもないのに関わらずはやては身動きを取る事ができずにいる。

「っくっ、っ……!?!」

悲痛な声を漏らして顔を顰めてはフリーザを見据えるが全く意味は成さない、身体が浮遊しとてつもない激痛が彼女の体を蝕んでいた。攻撃の正体が掴めない奇矯な不気味さと死の予感が合さりはやての意識は朦朧としていく。精神的、肉体的に限界は目の前である。

フリーザは静かに手を握り締めようと力が入り込んだ瞬間…彼の腹部に強烈な衝撃が入り込む。

「くつくつく……—うごおお…おお…!？」

突然腹部からの衝撃によってツノや殻などの余計な器官がないシンブルな身体が宙を舞い蒼白の地面を抉り取る。何が起きたのか理解する事もできず無様な構図を晒したフリーザは殺気を放ち憎悪や苛立ち等に塗れて顔面に酷い青筋が浮き出していた。

上半身を引き上げらせ、負の感情を与えた対象が視界に入り込んだ直後…抱えていた全ての感情は消し飛ばされフリーザは絶句する。

「——フリーザ。おめえのスキ勝手にはさせねえぞ…!」

「な………!」

逆立った金色の髪と透き通った碧眼、眼光を放つ悟空の姿に言葉が詰まるフリーザは圧倒されていた。驚愕とも称すべき目の前の現実には彼はただ啞然とした表情を向ける。

悟空の攻撃によって解放されたはやては地面に倒れ付し、朧な意識の海でその先を見据えて絶句していた。それはカリムも同様の心境で驚いた表情で彼を瞳に写す。

「なん、やる……あれ……」

「……黄金の、戦士——まさか！」

蒼白色に煌く地面の真上から黄金の光を反射してより一層、幻想的な風景を描き出していた。この世の物とは思えない現実に圧倒されその場に居る者達は絶句する。

そしてカリムはある一つの予言が脳裏に映像となって回想していた。「聖地の国で古い結晶により異なる次元の死者蘇りし時、黄金の戦士が集結する」……誰もがハズれるであろうと予想した、最も可能生の低い予言。

金色のオーラに身を包む悟空の姿に場は騒然とし、ただ悟空の道着の懷に身を潜めるリインフォースだけはキョトン、とした顔色で彼を見上げており……。

「ど、どうなってるんですかあ……。」

こうして聖王協会襲撃事件は最終局面を向かえ、運命が記した予言通りの壮絶な決戦が始まろうとしていた――。

第14話 野望を阻止せよ！ 伝説の超戦士、孫悟空！！（後書き）

悟飯「こんにちは、悟飯です。石の力でパワーアップしたフリーザと超サイヤ人に変身したお父さん…。ナメック星での出来事を思い出しますね。」

なのは「にやはは…わたし達とは次元が違いすぎて介入できないよ。」

フェイト「うん、だから今はあの人を応援しよう。」

ヴィヴィオ「悟天くんのお父さん頑張れーっ！..！」

リン「悟空さん…。」

フリーザ「宇宙最強はこのオレだああーっ！..！」

アインハルト「次回ドラゴンボールVivid『完全決着！ 闇を切り裂け、光のスーパーかめはめ波！..！』です。」

悟空「終わりだ、フリーザ！..！」

【特別企画】

トランクス「いつもドラゴンボールVividを応援してくれてありがとう。いよいよ次の話で超戦士編は終了だ。」

悟天「今度からは合宿編に入るんだよね？」

トランクス「バカッ！ここでバラすなよ、読者のみんなの楽しみが減るだろ。」

悟天「ご、ごめんトランクスくん……。」

アインハルト「トランクスさんも超戦士編が終わる事を話してしますけど……。」

ヴィヴィオ「あ、なのはママと悟天くんのお兄さんの出会いの物語はデータが消えたので再執筆中です。もう少しだけ待ってね。」

ピッコロ「お前等！ さっさと本題に入らんか……！」

子供組「——！？」

（少し経って）

子供組「じゃじゃーん！ 第1回ドラゴンボールVivid人気投票開催……！」

ヴィヴィオ「投票できるキャラは3人までだよ。」

悟天「今まで登場したドラゴンボールキャラとVividキャラの中から投票してね。」

トランクス「見事1位になったキャラは番外編でそのキャラが主役の話を書けぜ。」

アインハルト「：締め切りは12月頃です。ですが状況によって変更の場合もあるので注意してください。」

子供組「たくさんの投票待ってまーす！」

第15話 完全決着！ 闇を切り裂け、光のスーパーかめはめ波！！

ジースとバータの体は既に消滅していた、悟飯の手によって。それは一時的に聖王教会周辺だけが安息を取り戻せた事に繋がる。

だが完璧に事態は収まったわけではない。気が抜けない状況は今も続いており、緊迫とした重々しい雰囲気なのはとフェイト、シャッハと悟飯達を包み込んでいた。

「え、えっと、もしかして……悟飯くん？」

「うん…久しぶりだねなのはちゃん。正直見違えたよ。」

「久しぶり悟飯くん…！ わたしも、悟飯くんって聞いてすごく驚いたよ。なんだかっこよくなったね…？」

重々しい空気を取り囲む中でなのはと悟飯、二人の再会に思わず両者は無意識の内に頬を緩ませて微笑を浮かべている。

それは無理もない。会う事はないと両者が互いに思っていた筈が、今起きている現状のようにあっさり破られてしまう事は二人にとって想定外だ。

先程までの雰囲気と反した二人の和やかな会話に目を丸くし、フェイトとシャッハは互いの顔を見て困惑を覚えた態度を見せていた。

「な、なのは？ 知り合いなの？」

「え、えつと……ほら、前に話した悟天くんのお兄さん。」

「はじめまして、悟天達がお世話になったみたいで……。」

軽く頭を下げる悟飯の行動には品を感じさせる、彼が語る言葉の調子は不思議と相手に好感を抱かせる不思議な何かが宿っているのだ。その言動と仕草はジースとバータ、あの二人を圧倒した悟飯とフェイトやなのはに接する悟飯とではまるで裏表的な存在。初対面の印象が前者であるフェイトにとって現在の悟飯には奇妙なギャップを抱かせていた。

「い、いえ。こちらこそ……。」

「ところで悟飯くん、どうやってこの世界に来たの？」

「トランクスの荷物にあった発信器を頼りにタイムマシンでね……あ、そうだ！ はいなのはちゃん。」

「え……これ……！」

衣服の懷から取り出した真っ白なリボンを差し出せばなのはは瞳を見開く。そのリボンは本来彼女の私物、決して戻る事のないリボンなのはが悟飯達の世界に訪れ元の世界に帰還する直前、形見代わりとして悟飯に渡した物だ。十数年前に築き上げた思い出が一気に溢れ出し、リボンを受け取る手が震え出していた。

「必ず再会するって約束したから。この世界にいるとは思ってなかったけど。」

「……ありがとう、悟飯くん。」

それから、と言葉を繋げればなのはの頬は赤色に染まっていく。何かを意に決したように息を吸い込んで吐くという作業を繰り返す、そんな彼女の行動は悟飯にとっては奇矯に捉えていた。

疑問を感じて彼女が口にする言葉待。だが一向になのは口に
出そうとしない、ずっと前から…と小さな声は辛うじて悟飯の耳に届く。背後からの軽快な足音も耳で確認しながら。

「兄ちゃん、終わったよ！」

「ママー、わたし達で敵をやっつけたんだよ！　ね、アインハルトさん？」

「はい……なんとか、ですが。」

「悟飯さん達の方も片付いたんだね。」

トランクスは周辺を確認した後に声を掛ける、実際見える範囲では敵の姿が見当たらない。あるのは傷跡とも呼ぶべき瓦礫となぎ倒された樹のみ。それらが散乱して、場所だけ視点を当てれば大惨事以外の何者でもない。

「あれ？ママ、どうして顔が赤いの…？」

「な、なんでもないよヴィヴィオ……それより、みんなお疲れ様かな。」

「こっちも、悟飯さんのおかげでなんとかあったからね…。」

「やっぱり兄ちゃんは凄いや！」

「所でベジータさんは？」

「トランクスさんのお父様なら怪我をしたシグナムさんをヴィータさんの所に連れていった後、何処かへ飛び去ったと聞きました。」

アインハルトの話を聞いて納得したように全員は黙り込む、この世界に住む者は彼等と戦うにはあまりにも戦力が桁違いすぎるのだ。大怪我を負っていても何ら不自然な物はない。

「そっいえば、なんで悟飯さんはオレ達みたいに気が減ってないの？」

サイヤ人の血を引いているからこそ理解できる気という重々しい何か、悟飯の体内で渦巻くそれはトランクスと悟天には不思議以外の何者でもなかった。

「え？　なんでって言われても…ボクから見たら二人の気が大幅に減ってることが気になるな。」

疑問の真意を理解できていない様子で悟飯は首を傾げる、自身の気に異常が見られない事が逆にトランクス達にとっては異常に捉えつつある。

何故なら本来この世界に訪れた際にトランクスと悟天は気が減少した。即ち戦闘力の半減、その異様な現象が悟飯自身に起きているようには見えないのだ。

戦闘力が半減していない悟飯から見れば悟天とトランクスが異様な現象として写っている。

「…ボク達、この世界に来たら気が減っちゃったんだ。」

「この世界に来てから？　それって……——みんな離れろっ！？」

突然、聖王教会を崩壊させる程の爆発が巻き起こったのだ。轟音を響かせ高密度のエネルギーが凝縮されたそれは教会を中心として波紋のように瓦礫と樹が散乱する荒地を飲み込もうと膨張していく。逸早く気付いた悟飯はなのはとフェイト、そしてシャッハを抱えて光景が線になるほどの猛スピードで戦線離脱する。あっという間の出来事になのはとフェイト、シャッハは声すら発する事はできずにいた。

「わっ、悟天くん……!!」

「っ……!？」

ヴィヴィオとアインハルトは瞬間的に身体を支配する浮遊感に戸惑いを覚えてその原因を目に捉える、悟天とトランクス——二人が彼女達をそれぞれ抱えて悟飯と同様に逃走を図っていたのだ。

他にも付近に居た傷だらけの魔導師達を二人の空いた手で抱えながら飛行は続く、やがて一定の地点に辿り着けば三人は降下して地面へと着地する。

「……聖王教会が、爆発したなんて。」

「なのはママ、あれ……!」

「あ、あれは一体……とても人間だとは思えません!」

「……っ、カリムさん、はやてちゃん、リイン、イクス……。」

俯き加減に名前を小さく呟くなのはの表情は読み取る事ができず、遠く離れた距離で破壊された聖王教会の跡地へと視線は注がれていく。

——其処には真つ白な肌の怪物が居た、一見人間のような形状を持つ怪物だが手も足も顔も全てが人間とはかけ離れた生物だ。

崩壊した聖王教会の跡地に佇む怪物と向かい合わせに睨み合う逆立った金髪碧眼の男、後者の人物に悟天は思わず声を上げる。

「あ、お父さんだ!!」

「ですが、少し外見が違うと思うのですが…。」

「超サイヤ人になると、姿や雰囲気は少し変わるんです……。」

「そういえば、悟天くんの時も……。」

「ちょっと待って！ 悟飯くんのお父さんは亡くなっただって…。」

「いろいろあって生き返ったんだ。長くなるから後で話すよ。」

空中を浮遊し燃え盛る金色の炎を身に宿す悟空は真っ直ぐにフリーザへと眼光が貫いていた、その威風堂々とした姿に傷だらけの魔導師達は様々な事を口走り騒ぎ出す。

両者が何者なのかを、彼等は一体何処から？魔導師達にとっては回答が得られない動揺と混乱に満ちた会話ばかりが耳に響く中でなのはだけは過去に悟空が死んだ事を悟飯に聞かされてた為、眼前の光景に一番衝撃を受けていた。

「父さんと対峙しているのはフリーザか、前よりも邪悪な気が強くなってる…。」

「え？フリーザって…パパ達の故郷を破壊した……？」

「故郷を破壊……!?!」

禍々しく輝き続けるオーラを宿すフリーザへと瞳を見開いてシャツハは見据える、残酷極まりない怪物は未だに動作を起こさず悟空と睨み合ったまま。

ただその場に居るだけで互いは途方もないプレッシャーを放ち続けており気が付けばシャツハは酷く冷や汗をかいていた。

「あれが、フリーザ……。」

「はやてちゃん達は、どうなってるの……！」

「大丈夫。父さん達の近くに複数気を感じるから生きてるよ。」

悟飯の言葉になのははほつと安心するように胸をなでおろす、アインハルトとヴィヴィオもまた暗い表情から目を見張って遠方の二人へと眼差しを向ける。

誰もが真剣な視線を注いで、行方のわからない勝負に対して不安を抱えているのだった――。

『穏やかな心を持ちながら激しい怒りによって目覚めた伝説の戦士……』

『星は壊せても、たった一人の人間は壊せないようだな。』

『オレは怒ったぞーっ！フリーザーザーッ！！』

フリーザの脳内で回想するのは忌々しい記憶の欠片、それが一つ一つ鮮明に映像として流れ出し額に青筋を浮かべて金髪碧眼の男へと鋭い眼光を向けている。

自身のプライドを蹂躪された屈辱、刹那に駆け抜けた全身の激痛、それ等がフリーザのプライドをズタズタに踏み潰すには充分すぎたのだ。

『これ以上、貴様と闘ってもムダだとオレは思い始めた……』

『バカヤロー……ッ！……！』

恐怖と見下した感情が交差して、この世で恐れ見下していた人種……超サイヤ人に倒された出来事はフリーザが予想していた敗北の末路だった。

だからこそ防ぎ切れなかった悔しさ等の負の感情が目まぐるしく渦巻いて、フリーザを纏う邪悪な紫色の炎は更に激しさを増して地面に亀裂を刻み込んでいく。

「ふ、ふふふ…現れたなスーパーサイヤ人！ これで誰が宇宙一なのかが決まる……。」

一方、悟空は自身の懷で啞然とした表情を浮かべるリインフォースへと視線を落とす。状況を上手く理解できていない様子で目の前のフリーザへと視線を向けるだけの彼女に。

「おめえ、名前なんていうんだ？」

「ひゃい！ り、リインはリインフォース・ツヴァイですう…。」

悟空の声に振り向いて見上げるような視線で、青い瞳に悟空を写しながら声を発す。穏やかな表情を浮かべる彼に不思議と安心感を覚えさせられながら。

「リインだな…。危ねえから舌嚙まねえようにしっかり掴まっとけよ。」

「…はいです！」

「覚悟しろ！パワーアップしたオレの力で貴様を宇宙のチリにしてやる…！」

リインフォース？は悟空の忠告に従い懷へと自身の身を隠す、それはある種の危機意識が彼女の行動を増長させたに過ぎない。

目の前の真っ白な怪物は咆哮して真正面から悟空へと拳、脚を振り下ろし続ける。その一つ一つの動作だけで周辺へと凄まじい衝撃放を放ち地面や樹が次々と罅入りなぎ倒されては荒地を作り出していく。

視界に入らない速度で動く彼等を認識できない者からすれば突然地面が抉れ樹は破壊され、超常現象が引き起こされているかのように錯覚してしまう程だ。

ドゴオン！ドゴオン！と激しいぶつかり合いによって生じる強烈な轟音にはやて達は圧倒され口を開く事すらなくその現場を見据えていた。強風で舞い上がる髪を片手で抑えて、はやては言葉を紡ぐ。

「…一体、何がどうなっているんかわからへん。戦闘が目に見えないなんて、初めてや…。」

「そうですね…私も、これほどまでの戦闘を見た事ありません。」

「この戦い、なのはちゃん達も見てるんやろうな…どこかで。」

自身の経験と知識を凌駕した異常現象を体感する二人は現場を見据え事の成り行きが良くなるように願うしかない、なのはやフェイト達がこれを見た時…一体何を感じているのか、想像を膨らませながら。

「ハア…ハア……」

「どうしたフリーザ。息切れしてっぞ。」

「うるさいっ！」

戦況はフリーザの不利な状況が続いていた、というのも敵対する悟空は疲れた様子など欠片も感じさせていないのだ。涼しげで余裕を持つ相手の態度にフリーザは憎々しげに瞳を覗かせていた。

「くたばれええーっ!!！」

指先を悟空へと向けて、殺意と憎悪が混沌としながら紅色のエネルギーが凝縮される。瞬時に射出された光線——デスビームを悟空はまるで瞬間移動するかのように避け切ってしまう。

フリーザは諦めずに何度も何度もデスビームを放ち続けるが悟空は姿を消しては現れるという過程を繰り返し避け続ける。回避されたデスビームは遥か上空へと虚しく消えていくばかり。

「あの、リインは無事なんですか…？」

「た、多分大丈夫やと思うけど……。」

攻撃が全く通用しない相手に痺れを切らしたフリーザは白い片手を広げて其処から巨大なエネルギー波を放出し、悟空へと襲い掛かる

——！

「…………っ。」

「悟空さん、リイン、無事でいてや……！」

カリムは緊張感から息を飲む。何故なら光線は悟空と思わしき臃な影を飲み込んでいるのだ。薄っすらと浮かぶ人型のそれは確実に悟空へと命中した証拠である。

——やがて視界に飛び込んできた光景はフリーザの期待を裏切る現象その物。手に汗が滲み、相手の姿にフリーザはある種の疑惑が生じていた。

「そ、そんなバカな……！！　オレは宇宙一のパワーを手に入れた筈だ……それなのに…………。」

全く傷一つ付いていない悟空の姿にフリーザは瞳孔を開き、全身に湧き上がる本能的な警告を感じ取っていた。先程までの攻撃は決して手加減した訳でもなければ油断した訳でもないのだ。

自身が持つ全ての力を注ぎ込んだ、故の結果はあまりにも惨めな現実。……だが一方で悟空は怪訝な表情を浮かべてフリーザを眺めていた。何かが可笑しい、と彼の瞳が語っている。

（どうなってんだ……急にフリーザの気が弱くなった。けど、まだとんでもねえ邪悪な気が消えてねえ……——まさか……！）

奇妙な違和感を覚える悟空は眉を顰めてその原因を探る、それは極微量の違いから悟空は見つけ出す事ができたのだ。

フリーザの気とは異なったもう一つの何か。いや厳密にはフリーザとは異ならない、フリーザと全く同じ気を持つ誰か。そしてフリーザと近すぎる位置にその”誰か”が存在している。

全く同様の気を持つ点とフリーザとはほぼ同じ位置に居る事が、正確な把握を狂わせた原因だがその正体不明の気は時間が経つにつれフリーザをも上回る気を蓄積していつているのだ。

「もう止めるフリーザ！ おめえはその石にパワーを吸い取られてんだ！！」

「なんだと…！？ ぐう！おおお…っ！！」

突然悲痛な叫びを上げるフリーザの姿に全員は瞳を見開く。突如として起きた異変に誰もが疑問を抱いていた、片腕を押えて激痛に堪えるフリーザは先程までの態度と変わり痛々しい物へと成り代わっていた。

「なのはママ…どうなってるの？」

「わからないけど、あの人に何かが起こったんだと思う……。」

「…もしかして、ロストロギアとか？」

「ロストロギア……ですか？ どうしてロストロギアが……？」

「…なんていうか、あの人の様子を見ていると……その。」

「フェイトちゃんの言う事…わかるかも、ロストログアが反応して
るようにも見えるよね。」

フリーザと悟空の周辺を旋回する桜色に輝く球体型の光はふよふよと浮遊する、その光はなのはが扱う魔法の一つ「エリアサーチ」である。

魔力で生成されたサーチャーと呼ばれる端末が球体内に組み込まれておりそれを通してサーチャーが認知した視覚情報を術者に送り込むという魔法。

この場合、術者はなのはとなるので遠くに居るフリーザと悟空の様子が端末を通してなのはに視覚情報として送信されているのだ。

「どついう事でしょうか……？」

なのはの言葉に不可解さを感じたシャッハは不安が入り混じったトーンの低い声で問いかける、理解できない事に少なからず不快な感情を覚えた様子で。

「…多分そのロストログアにフリーザの気が吸い取られてるんだ。」

「あ、だからあんなに苦しんでるんだね。」

「ねえねえ、ロストログアってなーに？」

「ロストロギアはね、大昔に造られたすごく危ない遺産のこと……だよね？」

「うん、よく覚えてたねヴィヴィオ……あの石も、遺産の中の一つ。」

消滅してしまった世界、あるいは既に滅んでしまった技術の結晶——それがロストロギアである。

今フリーザの手に塗り込んだ宝石は邪悪に煌いて力を無造作に吸い取り始めていた、その度にフリーザは悲痛な声を上げ忌々しく宝石が塗り込んだ手へと視線を落としながら。

「ふ……ふぎけるな……！！ オレは宇宙の帝王フリーザだ。こんな……こんな石ごときに……ぐおおおっ！！！」

しかし現在に至るまでの経緯はフリーザにとって屈辱以外の何者でもない。故に怒りは頂点を越して眼前の相手へと牙を向いている。極限にまで高められた負の感情は現状で最も必要とされる行動を無視してただ凶暴な特性を晒すばかり。フリーザは我武者羅に、紺色に染まった夜空へと飛翔していく。

「ど、何処に行ったんや……！！」

「……嫌な予感がします。」

太陽の光は消え、真つ暗な空へと飛翔するフリーザの行動ははやて達にとつて理解出来ない行動だった。なのは達もまた彼の行動が理解できない様子で目を離さずそれを見据えている。

だが時刻は夜を迎えて、暗闇が広がり視界が悪くなる中でフリーザの姿を視界に捉える事自体が難しくなりつつある。――やがて遙か上空に到達したフリーザは暗闇の中で再び気を高めて邪悪な光を発す。その光は地上にいる者達からすれば一つの星空のようにも写るだろう。

「ハア…ハア……宇宙最強はこのオレだーッッッッ！」

凄まじい怒気を孕んだ叫び声が宙を駆け抜ける、強引に気を高め続け歪な光が覆いながら、だがフリーザの行動を目にしても悟空の冷静さは崩れずその張り詰めた険しい表情からは彼の行動を見据えようと視線を向けていた。

フリーザは両手を天高く掲げて禍々しい光弾を形成する。それは夜を照らし出し異様な光を発して巨大化していく、同時に光弾を包み込む邪悪などす黒い光が更に増強させ鋭い牙を向き始める――…その邪悪な光だけは、悟空の持つ記憶と相違が生じて眉を顰めながら。

「あの光はなんでしょうか……？」

「えっ、光？どこにあるの？」

「あそこだね……どんどん大きくなってる、凄い大きさだ……」

地上から上空を見据えて、視界に入り込んだのは一つの光。それは夜空に浮かぶ星のように煌く物だったが徐々にそれは変化していく――ハッキリと視認できる程のサイズになるそれは只の光ではない事が直感的に彼女達は理解していた。

「この星ごと消えて無くなれええええーッッ！！！」

耳にするだけで不愉快さが伴うような、憎悪で塗り潰された咆哮と共に筋肉質な真っ白な手を振り下ろす。特大サイズを持つ光弾…別名デスボールはなのは達、はやて達が居る地上へと滑空する。

「あんなものが地面に直撃したらこの星そのものが破壊されてしまふ……。」

「え……！？」

「うん、それぐらいの威力は持つてるね……。」

どす黒い光が覆い始め、更なる膨張を続ける巨大な光にアインハルトやヴィヴィオは不安な顔色を浮かべ始める。今視界に入り込んでいるそれは世界の終わりを告げる絶対的な存在。

夜空に浮かぶ星のような輝きを発していた光弾は徐々に地上に接近している事を示すように視界にくつきりとそれは写り込んでいく。同時に地面は悲鳴という名の暴風が荒れ狂いながら。

「大変だ！ 急いで止めなきゃ……！！」

「いくぞ悟天！！」

「さて、悟天！トランクス！ ここは父さんに任せるんだ。」

慌ててトランクスと悟天は宙を飛翔しようとした直前、降りかかる静止の声に思わず二人は悟飯へと目を向ける。その瞳は決して揺らぎを見せず、真剣な物である事に二人は立ち止まる事となった。その間にもフリーザが形成した巨大な光弾は力を増していき、大気が震えるように強風が吹き荒れ地震が地上で襲い掛かり、世界の終焉を表すように形を成していく。

「こ、怖いですう……どうなっちゃうんですか……。」

「心配すんな。この星を壊させやしねえ……。」

悟空の懷に身を隠すリインフォース？は巨大な光弾を目にして怯えた声を発す、目の前のそれは只の光弾ではない。異常な程に収束した力の集合体——目にしただけで衝動的に不安を抱かせるそれは恐怖その物である。

見下ろして励ます言葉を投げかければ悟空は腰を低く上空のフリーザを見据えて攻撃態勢へと入り始めていく、その過程がリインフォースにとって印象に残る行動故に瞳を見開ききよとした表情を露にさせながら。

——腰付近に両手を落として構えを取る、同時に悟空自身の体内に持つ気を両手を通して収束させていけば一つの発光体が形成され、それは徐々に膨張して夜を照らし出す。

「あああああああ……めえええええええ……」

暗闇をかき消すが如く閃光は輝き続ける、膨大な気を凝縮し続け前方の敵に牙を向こうとそれは発光し続ける。だがフリーザが解き放った邪悪な光弾と比べればその大きさは圧倒的に小型な物。

「はあああああああ……めえええええええ……」

掛け声と共に発光体は煌く、悟空自身は突如金色の炎を身に纏いそれを燃やし続ける。夜空に輝くそれ等の輝かしさにはやて達、なのは達……魔導師達は静かに見惚れていた。同時に隕石並みかそれ以上の巨大さを誇る邪悪な光弾を覆うどす黒い光でより一層、フリーザが掲げる特大の光弾は威力が跳ね上がり核兵器とは比較にならない程の攻撃力を秘めて更に更に膨張し続けている。

「——波あああああああ——————っ！——！！——」

両手を突き出し、暴風を巻き起こしながら前方の敵を撃ち貫くが如く特大の光線を射出。大気を切り裂いて撃ち放たれたそれはフリーザの強大な光弾に対抗する程の絶大な威力が兼ね備えられていた。それはつまり、今悟空が居る世界——ミッドチルダを滅ぼす程の凶悪な破壊性能が秘めた巨大な光線。一秒よりも速く光の速度となつて視界にも留まらずただ一直線に撃ち出す。

だが圧倒的な威力を目の前にデスボール——いやフリーザが対抗する術は存在しない。勝敗など最初から決まっていたかのようにデスボールはかめはめ波に直撃した途端、衝撃に耐え切れず易々と押し退けてフリーザへと迫り行く。

「おおおお……ッ!?　ちくしょう!!　ちく……しょ……お……う……」。

悔しさに滲んだ声と共に呆気なく自身が撃ち放ったデスボールとかめはめ波に飲み込まれフリーザは塵も残らずに消滅する、惨めな末路を辿る彼に同情を抱く者は誰一人としておらず、直撃した風景を視界に入れた者は安心するように頬に緩みが生じながら。

——やがてかめはめ波とデスボールが遥か上空に消え伏せれば唯一残ったのは青白く輝き続けるロストロギア。ピキーン、と自ら光を発す宝石は先程の攻撃による衝撃からか罅が入り始め小さな欠片と化して穏やかに吹き抜ける風に流されながら地上へと落下していくのであった。

「ふうつ、もう大丈夫だ。」

「な、なんとかなって本当によかったですうゝ！」

夜空に紛れながら、地上に居る者達の姿を確認すれば誰一人として怪我を負っていない事に不意に小さな笑みを浮かべた悟空はゆっくりと降下していく。途中で超サイヤ人から解除すれば元の黒髪黒目へと姿を変えて。

「リイン！怪我はないやんな…！？」

「お父さーん！！」

はやてとカリムは悟空達へと息を切らしながら走り寄っていく。同時に叫び声が駆け抜けてはやて達とは反対向きに走り寄ってきたのはなのは達。悟天は満面の笑顔を浮かべながら悟空を見上げていた。

「はいっ、悟空さんのおかげで助かりました！」

「はあ、はあ……やっと追いついた。二人とも大丈夫そうだよ、ママ！」

「騎士カリム！ご無事で…。」

「よかった……みんな生きてて。」

「正直どうなるかと思いましたが…何事もなくてよかったです。」

悟天の後から追いついてくるのは達は現状に対して安心感を覚えるように緩やかな笑みを浮かべる、先程まで世界自体が危険に晒されていたにも関わらず平和に何事もなかったかのような安息を取り戻した現状には非現実感さえも覚えさせられつつ。

そして地面を踏む沢山の足音に気付いた悟空達は目を丸くしてその張本人へと視線が注がれる、其処には見慣れた女性を初めとして大勢の武装した魔導師達の姿。聖王教会の悲惨な現実に対して眉を顰めるように彼等は直視しながらも、場を取り囲む和やかな雰囲気には疑問を抱いた様子で。

「なのはさん、フェイトさん、怪我は…え？ アインハルトに、ヴィヴィオ…？」

「どうして貴方達が此処に…！？」

「……どうやら終わったようだな。」

スバルとティアナは眼前の本来なら居ない筈の相手が何も不自然なくなのは達に溶け込んでいる様子に啞然とした表情を浮かべており、心境的には他の魔導師達と対して変わらない疑問がぐるぐる脳裏を支配していた。

後に、背後から額や腕に包帯を巻いたシグナムが場の状況を察したように冷静な声で呟けばハツと表情を一変させるヴィヴィオやアインハルト、悟空達は本来の目的の一つを思い出す。

——それは時空管理局、特にスバルやティアナに干渉される前にフリーザ達を倒す事。ばったりと出会ってしまった現状は本来望まぬ形であり慌てて彼等はすぐにヴィヴィオとアインハルトの手を掴んで瞬間移動してしまう。たった一人だけ、悟飯が場に残りながら

白銀色に輝く球体は一筋の真つ白な線を残しながら宙をふわふわと飛行していた、その形状は俗に言う人魂と呼ばれる物に類似している。

ゆらゆらと輝き続ける人魂は光が通らない森の奥へ。何かに誘われるように道を突き進む。ある程度、範囲の広い地点へと到着した途端に地面に描かれた不気味な魔方陣へ吸い寄せられ吸収されてしまう。

魔方陣の外枠に佇むフードで身を包んだ男女が心底不愉快そうに、つまらなさそうに声を上げる。

「やっぱりこいつ裏切る気だったのね。」

「だろうな。だが、その結果が自己崩壊。アレを抑え込めるのは俺達”古の民”でなければ不可能だ。」

森の奥、比較的フリーザと悟空との戦闘で生じた被害が少ない其処は月光に照らされ森林独特の不穏な空気に包まれている。

フードで覆い隠された二名は聖王教会の様子を眺めて、続々と時空管理局の人間が集まっている風景を瞳で捉えていた。

「でも、アレは金髪の男が放ったエネルギーで消滅しちゃったんじゃないの？」

女性が口走る、表情が読み取れない茶色のフードで身を包んだ男に振り返りながら。彼女自身はロストロギアを脳裏に浮かべながら呟く。

「いや、石の反応は僅かだがまだ残ってる…欠片を全て集めればいま一度力が蘇るだろう。問題は金髪の男とその仲間だ…。」

「本当にあいつら何者なのよ。折角お父様から授かったロストロギアの力で負のエネルギーを持つ死者を蘇らせたのに、あんなあっさり倒されるなんて…こうなったら次はもっと強い奴を復活させてやるわ！」

悟空、悟飯、ベジータ、そして悟天とトランクスの事を思い出しては憎々しげに憎悪が入り混じった声で吐き捨てる。

彼等が居なければ、彼等がこの世界に存在していなければ確実に事はフードで覆い隠す男女の計画通りに進行していた。失敗など全くない、成功だけで綴られる未来が。

それを根底から覆した五人組は忌々しい程に女の記憶にこびり付いていた、だが反して男は女と違い平静を失わず彼を中心とした漆黒の魔方阵が展開される。

「……まずは欠片を集める事が優先だ。戻るぞ、ナナ。」

「はい、お兄様！」

真っ黒な粒子が男女を取り囲むように浮遊して閃光が駆け抜ける。
刹那に巻き起こった漆黒の光が彼等を別の場所へと転移させて、森は再び静寂を取り戻したかのように風が吹き抜け森の音を奏でていた。

「なるほど…奴等がフリーザ達を呼び出していたのか。すぐに片付けてやるつもりだったが、奴等が蘇らせた死者をブッ倒していくのも面白そうだ。くっくくく……せいぜい強い相手と呼び出すんだな。」

只一人、背中を樹に預けながら不適に口角を吊り上げてフードを被った男女の様子を静観していた男は愉快そうに声を上げる。これから巻き起こる未来を想像して堪えるように笑う。

不気味な未来だけが描かれながら、悟空達は無事フリーザ達を撃破して一時の安息と平和を取り戻すのであった――。

第15話 完全決着！ 闇を切り裂け、光のスーパーかめはめ波！！（後書き）

（おまけ／その頃のピッコロ達待機組）

「……………」

「グイグイオ達行っちゃったね。」

「うん。ちょっと心配だけど、トランクスくん達がいるからきつと大丈夫だよ。」

「……………」

「ねえ、コロナ。あの人、顔色悪く見えない？」

「え？ う、うん…気分が悪いのかな。」

「多分そうだよ。だから一人だけ追いかれたんじゃ…。」

「ふふふっ、ピッコロ。あんたこの子達から病人だと思われてるわよ。」

「…………元々こういう顔色だ。」

（新次回予告）

悟空「オッス！オラ悟空！！ あいつら何者なんだ？ フリーザの

魂が吸い込まれちまったぞ。」

ピッコロ「フリーザ達が蘇ったのは奴等の仕業と見て間違いなさそうだな。」

ベジータ「ふん、一度倒された奴等などオレの敵ではない。」

ヴィヴィオ「この前の闘い凄かったね。わたしもこの合宿で強くなれるかな。」

アインハルト「私も修行すれば、あんな風に強くなれるのでしょうか。」

トランクス「オトナ達だけ気が減らないなんてズルいよな。オレ達も合宿で力を取り戻すぞ！」

悟天「うん！ みんなでお泊り楽しみだなあ。」

フェイト「今年は賑やかになりそうだね。」

なのは「みんなーそろそろ出発するよーっ！」

悟空「次回ドラゴンボールVivid『力を取り戻せ！ チビ達のドタバタ合宿修行』」

悟飯「あれ？ お父さんとベジータさんは行かないんですか？」

（特別企画第2弾）

悟天&トランクス「パンパカパーン！ ドラゴンボールVivid
特別企画第2弾！！」

ヴィヴィオ「今回はこれからのお話で出てくるかもしれない悟天く
ん達の世界の仲間達をアンケートで募集するよ。」

アインハルト「一人につき投票できるのは5人までですので、間違
えないようにしてください…。」

悟天「この中から選んでね。」

- 1、トランクス（未来）
- 2、ミスター・ブウ（魔人ブウ／善）
- 3、ミスター・サタン
- 4、クリリン
- 5、ヤムチャ
- 6、天津飯
- 7、餃子
- 8、ヤジロベエ
- 9、バーダック
- 10、キビト神
- 11、亀仙人
- 12、孫悟飯（未来）
- 13、ビーデル
- 14、18号
- 15、17号
- 16、タピオン
- 17、ハイヤー・ドラゴン
- 18、パイクーハン

19、ターブル
20、ウーロン

トランクス「期限は大晦日が終わるまでだ。たくさんの投票待ってるぜ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7622p/>

ドラゴンボールViVid

2011年11月4日22時22分発行